

砂防広報センター30年のあゆみ

砂防広報センター 30年のあゆみ 編集にあたって

NPO法人土砂災害防止広報センター
参 与 保科 幸二(前 理事長)
理事長 山本 賢一郎

NPO法人砂防広報センターは、気候変動に伴って激甚化する土砂災害と、激変する社会経済環境による競争化時代に対応すべく、組織の体制に改めるとともに、法人名称を砂防広報センターから土砂災害防止広報センターに変更し、新たな一歩を踏み出しました。

砂防広報センターはこれまで、土砂災害防止月間の全国大会や防災キャンペーン、砂防関係の博物館や資料館、各種フォーラム・シンポジウムなど、砂防の中核的な広報を数多く手掛け、砂防事業の周知と防災啓発活動の一翼を担ってきました。時に、国や地方公共団体の防災担当者に対して、また危険区域周辺に住む住民に対して、あるいは都市地域に住む一般の人々に対して、直接に間接に、様々な広報活動を展開してきました。また、安全で安心な国土づくりのための行動スローガン「知らせる努力・知る努力」、また「自助・共助・公助」など、広報活動を象徴するキーワード創出にも関わってきました。

土砂災害防止法が制定されて以来、ハードばかりでなくソフト対策をも含め、砂防行政が所掌する範囲は著しく拡大し、その責務は益々重くなり、より高度な判断が求められるようになってきています。

小中学校教育の学習指導要領が防災教育を重視する観点から改定されたことは、防災対策の歴史上、画期的なことと特筆されます。新しい教科書も次々と出版され、防災教育支援を実務レベルで展開していくための、砂防及び防災部局の本格的な取り組みが急がれる状況です。

また一方で、中山間地域の地域振興策における砂防の具体的な寄与が、強く求められていることも見逃せません。

自然環境の激変と共に頻発する局地的集中豪雨等により、土砂災害がいつどこで発生してもおかしくない状況にあって、土砂災害対策がクローズアップされる昨今、砂防・防災広報の役割、重要性は高まるばかりであると同時に、時代に適応した広報の在り方が根本から問われています。

人びとに解り易く、かつ効果的に知らせる。そういう「広報」という仕事は、文化芸術にも共通する特有の感性と技術を必要とする分野ともいえます。これを一般土木技術で代替するのは適切ではなく、防災広報に特化した「広報のための目」を持つ技能集団が必要と考えます。

広報の必要性が高まる一方で、予算上、契約上の逆風がなかなか収まらないようにも見うけられますが、逆風のなかでの創意工夫が求められていると言えるでしょう。

「30年のあゆみ」の編集にあたっては、今までの歩みとともに、今後、広報業務を展開していく上で礎となるであろうと期待される知見、ノウハウを収集・紹介することにも努めました。この機会に、自ら砂防広報センターの30年を振り返るとともに、関係諸氏には本誌をもって当センターに対するご理解を賜りたいと切に願うものであります。

平成26年12月

砂防広報センター 30年のあゆみ 目次

砂防広報センターの30年

1	長崎豪雨災害の教訓を踏まえて	6
2	国民の「土砂災害」そのものへの認識を深めるための取り組み	8
3	環境を守り、育む砂防事業を伝えるための取り組み	10
4	「危険な場所」を知らせる取り組み	12
5	「地域のつながり」を育む取り組み	14
6	「知らせる努力・知る努力」の契機となった6.29豪雨災害	16
7	災害の教訓を地域の若い世代に伝える取り組み	18
8	自然環境の変化と多様化する行政の情報提供を受けた取り組み	20
9	突きつけられた現実 ～これからの私たちの活動～	22

砂防広報センターが取り組んできた主な業務

1. 土砂災害防止啓発資材の開発・制作		
1-1	土砂災害防止月間・雪崩防災週間などの啓発資材	24
1-2	印刷物	26
1-3	映像	28
1-4	模型・実験装置・体験装置	30
1-5	砂防資料館	32
2. 土砂災害防止啓発イベントの企画運営		
2-1	全国大会・フォーラム・シンポジウム	34
2-2	国際博覧会・国際会議	36
3. 地域防災力向上のための施策の支援		
3-1	学校における防災教育の支援	38
3-2	災害の記録、防災文化の掘り起こし	40
3-3	対話型行政と住民の地域学習活動への支援	42
3-4	砂防フィールドミュージアムの提案	44
3-5	スマートフォン防災アプリの開発	46

資料集

1	「月刊メディア砂防」特集記事に見る砂防をめぐる動き	50
2	「月刊メディア砂防」歴代砂防部長の年頭の辞に見る砂防行政の動向	55
3	土砂災害防止月間・雪崩防災週間ポスター	66
4	制作した映像	73
5	企画・制作に関わった砂防資料館、砂防フィールドミュージアム	79
6	「土砂災害防止推進の集い（全国大会）」の記録（1995年度以降）	80
7	「火山砂防フォーラム」の記録	82
8	「地すべりフォーラム」の記録	86
9	「雪崩防災週間シンポジウム」の記録	87
10	砂防広報センター歴代役員	90
11	砂防広報センター年表	92

砂防広報センターの30年

1. 長崎豪雨災害の教訓を踏まえて

1982（昭和57）年7月23日夕刻から降り始めた豪雨は、長崎県長崎市を中心とする九州北部地域に大きな被害をもたらしました。いわゆる「長崎豪雨災害」です。午後7時からの1時間に長与町役場で観測された187mm/hは、記録的短時間降雨などの概念が定着した現在も日本観測史上最大の記録です。

この豪雨による長崎県内の被害は死者・行方不明者299名、住戸全壊584棟、被害額は約3,153億1千万円という激甚なものとなりました。この災害では、洪水と土砂災害によって人的被害が発生しましたが、そのうち土砂災害による犠牲者が大半（262名）を占めたことが大きな特徴です。

日本には戦後から昭和30年代にかけて枕崎台風（昭和20）、カスリーン台風（昭和22）、狩野川台風（昭和33）、伊勢湾台風（昭和34）など大型の台風が次々と来襲、戦後復興を目指す日本全体に大きなダメージを与えました。このような状況を踏まえ、当時の建設省（現・国土交通省）も、下流域の河川改修事業、上中流域における砂防事業等を集中的に推進、その結果、昭和40年以降日本における台風上陸等に伴う洪水・土砂災害は激減します。

一方、高度成長期を経て成熟期を迎えた日本では人口が急増し、もとより平地の少ない国土事情も相まって、中山間地域への無秩序な宅地開発が急速に進展していきました。

昭和40～50年代にかけては、公共事業が強力に推進された結果、中小規模の災害が抑制されたことで、国民の意識は経済成長や豊かな暮らしを手に入れることに傾注し、自然災害に対する警戒意識が薄れていった時代とも言えます。

長崎豪雨災害の教訓を踏まえ、気象予報の精度向上、情報伝達の確実性の向上などが課題として挙げられましたが、土砂災害についても急傾斜対策工などハード対策の一層の推進と共に、警戒避難体制の確立、防災意識の普及など、各種ソフト対策の強力な推進の必要性が指摘されました。

『川の洪水には注意していたが、まさか裏山が崩れるとは…』という長崎豪雨災害被災者の言葉の通り、古来「山津波」「蛇抜け」などと呼ばれて恐れられてい

た土砂災害に対する脅威は、コンクリートやアスファルトで固められ、たくさんの家が整然と立ち並ぶ風景の中でいつの間にか消失していました。長崎豪雨災害当時の報道や行政機関の記録などにも「山崩れ」という言葉が多用され、「土砂災害」という言葉を見つけることはできません。この災害を契機に「土石流」という言葉がようやく広辞苑（第三版・昭和58年刊）に収蔵されることになります。

高度成長の中で見失ってしまった、国民の「土砂災害」への警戒心を呼び覚ます。これこそが砂防広報センター設立の際に負った使命であったと言えます。



惨状の第一報を伝える被災翌日の新聞記事（提供：長崎新聞社）



斜面崩壊と土石流により多数の犠牲者を出した1982年の長崎豪雨災害

2. 国民の「土砂災害」そのものへの認識を深めるための取り組み

「長崎豪雨災害」の翌1983（昭和58）年、当時の建設省（現・国土交通省）は全国の都道府県と共に、土砂災害発生危険性が高まる梅雨期を迎える6月を「土砂災害防止月間」に制定し、広く国民に対して土砂災害への警戒を呼びかけはじめました。同年7月には、土砂災害に対する国民の理解を深めるための催事「土砂災害防止推進の集い（全国大会）」を長崎県長崎市で開催、砂防行政関係者はもとより有識者や災害を経験した住民の皆さんにも参加いただき、災害の教訓や今後の対策などについて意見交換を行いました。この催事は2010（平成22）年に「土砂災害防止 全国の集い」と改称し、現在まで毎年1回、土砂災害防止行政担当者、開催地住民を対象として全国各地で開催されています。

この年に砂防広報センターは、千代田区平河町で産声を上げました。以来、建設省（国土交通省）、都道府県の主催する「土砂災害防止推進の集い（全国大会）」の企画・運営に深く係ってきました。

土砂災害という言葉の浸透を目的として、6月の「月間」にあわせたポスター等の印刷物や広く国民に配布するためのキャンペーン用品の販売、「砂防カレンダー」の企画制作・販売を設立後、間もなく開始しています。

報道機関に対する啓発も必要でした。現在ほど土石流の実写映像が確保されていなかったこともあり、砂防広報センターには、建設省砂防部から『できるだけリアルな土石流のイラストを描いてほしい』というリクエストが寄せられたこともあります。砂防部職員と相談しながら、何度も描きおこし、放送局に持ち込んで土石流という現象について説明を行うなど、地道な努力を共に積み重ねてきました。

自主事業にも積極的に取り組み、その後の砂防関係機関の啓発資料づくりの基礎資料となることを目的としたパンフレット「土砂災害を防ぐために」を自主制作したほか、全国の主要都市にて広く市民を対象とするセミナーを開催するなど、「土砂災害」の啓発に努めています。

創設期当時は、印刷物に代わる新しい情報伝達手法としての動画が広く浸透した時期でもありました。

土砂災害を啓発する数多くの印刷物とともに、全国の砂防関係事務所管内の過去の土砂災害、砂防事業などを映像で紹介するVTR作品の製作に数多く取り組んでいます。



土砂災害防止月間を告知するポスター



名称を「土砂災害防止全国の集い」にあらため、現在も継続されている全国大会



長崎市における第1回全国大会を報じる新聞記事（長崎新聞、1983年6月8日）



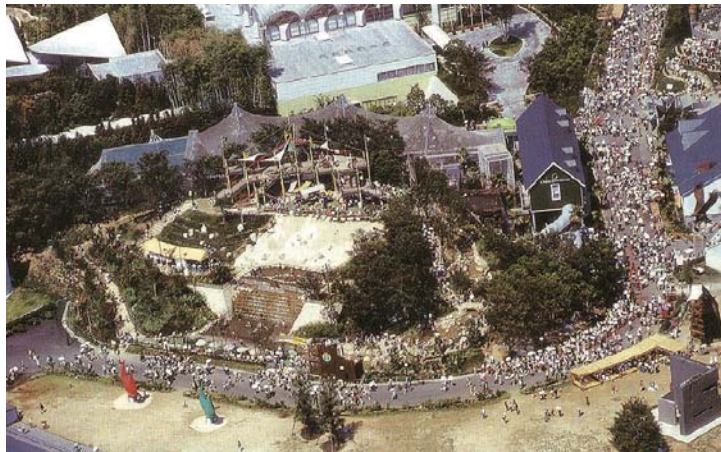
土砂災害防止月間のロゴマーク

3. 環境を守り、育む砂防事業を伝えるための取り組み

昭和30年から40年代の日本を席卷した公害問題。各種規制や環境技術の進展などによって日本の大気や水、土壌の汚染には歯止めがかかりました。しかし21世紀を目前にした昭和50年代後半から60年代にかけて、熱帯雨林の伐採等による地球環境の破壊、エネルギー枯渇などの問題が世界的にクローズアップされ、環境への意識の高まりがひとつのムーブメントとなりました。

そのシンボルともなったのが1990（平成2）年4月から9月にかけて大阪市と守口市にまたがる鶴見緑地を会場として開催された「国際花と緑の博覧会」です。「花と緑と人間生活のかかわりをとらえ 21世紀へ向けて潤いのある豊かな社会の創造をめざす」をテーマとするこの博覧会には、国内外より2,312万人を超える来場者が訪れました。

この時代が求めた環境へのやさしさ、失われた自然の復元は、砂防事業が有する特長のひとつでもありました。当時の建設省砂防部は「国際花と緑の博覧会」の常設展示として「さぼうランド」の出展を決定、滋賀県田上山で行われた山腹工などの砂防事業をモチーフとし、石積みの砂防堰堤を中心に配した「庭園型展示」を実施しました。



「さぼうランド」

「さぼうランド」は、各パビリオンめぐりで疲れた多くの来場者の疲れを癒す場となったばかりでなく、周辺地域に無料で開放されたこともあって、多数の地元幼稚園児、小学生などが会期を通して訪れ、主催者はもとより地域からも高い評価を得ることとなりました。最終的に、当初の予想をはるかに上回る150万人を超える方々に来場いただき、「さぼう」の役割を伝えることができました。

砂防広報センターは、この「さぼうランド」の構想段階からスタッフとして加わり、展示基本計画から設計、工事・製作に加え、「さぼうランド」のガイドとして会期を通して活躍した「フェアリーメイツ」の募集・人選・研修・運営までを幅広く支援しました。「さぼうランド」のアトラクションとして採用された「雨たいけん室」は特に評判を呼び、のちに各事務所でも保有・活用されることになった「降雨体験装置」「土石流模型実験装置」の開発の端緒となっています。また、この時に蓄積したノウハウ等が評価され、2005（平成17）年に愛知県瀬戸市・長久手町で開催された「2005年日本国際博覧会（愛・地球博）」の開催時にも、国土交通省出展のうち砂防にかかわる出展の企画製作運営を支援しています。



「さぼうランド」竣工式



滋賀県田上山での工法を再現した山腹工



堰堤前で水遊びをする子供たち



石積砂防堰堤



「雨たいけん室」



天然石を使った流路工

4. 「危険な場所」を知らせる取り組み

1990（平成2）年11月、長崎県雲仙普賢岳が198年ぶりに火山活動を再開。翌1991（平成3）年5月には土石流・火砕流が発生するなどし、流下域にあった地元長崎県島原市と深江町（現在の南島原市）の一部住民は避難を余儀なくされました。島原市・深江町が適切な避難勧告・指示等を発令するためには、土石流や火砕流の影響の及ぶ範囲の想定が不可欠でした。

5月25日、島原市は、土石流・火砕流の発生に鑑み、一般財団法人 砂防・地すべり技術センターに火山災害予想区域図（いわゆるハザードマップ）の作成を要請します。43名の犠牲者を出すこととなった大火砕流が発生した6月3日には間に合わなかったものの、翌日4日には同センターがこれを提示、即座に公表されました。島原市長らはこの予想区域図に基づき、わが国で初めての警戒区域を設定し、住民等の立ち入りを禁止しました。6月8日夜にはふたたび最大規模の火砕流が発生したものの、災害予想区域図で想定した範囲を流下したため、警戒区域の設定によって新たな犠牲者を出すことは未然に回避されました。すでに日本国内では火山噴火を想定したハザードマップが北海道駒ヶ岳・十勝岳で作成・公表されていましたが、その有効性が雲仙普賢岳の現実起きた災害の中で認識されたのです。

これ以降、「危険な場所を示す地図」すなわち「ハ

ザードマップ」の作成・公表が国を挙げて推進されることとなります。活火山周辺では1993（平成5）年以降、当時の国土庁と建設省が全国の主な活火山においてハザードマップの作成・公表を強力に推進し、土砂災害に関しても、ハザードマップの作成に必要な土砂災害危険箇所の調査が、全国の都道府県砂防所管課によって着手されることになります。

砂防広報センターの成果にも、このような動きを踏まえた変化が見受けられます。具体的には、活火山を抱える国・都道府県の砂防事業関係事務所から、火山噴火で想定される災害予想区域図を表した立体マップの製作依頼が多数寄せられました。また、身の回りの土砂災害が起きやすい場所を調べ歩く「まち歩き」をサポートするための、小学生向け副読本を教育関係者との協働で作上げたのも、このような動きを踏まえたものです。

また、雲仙普賢岳の災害を契機として、全国の火山防災担当者や火山学者が毎年1回、一堂に会し、火山砂防事業を含む火山防災対策について情報共有と意見交換を行なう「火山砂防フォーラム」を実施することとなり、その第1回フォーラムが群馬県草津町で開催されました。砂防広報センターも、委員会の立ち上げのサポート、企画・運営支援などにかかわっています。



焼岳火山防災マップ（立体地図）



火砕流の映像を収めようと取材する報道陣
被害が出る前で、危険な取材という緊張感はない



雲仙普賢岳噴火災害をきっかけに始まった火山砂防フォーラム

5. 「地域のつながり」を育む取り組み

1995（平成7）年1月17日午前5時46分、淡路島北部沖の明石海峡を震源とする兵庫県南部地震（M7.3）が発生。北淡から阪神地区を通り宝塚へ至る帯状の大都市地域に大きな被害をもたらしました。死者・行方不明者は最終的に6,347名^{（1）}に及び、の約8割は木造家屋の倒壊による圧死でした。民家はもちろん大型ビルの倒壊や阪神高速道路神戸線などの道路、河川、港湾等の社会基盤施設も大きな打撃を受けました。地震が早朝に発生したため公的機関職員の参集は遅れ、通信網が破壊されたことによって被害調査や情報伝達が計画通り機能せず、人命救出や消防部隊の現場到着が大幅に遅れ、その後の救援物資の輸送にも大きな影響を与えました。

また、地震に伴って多発した土砂災害によっても、多くの人命が失われました。

この災害では危機管理体制のあり方に対する抜本的な見直しの必要性が示唆されたほか、普段からの近隣や地域社会とのつながり、結びつきの重要性が再認識されることとなりました。公的な支援が得られない状況の中、瓦礫の下から救出された人のうち約8割は家族や近所の住民らの力によって救われたものだったのです。公的機関による「公助」に加え、「自助」「共助」の重要性が強く認識されることとなり、核家族化や単身世帯の増加等によって希薄となった地域のつながりを再構築しようという動きも活発化の兆しを見せ始めます。地域で協力し合う体制や活動の中核として、自

主防災組織の組織化を行政機関が支援するようにもなりました。

いまでは大きな災害が起きると各地から民間ボランティアが駆け付けるようになりましたが、阪神淡路大震災はこのような動きの拡大の契機としても位置付けられます。砂防部局でも、建設省（現・国土交通省）砂防部の呼びかけに応じて砂防部局OBを中心に346名の砂防技術者が災害直後の現地に赴き、千箇所以上の土砂災害危険箇所を点検し、危険度を判定、その結果を関係機関へ連絡することにより二次災害防止に大きく寄与しました。これが現在まで続く「砂防ボランティア」組織化の端緒となっています。

このような防災行政機関の動きを踏まえた砂防広報センターの活動内容の変化として、印刷物・映像等の製作物、セミナーや「全国大会」に代表される啓発催事の企画・運営に関する業務受注に加え、「地域防災力の向上」を目的とした地域間コミュニケーション促進活動の支援を行う業務の受注増加が挙げられます。湯沢砂防事務所「魚沼自然塾」に代表される、地域の自然環境や土砂災害にかかわる資源の掘り起こし、若い世代への伝承といった活動を、官民一体で推進してゆく新たなスキームが生まれたのです。

（1）阪神・淡路大震災の被害確定について（平成18年5月19日消防庁確定）



「木曽川エクスカーショ」でのそば打ち体験



砂防ボランティアによる現地見学会（福島砂防ボランティア協会）

「魚沼自然塾」のひとこま



芋川流域で中越地震被災地を見学



魚沼丘にて地形・地質、地すべり地を見学する参加者

6. 「知らせる努力・知る努力」の契機となった6.29豪雨災害

1999（平成11）年6月28日から6月29日にかけて、梅雨前線の活発化に伴い、九州北部から中部地方にわたる広い地域で100mm超の時間雨量を計測し、28府県で浸水災害や土砂災害が発生しました。特に広島県広島市・呉市では6月29日午後から雨脚が強まり、広島市安佐北区、安佐南区、佐伯区、呉市内を中心に斜面崩壊や土石流が同時多発的に発生（土石流等災害：139箇所、がけ崩れ災害：186箇所⁽²⁾）、土砂災害による広島県内の死者・行方不明者は24名に上りました。

被害が拡大した背景には、花崗岩の風化土壌『マサ土』が広く分布する中国地方の地質的な特徴に加え、もともと平地の少ない広島県内で進んでいた山間部への宅地開発の拡大がありました。土砂災害のリスクの高い谷の出口など、これまで人が住まなかったところを民間業者が開発し、古の人びとが土砂災害のリスクを後世に伝えるために残した地名を「○○ヶ丘」などと改めて売り出す。それによって土砂災害危険箇所が増加するという悪循環が生じていたのです。『せっかく念願のマイホームを手に入れて、想像もしていなかった土砂災害に見舞われた』という悲痛な声を多数の広島市民から耳にしました。

この災害を契機に小渕内閣総理大臣（当時）の強い意向もあり、2000（平成12）年5月「土砂災害警戒区

域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」（以下、土砂災害防止法）が制定され、土砂災害防止工事等のハード対策とあわせ、危険性のある区域（特別警戒区域、警戒区域）を明らかにし、そのうえで区域を有する市町村の警戒避難体制の整備や、危険箇所への新規住宅等の立地抑制等のソフト対策を一層強力に推進していくことが決まりました。「土砂災害防止法」の制定に伴い、土砂災害からの減災に向けては、行政の「知らせる努力」と住民の「知る努力」とが相乗的に働く社会システムを構築していくことが、土砂災害防止対策の基本理念とされました。

砂防広報センターが企画の支援を行っていた「全国の集い（全国大会）」等の啓発催事においても、「知らせる努力・知る努力」をテーマに掲げ、地域住民にも参加を求め、具体的な方策を探るための意見交換が行われるよう留意してきました。また、行政側の「知らせる努力」の支援として、土砂災害に対するリアリティを高めるための3D映像システムの開発、IT技術を活用した情報提供手法の開発支援、住民の防災意識等を把握するための意識調査等の業務が増加したのもこの時期からです。

（2）6.29災害速報パンフレット（平成11年9月広島県砂防課）



6.29豪雨災害（広島市五日市町の被災状況）



地域イベント等に出展し人気を集めるエアレント式3Dシアター



火山噴火に対する意識調査（2009年、鹿児島市黒神地区）

7. 災害の教訓を地域の若い世代に伝える取り組み

2000（平成12）年3月31日午後1時7分、北海道の有珠山が22年ぶりに噴火しました。地域では27日からの有感地震の増加を受けて、地元の研究拠点を置く研究者と周辺市町が速やかに連携、29日には住民避難を開始、噴火時には1万5千人を超える住民が避難を終え、噴火による人的被害ゼロを達成しました。

この成果を達成した要因のひとつには危険な場所を知らせる「火山防災マップ」が作成され、全戸配布されていたことがありますが、もうひとつ重要な点が指摘されています。前回の噴火（1977～78年）の時、呆然と噴火の様子を眺め、避難行動を起こさなかった地域の現状を憂い、研究者と地元行政が一体となり、活火山を学ぶための防災教育を地域に根付かせ、地道に継続してきたことです。現在でも有珠山山麓では、小学生は必ず地元研究者と共に昭和新山に登り、地熱で卵を茹でて食べるという経験をします。感性豊かな年頃ごろに体で感じる経験を通して、有珠山が活火山であることを強く心に刻むのです。こういった取り組みを20年以上にわたって継続してきました。この学習を通して、火山に興味を抱き、学び続けた人材が役場職員として勤務してもいます。このような環境が円滑な避難行動にいかにつながったかということは想像に難くありません。

阪神・淡路大震災後でも、「関西圏において大きな地震は起きない」と考えていた人が多かったことを踏まえ、地震に関する防災教育の重要性が指摘されまし

た。東海地震等のリスクの高い静岡県などにおいては既に取り組みが進んでいましたが、有珠山周辺の成果によって全国的に防災教育に取り組むべきという意識が波及・浸透し、2011（平成23）年の学習指導要領の改訂に結び付いていきます。国土交通省砂防部もこのような時勢の変化をとらえ、小中学校等における防災教育の実践の支援を行う関係事務所等を対象とした「土砂災害防止教育支援ガイドライン（案）」を作成し、公表しています。

砂防広報センターのかかわる活動では、2003（平成15）年以降の火山砂防フォーラムにおいて、開催地周辺の若い世代が火山に関する研究発表を行うことが主流となっています。秋に行われることの多いフォーラムに向けて、地元の火山に関する学習を行い、その成果をフォーラムにおいて発表するのです。フォーラム開催後もその学習体系を継続している地域も多く、防災教育のすそ野の拡大に一役買っています。

そのほか、地域の小中学生、成人を対象とする学習コースの設定の支援、防災教育の効果測定、データベース構築支援等に関する業務も増加したほか、従前から商品化していた種々の模型実験装置に対するニーズも大きく増加し、現在の砂防広報センターの活動の根幹ともいえる分野に成長しました。

これらの業務等を通して得た多数の経験知は国土交通省砂防部作成「土砂災害防止教育支援ガイドライン（案）」の中にも多数反映されています。



火山噴火現象をビクトグラム化する授業



2014年火山砂防フォーラムに向けた授業支援（山梨県富士吉田市吉田中学校）



児童が作成した「岩手山見どころマップ」をパーキングエリアで配布

8. 自然環境の変化と多様化する行政の情報提供を受けた取り組み

2008（平成20）年の新語・流行語大賞の一つに「ゲリラ豪雨」が入りました。

地球温暖化の影響によるとされる局地的集中豪雨の増加は、防災行政に様々な変革を迫っています。気象情報に関してもこの数年間で、従来の「警報」の発表基準をはるかに超える豪雨や大津波等が予想され重大な災害の危険性が著しく高まっている場合、「特別警報」を発表することになったほか、「記録的短時間大雨」「これまで経験したことのない大雨」等の表現を適宜用いて国民に警戒をうながすようになりました。

土砂災害が起こる可能性が高くなったことを示す「土砂災害警戒情報」が2002（平成14）年から試行されたのち、情報を発表する都道府県を順次拡大し、2008（平成20）年3月以降、全国の都道府県で発表されるようになりました。行政側の「知らせる努力」は自然環境の変化を受けて、より適切な情報を国民に伝えるべく、多様化しています。

行政側からの提供情報の多様化は、高度化するIT技術と相まって、インターネットによる防災情報の提供を急速に推し進めました。現在、全国のほとんどの都道府県で危険箇所情報、降雨情報、土砂災害警戒情報等の発令状況等をワンストップで検索可能な防災ポータルサイトを構築しているほか、一般財団法人河川情報センターなど関係機関でも、携帯電話などで閲覧可能な雨量情報等を提供するようになってい

また、マスメディアの「気象情報（天気予報）」でも、大雨が予測される際には土砂災害への警戒をうながす言葉が必ず添えられるようになってきました。砂防部局の継続的な働きかけが形となったものです。

パソコンやスマートフォンで多様な情報が入手できるようになった今、「住民による自発的な情報収集」すなわち「知る努力」は浸透してきているのでしょうか。

残念なことですが、近年の土砂災害発生後の住民の声から、それを感じることはありません。もとより土砂災害など自然災害に関する情報は日常の関心事ではなく、むしろ遠ざけたい情報というのが国民の本音であり、一方では自然な姿とも言えます。砂防広報センターの活動もそういった住民の意識を踏まえたものに变化してきています。

自然災害に関する遺構などを地域資源に見立てた屋外型ミュージアム「砂防フィールドミュージアム」の推進、各地のジオパークとの連携、急速に普及するスマートフォンのアプリケーション開発など、住民の皆さんが楽しい時間を過ごし、結果として土砂災害に関する知識を蓄え、地域防災力の向上に寄与するような活動に注力しています。

また2013（平成25）年以降、自らのHPについても、より住民や学校の教師の視点を意識して、あり方を大きく見直しました。それが「防災学習お役立ちページ」の創設に繋がり、結果として大幅なアクセス増に貢献しています。



2013年4月に大幅な改訂を行ったホームページ



駒ヶ根砂防フィールドミュージアムのモニターツアー（2014年10月）



砂防情報センターを見学する駒ヶ根モニターツアーの参加者



磐梯山ジオパークの代表的ジオスポット「銅沼」



スマートフォン向けアプリケーション製作で連携した磐梯山ジオパークのロゴ

9. 突きつけられた現実 ～これからの私たちの活動～

2014（平成26）年7月より組織名称を「土砂災害防止広報センター」とし、新たなスタートを切った矢先、7月に長野県南木曽町で、続く8月には広島県広島市で土砂災害が発生、特に広島県の災害では、一夜にして74名もの尊い人命が失われるという大惨事となりました。

これらの地域は、いずれも過去に大きな土砂災害を経験しており、「砂防広報センター」時代には土砂災害の減災に向けた啓発活動を推進した地域でもありました。同じ地域で土砂災害が繰り返された、過去の教訓が活かされなかったという現実は、私たちの活動が、道半ばであることを痛切に感じさせるものでした。

災害後、私たちのホームページには全国の砂防部局を含む行政機関・報道機関はもとより、自主防災組織や個人に至る様々な方々からの問い合わせが寄せられ、2014年8月の当法人ホームページへのアクセス数は2万を超えました。問い合わせの内容は、これか

ら啓発活動を行う上での資料や情報の提供を求めるものが大半を占めます。いずれも、私たちのこれまでのノウハウや情報・資料のストックで充分に対応ができたものでしたが、これによって「情報・資料は存在するのに、活用が充分に図られていない」という現実を、私たちは改めて認識することになったのです。

行政機関からの業務受注を基幹活動として活動してきた私たちですが、「土砂災害防止広報センター」となったこれからは、その法人名称に恥じないよう、土砂災害の犠牲者を一人でも少なくすることを目指して、ホームページ等を活用した広く一般に向けた情報提供・啓発や、過去のノウハウ・資料等を活用した自主防災組織の支援など、活動の幅を広げ、これまで以上に土砂災害防止啓発活動を推進していく決意です。

皆さまのご支援・ご協力をこれからもよろしくお願い申し上げます。



2014年8月、広島市の災害現場を自主撮影し、土砂災害の脅威をご理解いただくため、全国に提供している

砂防広報センターが取り組んできた主な業務

1. 土砂災害防止啓発資材の開発・制作

1-1 土砂災害防止月間・雪崩防災週間などの啓発資材

1982（昭和57）年の長崎豪雨災害（昭和57年長崎豪雨）をきっかけに、土砂災害への備えとして、ハード対策とともに、防災意識の普及や警戒避難体制の確立といったソフト対策の重要性が広く認識されるようになった。建設省（現・国土交通省）は全国の都道府県とともに、翌1983年から毎年6月を「土砂災害防止月間」に制定、国民に対する土砂災害防止啓発活動を推進していくこととした。そうした背景の中、土砂災害の実態や災害防止策などについて広く国民の理解を得るための「広報事業」の展開を目的として、1983年11月に砂防広報センターは設

立された。

砂防広報センターがはじめに取り組んだのが、土砂災害防止月間キャンペーン事業の支援であった。月間を告知するためのポスター・チラシ、土砂災害や砂防について解説する展示用パネル、さらにキャンペーン用品の企画制作などを手がけ、これらの広報資材によって、当時はほとんど知られていなかった「土砂災害」や「土石流」といった言葉とその意味を、一般の人々にも認知してもらえるよう、より効果的な広報手法を模索していった。

土砂災害防止月間・雪崩防災週間のポスターおよびチラシ

土砂災害防止月間は1984（昭和59）年度から、雪崩防災週間は1989（平成元）年度に創設された当初から、砂防広報センターがポスターやチラシの制作を手がけている。



最初の土砂災害防止月間ポスター



土砂災害防止月間チラシ



雪崩防災週間ポスター

キャンペーングッズ

土砂災害防止啓発イベントで参加者に配布するため、さまざまなグッズを開発してきた。



背面に土砂災害の説明図が入ったトランプ



緊急時に役立つライト付ペン



「簡易雨量測定器」

砂防パネル・砂防ニュース

土砂災害防止月間に公共施設等で行われる展示用に、土砂災害に関する基礎知識などをわかりやすく伝えるパネル、また閲覧用には、近年の土砂災害の傾向なども盛り込んだタブロイド紙「砂防ニュース」を制作している。



砂防パネル



砂防ニュース

砂防カレンダー

1984（昭和59）年から企画制作を行っている。災害の記憶を風化させないよう、日付欄に、その日に発生した過去の土砂災害を記載しているほか、砂防や防災に関する基礎知識や新情報も掲載している。



絵画や切り絵などを使ったカレンダーも発行された



砂防カレンダーの一例

《土砂災害概念図》

砂防広報センター設立当時、土石流など土砂災害の現象や発生のしくみなどは、防災行政担当者や報道機関などにもほとんど知られていなかったことから、建設省（当時）の指導の下、土砂災害現象をわかりやすく説明するイラストを作成した。土石流・地すべり・がけ崩れを表したイラストは、現在では土砂災害を説明するときの、いわば「スタンダード」として、自治体の看板やパンフレット、報道番組のフリップなどに利用されている。



1－2. 印刷物

1984（昭和59）年、砂防広報センターは、砂防の専門家や防災のオピニオンリーダーを対象とした冊子「土砂災害を防ぐ一人命を守るために－」を自主制作した。これは、関係機関が砂防や防災に関する一般向け啓発資料をつくる際に、基礎資料として役立ててもらうことを企図して、土砂災害のしくみや砂防のはたらきについて解説した冊子である。同じ年「月刊メディア砂防」を創刊、以降、一般向け、

専門家向けに、土砂災害と砂防に関するさまざまな書籍や冊子を発行していくことになる。

一方、次代を担う子供向けにも「子ども壁新聞」を手始めに、土砂災害や砂防をわかりやすく解説するパンフレットや冊子を制作していった。中でも「砂防副読本」は、今日まで改訂を繰り返しながら版を重ねている。

砂防副読本

小学校高学年を读者対象に想定した「砂防副読本」は、時代の要請に応じて改訂や新企画による制作が行われてきた。

初期の副読本は、土砂災害や砂防について、その言葉や概念を認知してもらうことを主な目的として編集されている。

学校教育に「総合的な学習の時間」が導入されると、授業での利用を想定して書き込み型の「ふるさと安全たんけん隊」を教育関係者と協働で制作した。この冊子は、子供たちが自分の住む町を歩きながら身の回りの土砂災害が起きやすい場所を調べ歩くという設定であるが、これは十勝岳や雲仙普賢岳の噴火災害を経てハザードマップの有効性が認識され、マップの作成・公表が国を挙げて進められることとなった動きを反映したもののでもあった。

東日本大震災の経験を踏まえた最新版「土砂災害から身をまもる」では、避難のしかたや災害情報の入手に関する記述が増えたほか、近年問題となっている深層崩壊や河道閉塞の項目なども新たに加えられている。



Q & A形式で土砂災害や砂防を解説する「砂防ビギナーズ用ガイド」



書き込みができるよう工夫した「ふるさと安全たんけん隊」



都道府県別版も作成した「さぼうってなあに」



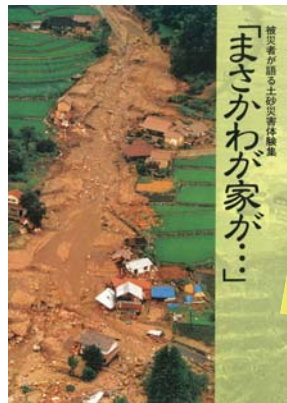
最新版では深層崩壊や河道閉塞の情報が加わり、避難のしかたなどの記事も増えている

書籍

書籍は、専門家向けの砂防技術書、専門家による論文やエッセイ集、災害の記録集や体験記などを企画・制作した。また、子供向けに土砂災害を説明する「しかけブック」なども手がけている。



砂防技術書『総合土石流対策』



土砂災害被災者の体験集『まさかわが家...』



シールブック形式の『モグラ博士のなっとく地すべりしかけブック』

「月刊メディア砂防」

砂防行政機関と民間企業との間をつなぐ情報誌として1984（昭和59）年に創刊され、2012（平成24）年の休刊まで、計330号発行された。



「月刊メディア砂防」創刊号



東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）による土砂災害の報告記事（2011年7月号）

《現場代理人の会と「メディア砂防」》

1996（平成8）年に長野・新潟県境、蒲原沢で発生した土石流災害は、砂防工事の作業員14名の命が奪われるという、日本の砂防史上まれにみる大惨事となった。

この災害を契機に、砂防工事の安全対策指針の見直しが行われ、工事の安全性に関わる施工管理技術や作業環境の向上が強力に推進されることとなった。1998年には、砂防工事の現場代理人が相互に情報を交換し研鑽を図るための組織として「砂防関係工事現場代理人の会」が発足し、その事務局が砂防広報センターに設置された（2013年3月まで）。これに伴い、「月刊メディア砂防」は現場代理人の会の情報誌として位置付けられ、工事現場の安全対策や施工管理技術に関する情報を発信していくこととなった。

＊砂防工事現場代理人の会は、2013年3月から「砂防施工管理研究会」として新たな活動を展開している。

1-3. 映像

砂防関係事務所の事業紹介や住民への防災啓発、各種シンポジウム・フォーラムの解説資材、また砂防資料館の映像展示資料など、砂防広報センターが30年間に制作した映像ソフトは、350作品（同ソフトの外国語版は除く）を超える。

砂防広報センター設立当時は、フィルムに代わりビデオテープが広く普及していった時代であったため、ビデオソフトの制作に数多く取り組んだ。その後の映像技術の発達に伴って、コンピュータグラフ

ィックスによる災害シミュレーション映像や、3Dハイビジョンの作品なども手がけるようになっていったが、特に3D映像の臨場感や現象の再現力には早くから着目し、映像を制作するとともに、専用シアターの開発も進めてきた。

なお、映像作品の一部は、発注者の許諾を得たうえで砂防広報センターのホームページ上で公開し、だれでも閲覧できるようにしている。

3D映像の制作・シアターの開発

1997（平成9）年7月、鹿児島県出水市針原地区で住民21名犠牲となる土石流災害が発生した。当時、同地区では自主避難が呼び掛けられていたが、一時的に雨が止んだことにより住民が安心し避難を行わなかったことが、被害拡大の一要因と考えられている。

この災害を契機に、住民の事前避難を促すための効果的な防災啓発活動のあり方が検討され、その中で、土砂災害の実態や恐ろしさを疑似体験できるような、よりインパクトのある広報資材を開発すべきとの指摘がなされた。それを受け砂防広報センターでは、かねて着目していた3D映像を開発することとなり、翌1998年、3D映像の第一号として8分の作品「土砂災害に備えて」（四国山地砂防事務所制作）を発表。以降ハイビジョン3Dを含む3D作品を手がけていった。

これらの作品の上映にあたっては、ボディソニック装置による振動、さらには土石流のにおいの噴霧などの演出も行い、見る人により強烈な印象を与えられるよう工夫した。

映像制作と並行して、各種砂防イベントや地域イベントの場での3D上映を普及させるため、エアテント式の3Dシアターを開発、これはレンタルにも対応している。



立山砂防の歴史を紹介する「崩れ」（立山砂防事務所と砂防関係団体の制作）は、3Dハイビジョンの迫力ある映像が評価され、土木学会映画コンクルの部門賞を受賞した



3D映像の撮影風景



イベントでは、3D映像の順番を待つ人たちの長い列ができる



エアテント式の3Dシアター

《土石流のにおいを再現》

「土砂災害に備えて」の上映では、土石流発生で場面「土石流のにおい」をシアター内に噴霧した。この「におい」は香料会社の協力を得て独自に調香したもので、3種類のサンプルをつくり、その中から災害現場を数多く踏んだ専門家に選定していただいた。



においの発生装置



3D用メガネをかけての試写

子供向け防災啓発アニメ

子供たちへの防災啓発用に、設立当初からアニメーション映像なども多数制作してきた。中でも山口県の委嘱による「こまった土石流」は、軽快な歌とともに砂防施設の効果をわかりやすく説明する内容が評価され、各地の砂防イベントや砂防資料館の映像シアターなどでも上映されている。映像の最後に流れる「土石流が来る」の歌に振付けた「土石流体操」もあり、子供向け学習イベントで、参加者によるパフォーマンスが行われたこともある。



「土石流体操」をするイベント参加者たち

「こまった土石流」

災害現場の自主取材による映像収録

予測不可能な土砂災害は毎年各地で発生しているが、その生々しい実態はすぐに記録しないと、状況が変化し、現場記録の意義が薄れてしまうこともある。このため砂防広報センターでは、重大な土砂災害が発生した場合、直ちに独自の取材班を組織し、映像の収録等を行うよう努めてきた。こうして撮影した映像は、マスコミにニュースソースとして提供したり、その後の映像制作に役立てたりしている。



新潟県中越地震（2004年）発生直後に自主取材した映像は、3Dハイビジョン映像「崩れ」にも使用された

DVDソフトの開発

一般家庭や学校にもパソコンやDVDプレーヤー内蔵テレビなどが普及したことから、砂防広報センターでは自主制作した防災啓発映像をDVDの形で一般に頒布している。現在までに、鹿児島県垂水市の事例から避難の心構えを学ぶ「避難してよかった」、がけ崩れを擬人化してその仕組みや災害現象をわかりやすく紹介する「がけ崩れを知ろう」の2作品が完成している。



1-4. 模型・実験装置・体験装置

砂防施設が土砂災害を防ぐ仕組みを理解したり、大雨や土石流の恐ろしさをイメージしたりするのに、模型を使った実験やシミュレーション装置による疑似体験は大きな効果を発揮する。砂防広報センターでは、オリジナルの広報ツールとして、これらの実験装置や体験装置を開発してきた。

降雨体験装置

土砂災害発生の引き金となる降雨を体験する装置で、時間雨量の設定を変えることによって雨の強さを調節することができる。砂防広報センターでは、1990（平成2）年に大阪鶴見緑地で開催された国際花と緑の博覧会の「さぼらランド」のアトラクションとして「雨たいけん室」を製作・出展し、好評を博した。

その後、雨の強さによって車のフロントガラスの視界がどのように変化するかを体験できるワイパー式体験装置、さらにトラックに載せて運ぶことができる小型の体験装置などを開発した。砂防事務所主催の防災学習会や地域イベントなどでニーズが高まっている。



花博会場の「雨たいけん室」



トラックに載せて運ぶことができる降雨体験装置

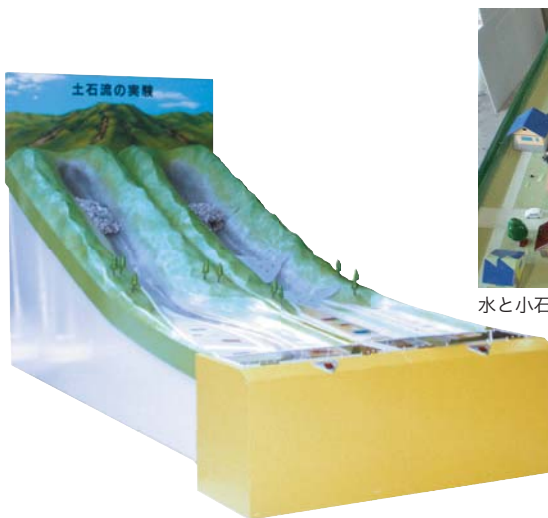


装置の中で傘をさし、雨の強さを実感
時間雨量10mmから180mmまで体験できる



土石流模型実験装置

水と小石を用いた土石流を砂防堰堤のない溪流とある溪流で発生させ、砂防堰堤の効果を確かめる装置で、1995（平成7）年に第一号が製作された。砂防資料館の展示や、砂防事務所の公開講座などで用いられている。



水と小石で土石流を発生させる



屋外の砂防教室での使用例

砂防堰堤のある溪流、ない
溪流を並べて比較できる

また、「知識を身に付けてもらうための第一歩は、興味を持ってもらうこと」との考えから、子供たちがゲーム感覚で楽しみながら防災についての知識を身に付けることができる「遊具」の開発なども進めてきた。

土砂災害対策ミニ模型

土石流・がけ崩れ・地すべりの土砂災害3種について、災害の様子や対策工のしくみが理解できる模型。小型で持ち運びしやすいため、学校の授業での利用などが期待できる。



土石流



がけ崩れ



地すべり



地すべり模型内部



がけ崩れ模型にパーツをはめ込む

ドセキリュウ対えんてい君

2つのポンプを使い、一方が「土石流」を発生させ、もう一方が「砂防堰堤」を立ち上げてこれを防ぐゲーム装置。イベントなどで集客ツールにもなる。



ドセキリュウ対えんてい君



《テレビ番組でも使用されたミニ模型》

近年、「異常な豪雨」が頻発するようになり、それに伴って各地で土砂災害の発生が増加していることから、テレビのニュース解説やワイドショーなどで土砂災害を取り上げることが多くなっている。その際、砂防広報センターのミニ模型が用いられる場面も増えてきた。



1-5. 砂防資料館

砂防広報センターが企画や展示物の制作などに関わった砂防展示施設は、「博物館」と名の付く大型のものから、「道の駅」などの施設の一郭に設置したもの、砂防事務所に併設された展示室など多種多様である（「資料編」79ページ参照）。

一時期、各砂防事務所でさかんに設置が進められた砂防資料館であるが、いわゆる「ハコモノ批判」「広報批判」の風潮の中で、現在は閉館や休館を余儀なくされるところも多いのが実情である。しかし、砂

防広報センターでは、子供たちの土砂災害防災学習のための施設として、教師のための防災研修施設として、また地域防災活動の拠点や砂防フィールドミュージアムの核施設として、これらの資料館を再評価し、積極的に活用させていくことを提言している。

また、全国の砂防資料館がネットワーク網を形成し、情報の収集や資料づくりを共同で行うことによって効果的・効率的な展示運営を行う仕組みづくりなどについても検討している。

基本構想から特別展の企画・制作まで―立山カルデラ砂防博物館の例

砂防をテーマとする大規模博物館の代表ともいえる立山カルデラ砂防博物館は、1998（平成10）年に立山砂防工事事務所（現・立山砂防事務所）に隣接して開館した。砂防広報センターではその基本構想段階から関わり、開館後はいくつかの特別展の企画・展示制作、映像制作などにも携わってきた。



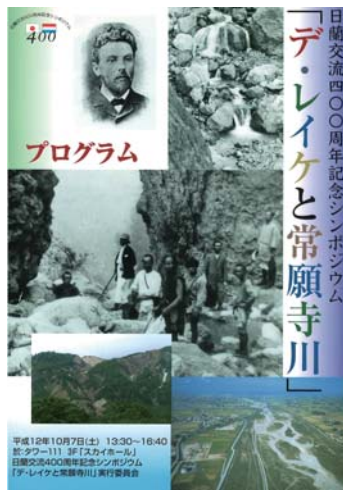
砂防工事用トロッコの展示コーナー



立山カルデラ砂防博物館



立山カルデラのジオラマ展示



特別展「デ＝レイケと常願寺川」に際して開催されたシンポジウムのプログラム

入館者を呼び戻すための改修提案―桜島国際火山砂防センターの例

大隅河川国道事務所が所有・監理する桜島国際火山砂防センターは、桜島の火山活動や土石流に関する情報を提供する展示施設として開館したが、オープンから7年を経て入館者数が頭打ちとなっていた。

砂防広報センターでは現状の問題点を分析、主要な入館者である子供や観光客にも分かりやすい展示の充実や、サイン計画の改善などを提案した。



観光客の入館を促すためサイン計画を見直した



桜島国際火山砂防センター



入館者の中心は子供たちであることから、子供向け解説の充実や参加・体験型の展示を充実させた

地域住民とともに施設の活用法を検討―板倉地すべり資料館の例

地すべりを防ぐための人柱伝説の残る新潟県板倉で、全国初の「地すべりをテーマとした資料館」として1992（平成4）年に開館。2011（平成23）年、新潟県妙高砂防事務所は職員の手作りをモットーに体験型の防災学習館としてリニューアルすることとなり、砂防広報センターは展示企画の検討やパネル編集を委託されて遂行した。並行して、地域一帯を古くからの歴史を活かした学習フィールドとして活用することを図る地元団体と交流し、社会貢献活動としてマップ作成などの支援を行った。



資料館を核とした周辺フィールドマップを制作した



地域住民が集まって意見交換

第三セクターと協力して展示コーナーを運営―フジヤマビューギャラリーの例

富士砂防事務所が監修するフジヤマビューギャラリーは道の駅「富士川楽座」の4階にあり、富士山とその周辺の砂防に関する展示を行っている。砂防広報センターは、この施設の企画・展示制作などに関わり、その後も第三セクターの施設運営者との調整を図りながら展示物の改善や広報ツールの制作などを行い、「活きた施設」の維持に努めている。



「道の駅」利用で賑わうフジヤマビューギャラリー

2. 土砂災害防止啓発イベントの企画運営

2-1. 全国大会・フォーラム・シンポジウム

土砂災害防止推進の集い「全国大会」、地すべりフォーラム、火山砂防フォーラム、雪崩防災週間シンポジウムなど、砂防・防災に関わる年次イベントの企画・運営支援業務に、砂防広報センターは数多く携わってきた。これらの経験を通じて、地域の災害

特性や歴史、その時々防災上の課題などに即したテーマの設定や、住民や小中学生が参加できるプログラムづくりなど、防災啓発イベントの手法を開拓し、技術を蓄積していった。

土砂災害防止推進の集い「全国大会」

土砂災害防止推進の集い「全国大会」は、1982年（昭和57）の長崎豪雨災害を受けて土砂災害防止月間が創設された1983年に、第1回大会が長崎市で開催され、以後毎年6月に開催されている。砂防広報センターは1995（平成7）年の第13回大会から会の企画・運営等に関わってきた。

初期の全国大会は、土砂災害防止功労者表彰を含む式典と識者による記念講演（1日目）、現地視察（2日目）で構成されていたが、第13回大会から、1日目に式典のほかシンポジウムまたはパネルディスカッション等のイベントが行われるようになり、以後その形式が踏襲されてきた。近年は、地域の防災活動の担い手や防災専門家などによるシンポジウム、災害被災者の証言、開催地の小中学生による防災学習発表会などが行われることが多く、「地域防災力向上」に資することを意識した内容になってきている。

なお、全国大会は2010年（平成22）からは名称を「土砂災害防止 全国の集い」と改めて継続されている。



兵庫県神戸市で開催の第14回大会（1996年）会場の「二次災害防止のためのセミナー」と、同時並行で行われている神戸市灘区鶴甲地区の「二次災害防災訓練」とを中継で結ぶという、画期的な試みに挑戦した



岐阜市で開催の第20回大会（2002年）「知らせる努力・知る努力」の標語が登場した



大阪市吹田市で開催の第15回大会（1997年）「砂防ボランティア全国連絡協議会」の発足大会となった

雪崩防災週間シンポジウム

1980年代後半、雪崩が集落をおそい犠牲者を出す災害が続けて発生したことから、雪崩災害に対し、ハード対策だけでなく、住民への防災啓発や警戒避難体制の整備などソフト対策の充実を求める声が高まった。これを受け、1989（平成1）年から12月1日～7日を雪崩防災週間と定め、さまざまな啓発活動を行うこととなった。同年12月に雪崩防災週間シンポジウムの第1回に当たる「雪崩防災週間創設大会」が新潟県長岡市で開催され、以後2009年まで毎年、豪雪地域を抱える自治体の持ち回りで開催されてきた。砂防広報センターは第1回から、このシンポジウムの企画運営等に関わってきた。

なお、1997年度から1月または2月の開催となり、2010年度以降はシンポジウムではなく、雪崩災害防止功労者表彰及び雪崩災害防止セミナーが、雪崩防災週間中に開催されている。



第1回シンポジウムとなった新潟県長岡市での「雪崩防災週間創設大会」（1989年）

火山砂防フォーラム

1991（平成3）年の雲仙普賢岳噴火災害を契機に、活火山周辺の自治体が委員会を結成し、火山砂防事業をはじめとする火山噴火対策について年1回、情報や意見の交換を行う場としてフォーラムを開始した。活火山に関連する官（行政）・学・民が一堂に集う国内唯一の会合として評価されている。

砂防広報センターはこのフォーラムの事務局を務め、毎年10月に開催されるフォーラムの企画・運営等に第1回から携わっている。



若い世代による研究発表が定着する契機となった第13回フォーラム（岐阜県上宝村）



火山噴火から4年ぶりの住民帰島直後に開催された第16回フォーラム（東京都三宅島）



20回目の開催では大規模な総合防災訓練が併催された（群馬県嬬恋村）

地すべりフォーラム

1995（平成7）年に群馬県藤岡市で開催された「地すべりフォーラム in TONEGAWA」を第1回とし、地すべり地を抱える自治体の情報交換の場として、2006年度まで開催された。



第1回の「地すべりフォーラム in TONEGAWA」

全国大会・フォーラム等の経験を生かしたイベントの企画運営

砂防広報センターは、砂防事務所の周年イベント、災害記念イベント、砂防や土砂災害に関連した地域フォーラムやシンポジウム、講演会、会議などの企画運営業務を数多く手掛けてきた。

全国大会や年次フォーラム・シンポジウムなどを手がけることによって蓄積されてきたノウハウや、講師・専門家などの人的ネットワークが、こうしたさまざまなイベントの企画運営に活かされている。



「富士直轄砂防30周年記念式典」（1999年） 幸田文『崩れ』をテーマに講演する青木玉氏



四国山地砂防事務所主催「嶺北水源地シンポジウム」（2001年）



第1回の「地すべりフォーラム in TONEGAWA」



2006年度に静岡県由比市で開催された地すべりフォーラムの告知チラシ



「環富士山火山防災連絡会」が主催したシンポジウムのプログラム火山砂防フォーラムで構築したネットワークが活かされた

2-2. 国際博覧会・国際会議

砂防広報センターが国際博覧会と関わりを持ったのは、1984（昭和58）年にアメリカ・ニューオーリンズで開催された「世界河川博覧会」に際し、会場で行われた砂防大会への参加ツアーと、「ジャパnデー」の花火大会を企画運営したのが初めてである。また、国際会議支援業務を手掛けたのは、1988（昭和63）年の、鹿児島における国際火山会議からであ

る。

その2年後に開催された国際花と緑の博覧会（花博）「さぼうランド」では、会場に砂防施設をつくりこむというダイナミックな庭園型展示を実施、広く国民に砂防という言葉を知りし、土砂災害を防ぐその役割への理解を広めるとともに、砂防の目的のひとつである「自然の復元」を強く印象付けた。

鹿児島国際火山会議

鹿児島県の主催により30か国、述べ7,600人の火山学者・技術者・行政担当官・市民が参加し、「火山と人との共存」をテーマとして開催された。砂防広報センターは、会議の企画運営の他、並行して行われた砂防展「火山とくらし」の企画・展示制作に携わった。



鹿児島市民文化ホールで開催されたシンポジウム

「国際花と緑の博覧会」砂防出展

1990（平成2）年4月1日から半年間、大阪市と守口市にまたがる鶴見緑地において開催された「国際花と緑の博覧会（花博）」において、当時の建設省河川局砂防部と近畿地方建設局が「さぼうランド」を出展するにあたり、砂防広報センターは基本計画から制作・運営までの業務を支援した。また期間中、会場で「緑の興亡（変遷）」をテーマに開催された「SABO国際シンジウム」の企画等も担当した。

花博が開催された時代、地球規模での環境破壊やエネルギー枯渇などが「避けがたい人類の危機」として世界的にクローズアップされはじめていた。こうした中、「花と緑と人間生活のかかわりをとらえ21世紀に向けて潤いのある豊かな社会の創造をめざす」ことをテーマに掲げた花博において砂防出展が提示したのが、「砂防による自然の復元」であった。

大阪府を流れる淀川の水源地、田上山の荒廃山地では、明治の初めから山腹工をはじめとする砂防が行われ、緑をよみがえらせることによって土砂災害を防ぐ努力が続けられてきた。「さぼうランド」では、この田上山砂防の象徴ともいえる山腹工、明治の初めに建設された石積堰堤、流路工などを、3,100㎡の会場に再現した。実際に登ったり水遊びをしたりすることもできる砂防堰堤や流路工、また会場内に設けられた降雨体験装置などは来場者の人気を集め、各方面から高い評価を得ることができた。



「さぼうランド」全体図



国際花と緑の博覧会会場
入場者総数は2,300万人を数えた



案内役「フェアリーメイツ」の募集・人選・研修・運営も砂防広報センターが支援した



フェアリーメイツの任命式
前列右から3人目、砂防出展計画検討委員会委員長を務めた建設省河川局砂防課長（当時）・松下忠洋氏、前列右端、NPO砂防広報センター第三代理事長・内田辰丸



山腹工は滋賀県の田上山で実際に行われている工法を再現し、「砂防による緑の復元」をアピールした



水遊びすることができる流路工は、「自然と親しむ砂防」を印象付けた



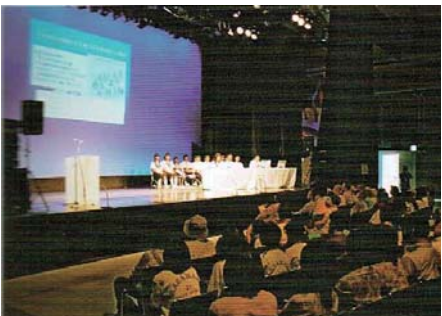
「鎧堰堤」は明治初期にオランダ人技師・デ・レイケが築いた石積砂防堰堤を再現した

「愛・地球博」砂防出展

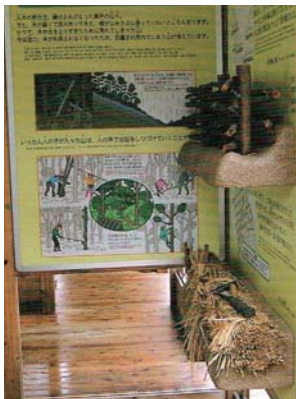
花博での経験は、2005（平成17）年に愛知県瀬戸市・長久手町を会場に開催された「2005年日本国際博覧会（愛・地球博）」でも活かされた。「自然の叡智」をテーマに、環境問題により深く取り組んだこの万博において、砂防広報センターは国土交通省出展のうち砂防にかかわる出展の企画制作運営にあたった。古くからの窯業地である東濃地域の山地荒廃や木曽川の土砂災害などを題材に、砂防による植生回復や水源地が抱えるさまざまな問題について、3Dシアターやグラフィックパネル展示、地元中学生が参加したイベントの開催などを通じて訴えた。



3Dシアター



イベント会場では、岐阜県笠原町の笠原中学校が取り組んでいる「樹林整備活動」について、生徒自らが発表した



砂防による緑の復元の歴史を紹介するブース展示

さまざまな国際シンポジウム

国際会議や国際博覧会で培われた手法や技術は、各事務所や都道府県が主催する国際シンポジウム、国際イベントなどにも活かされている。



1998（平成10）年「国際砂防林シンポジウム」



1992（平成4）年「国際アルプスサミット」

3. 地域防災力向上のための施策の支援

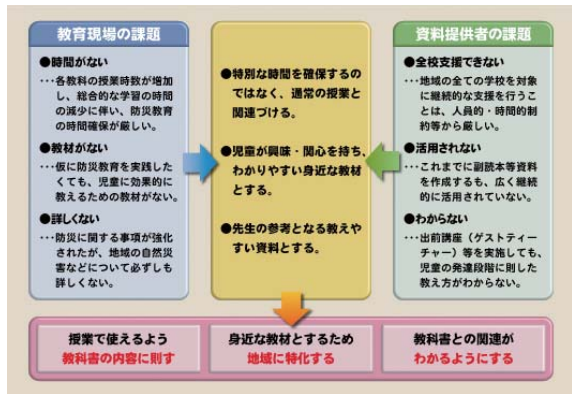
3-1. 学校における防災教育の支援

2000（平成12）年の北海道・有珠山の噴火では、研究者と地元自治体の連携により住民の事前避難が速やかに行われ、噴火による人的被害は出なかった。この「成功」の背景には、火山砂防マップの全戸配付により火山が噴火した場合の危険箇所が住民によく周知されていたことに加え、20年以上にわたって小中学校で継続されてきた火山防災教育の貢献があったと考えられている。

自然災害の多い日本では、子供たちに災害に関する正しい知識を伝え、災害から身を守る方法を体得させる防災教育の必要性は従前から指摘されていたが、有珠山での成果によって全国的に防災教育に取りくむべきであるという意識が高まり、これが2010（平成22）の学習指導要領の改訂に結び付いていくことになる。

砂防広報センターでは早くから、砂防事務所と教育現場との仲立ちとなって、土砂災害に関する防災

教育の推進を継続的に支援し、学習資材の開発・制作や、学習プログラムの提案などを行ってきた。これらの業務が評価され、2008（平成20）年度には、国土交通省砂防部の「土砂災害防止教育支援ガイドライン（案）」の作成にも参画している。



砂防広報センターの防災教育支援イメージ

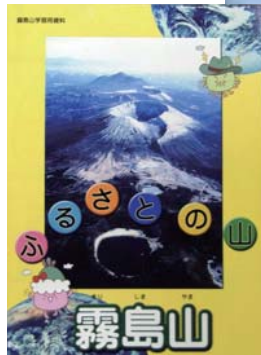
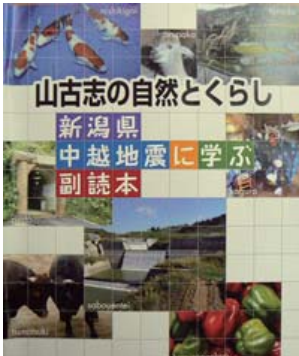
地域版副読本・教材の制作

過去に大きな土砂災害を受けた地域や、活火山を抱える地域において、学校での防災教育に活用できる副読本や教材を企画制作している。制作にあたっては、砂防事務所担当者のほか、関係自治体の教育委員会や現場の教師、有識者なども加わった検討委員会を立ち上げ、地域の実情に合った「確実に使ってもらえる教材」を目指している。

小中学校での「出前授業」の支援

地域の小中学校で、砂防や土砂災害に関する「出前授業」を開催する砂防事務所は少なくないが、とすると内容や解説が専門的すぎて子供たちには十分理解できないこともある。砂防広報センターでは、教育現場の声を聴きながら、子供にも分かる資料や解説シナリオの作成などで授業を支援してきた。

地域版副読本のいろいろ



「出前授業」のひとコマ
身近な飲食物を用いて火山活動を説明

イベント等における防災学習発表会の支援

近年、全国大会、火山砂防フォーラムや砂防事務所主催の各種イベントにおいて、地元小中学生の防災学習発表会が行われることが多くなっている。砂防広報センターが企画・運営支援したイベントで、地元の小・中学生による防災学習発表会が初めて行われたのは、1997（平成9）年に神奈川県箱根町で開催された火山砂防フォーラムにおいてである。同フォーラムでは2003（平成15）年以降、開催地の子供たちや若者による学習発表がほぼ定着し、フォーラム参加をきっかけに火山防災学習を開始、フォーラム後も学習を継続している学校も多い。

また、2002（平成14）年に長野県松本市で開催された「インタープリバント2002」に際して、松本砂防工事事務所（現・松本砂防事務所）主催により管内7市町村と松本市の小中学生が参加して行われた学習発表会「小学生インタープリバント」では、課題の設定からステージ発表に至るまでの授業支援のしかたや教師とのネットワークづくりなどが高く評価された。



火山砂防フォーラムにおける小学生の学習発表（秋田県仙北市、2012年）



小学生インタープリバントでの発表

「防災学習お役立ちページ」の開設

2010（平成20）年3月に「学習指導要領」が改訂され、小学校では2011年度から、中学校では2012年度から、社会・理科の教科で「自然災害の防止」に関する学習が必須となった。

砂防広報センターではそれに先立ってホームページの見直しを行い、学校現場での活用により配慮した「防災学習お役立ちページ」を開設した。土砂災害防災教育を実際に教科のどの場面で展開するかを提案するとともに、教材としてすぐ使える土砂災害のイラストや写真・映像の素材、子供たちにも分かりやすい解説などを提供している。

小中学校授業での土砂災害防止教育展開例（2）小学校社会科	
学習指導要領に示された教科の目標	
社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。	

注1：文頭の記号・番号は、学習指導要領に準拠している。

注2：国土交通省砂防部「土砂災害防止教育ガイドライン（案）」を参考とした。

注3：数社の教科書の授業展開例を参考とした。

学年	土砂災害防止教育に関係する学習項目と内容(注1)	当該項目で土砂災害防止教育の視点から教えたい内容(注2)
3	(1) ア 自分たちの住んでいる身近な地域や市(区、町、村)について「特色ある地形、土地利用の様子、主な公共施設などの場所と働き、交通の様子、古くから残る建造物など」を観察、調査したり白地図にまとめたりして調べ、地域の様子は場所によって違いがあることを考えるようにする。	○自分たちが住む地域の山・川などの中には、がけ崩れや地すべり、土石流など土砂災害に関連する（土砂災害を起こしやすい、土砂災害の結果できた、など）地形上の特色をもつものもある。 ○災害を抑止するための施設として、砂防施設等が建設されている。
4	(3) イ 地域の人々にとって必要な飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理について、「これらの対策や事業は計画的、協力的に進められていること」を見学、調査したり資料を活用したりして調べ、これらの対策や事業は地域の人々の健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立てていることを考えるようにする。	○人々の暮らしに不可欠な飲料水は、林野事業による水源涵養・保全、砂防事業による貯水池への土砂流入防止、ダム事業による貯水ダム建設など、さまざまな公共事業が計画的・協力的に進められることによって確保されている。
4	(4) ア 地域社会における防災力と災害防止の取組	○国や県の働きや市町村の協力で、土石流・地すべり、

ホームページ上で防災教育の展開例を提案



土砂災害のイラストなどをリンクフリーで提供

3－2. 対話型行政と住民の地域学習活動への支援

1995（平成7）年の阪神淡路大震災では、道路や通信網が広範囲に破壊されるような大規模災害においては、国や自治体など、いわゆる「公助」による救援活動には限界があることが明らかになった。一方で、災害時には近隣の人々の助け合いによる「共助」や、住民一人一人が自ら身を守るために努力する「自助」が大きな力を発揮することが広く認識さ

れ、行政としても、地域住民による自主防災組織づくりなど、共助・自助による「地域防災力」の向上に結び付く活動を支援していくこととなった。

このような時代の要請を受け、砂防広報センターでも、地域の自然や災害について学ぶセミナーや、地域間の交流活動、災害・防災文化の伝承などに関わる業務を手掛けることが多くなっていった。

魚沼自然塾の試み

北陸地方整備局湯沢砂防事務所では1999（平成11）年度から9年間にわたり、一般市民を対象とした公開講座「魚沼自然塾」を実施、砂防広報センターは毎回の企画から運営、結果とりまとめを支援してきた。この講座は、魚沼の自然の恵みと脅威、自然とともに暮らしてきた地域の歴史や防災の知恵、そして砂防事業について、現場体験をしながら学ぶというもので、湯沢砂防管内とその周辺地域で場所を変えながら継続実施し、述べ3,800名以上の参加を得た。

毎回、開催地のキーマンを地域講師として招き、災害の歴史や地域づくりの取り組みなどを紹介したが、説明や講話を行うだけでなく、アンケートとインタビューにより参加者の声を集めたこともこの事業の特筆すべき点で、これによって砂防・防災に関する住民意識や地域のニーズを把握し、事業実施に活かすことができた。なお、湯沢砂防事務所は講座開始2年目に「対話型行政推進賞」を受賞している。



湯沢町公民館にて 地域と暮らしを考える講話・クイズ・ゲーム（2006年度）



登川流路工にて 家族参加が多く見られたクイズウォーク（1999年度）



魚沼自然塾開催地

女性モニター登用がもたらした効果

砂防事業は一般の目にふれる機会が少なく、その必要性に対する市民の認識は低い。湯沢砂防事務所では「魚沼自然塾」の参加者に子育て世代の女性が少なかったことから、砂防等に関心を持つ女性を募集して事業モニターとして登録し、生活者の目線からのさまざまな意見を集約した。

モニター制のスタート後、新潟県中越地震を経験したことにより安全・安心への意識が高まり、モニター自身から情報発信したいとの要望が出るようになった。その結果、公開講座での発表や独自の冊子づくりなども行われた。



女性モニターによる苗穂砂防堰堤群の工事現場視察（2006年度）



女性モニターの意見をまとめた冊子

コミュニティーFMラジオからの情報発信

湯沢砂防事務所では「ラジオネイチャースクール」として、平日毎朝5分のレギュラー番組を企画運営し、暮らしと砂防にかかわる情報発信を行った。

湯沢砂防職員による話や、アナウンサーによる工事現場レポートのほか、ミニ知識として、防災につながる身近なタイトルで原稿を作成し、地域に発信した。

◎砂防	◎気象まめ知識
1 「砂防ダム」って何だろう	62 「5月」の呼び方
2 「土砂災害」って何のこと？	63 端午
3 「土石流」ってどんなもの？	64 梅雨
4 土砂災害の前兆は	65 気象情報
5 河川の流域面積ってなに？	66 きろたん（記録的短時間雨量情報）
6 流路工は何のために行うのか	67 人口問題と水害
7 国際語になったSABO	68 湯沢町の昔の水害
8 新潟県に地滑りが多いわけ	69 平年値
9 セツ釜の砂防ダム	70 セタと夏祭り
10 地すべりが作った地形	71 中元
11 ハザードマップと災害についての情報公開の動き	72 お天気と商売
12 天井河川はどうしてできるのか	73 台風の季節
13 雪の中の洪水	74 秋の味覚
14 砂防にかかわるさまざまな看板の意味	75 秋の言葉
15 活火山の定義	76 エルニーニョ現象

「ミニ知識」タイトル（一部）

「エクスカーション」で活かされた魚沼自然塾での経験

近年、砂防が行われている地域で、住民に対する防災啓発の一手法として「エクスカーション」を取り入れる事務所が多くなっている。エクスカーションとは訪れた場所で案内人の説明を聞き、参加者とも意見を交わしながら、地域の自然や歴史、文化などについて理解を深めていく参加型の学習会である。災害の起きやすい自然条件や災害遺構、砂防施設なども見学対象とすることで、地域学習を防災学習へと結びつけ、結果的に地域防災力の底上げへつなげていくことができる。

砂防広報センターでは、多治見砂防国道事務所による木曽川流域、静岡河川事務所による安倍川流域でのエクスカーションなどで企画運営等を支援してきたが、事務所と地元自治体、地域の諸団体（観光協会や地域マスコミなど）による支援ネットワークづくりや、郷土史家やネイチャーガイドなど地元講師の登用、さらに参加者の意見の把握などに関して、「魚沼自然塾」での経験が活かされることとなった。



木曽川エクスカーションでは伝統産業の木工を体験

3-3. 災害の記録、防災文化の掘り起し

過去にその地域でどのような災害が起きていたのかを知ることによって、人びとは地域の災害特性を知り、次の災害に備えることができる。その意味で、災害を記録し、風化させることなく後世に伝えていくことは、極めて重要である。

石碑Webシステム

砂防広報センターでは1998（平成10）年、砂防法施行100年記念として『碑文が語る土砂災害との闘いの歴史』と題した書籍を編集・発行した。題名のとおり、日本各地に残る砂防の石碑（土砂災害や砂防事業に関わる碑）に着目し、碑文から過去の災害を掘り起し、土砂災害と戦ってきた地域の歴史を辿るという内容である。

その成果を踏まえ、2008年には砂防広報センターのホームページ上に、パソコンの地図情報ソフトを使って石碑の由来や位置情報を提供するコーナーを立ち上げた。石碑の調査などで各地の砂防ボランティアの方々の協力を得ながら、情報収集作業を進めている。

近年、山奥に埋もれた石積砂防堰堤など歴史的砂防施設に光を当て、それを地域資源として防災教育や観光に役立てようという動きが各地で見られるが、この「石碑Webシステム」は新たな地域資源の発掘にもつながる試みといえる。

砂防広報センターでは各地に残る災害の伝承や防災に関する文化を掘りおこしたり、災害の記録をさまざまな仕組みで情報発信したりする試みを続けてきた。



マッピング作業の手順



『碑文が語る土砂災害との闘いの歴史』

『災害からの復興過程を長期にわたって記録した「六甲I・NET ニュース」』

近畿地方建設局六甲砂防工事事務所（当時）では、1995（平成7）年の兵庫県南部地震（阪神淡路大震災）発生から4年間にわたって、六甲山地で進む砂防事業の様子を記録し、冊子やインターネットの形で毎月情報発信していった。砂防広報センターはその企画編集に携わり、グリーンベルトの整備をはじめ砂防によって復興し変貌していく街の姿を伝えた。

「六甲I・NET ニュース」



三六災害アーカイブズ

中部地方整備局天竜川上流河川事務所では、1961（昭和36）年に伊那谷一帯に甚大な被害をもたらした「三六災害」から50年となる2011（平成23）年、災害に関する資料（写真・体験談など）をウェブ上で公開する「三六災害アーカイブズ」の事業に着手した。砂防広報センターでは、数多い資料から場所の特定が可能な写真や体験談を抽出し、地図情報化する作業などを支援した。



アーカイブズの地図検索ページ

災害伝承の掘り起し

江戸時代末期に起こった土砂災害の記憶を風化させないために、毎月14日に犠牲者を供養するまんじゅうを持ち回りで全戸に配る、という長崎県太田尾町山川河内地区に伝わる「念仏講まんじゅう配り」を、長崎大学大学院・高橋和男教授と共に研究し、論文にまとめた。

この研究は、地域に伝わる「防災文化」の掘り起し例としてマスコミからも注目され、同地区自治会は2012（平成24）年、総務省の「第17回防災まちづくり大賞」を受賞した。



防災まちづくり大賞の授賞式



日本災害情報学会に投稿された「念仏講まんじゅう」の原稿（一部）

3-4. 砂防フィールドミュージアムの提案

国土交通省では2008（平成20）年度の施策として、「砂防フィールドミュージアム」の整備構想を掲げた。これは、全国の砂防事業が行われている一地域を丸ごと屋外博物館と位置付けて整備し、そこを地域の自然や災害、自然と結びついた暮らしや文化、災害から地域を守るために行われている砂防について学ぶ場にしようという構想である。

地域の災害特性や過去の災害についての情報は、住民にとって、また観光で訪れる地域外の人々にとっても、負のイメージがあるため積極的に知ろう・知らせようとは思わないものであるが、砂防フィールドミュージアムでは、災害に関わる遺構や砂防施設なども「ここでしか見られない」地域資源ととら

え、積極的に提示する。見学者はそこでウォーキングや自然探勝、砂防施設の見学などを楽しみながら、結果として土砂災害や防災についての知識を得ることができる。つまり、砂防フィールドミュージアムは「学習施設」であると同時に、地域の観光資源としても機能し、地域づくりの一助になることが期待されている。

砂防広報センターでは、砂防施設や災害遺構を見学するエクスカージョンの企画・運営や、砂防資料館のフィールド展示の企画などで培ったノウハウを投入し、砂防フィールドミュージアム構想に取り組んでいる。

駒ヶ根砂防フィールドミュージアム

国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所では2007（平成19）年度から、太田切川流域の宮田村・駒ヶ根市と協働で、地域の防災力向上と活性化を図る「駒ヶ根砂防フィールドミュージアム」の整備を進めてきた。

砂防広報センターは当初からこの業務を支援し、協議会の開催、地域資源の調査、全体構想やコース案の作成、ガイドマップ・解説用資料の編集、看板等の整備計画案や運営計画案の作成などに関わってきた。



ガイドのための研修ツアー



見学コースのガイドマップ

芋川流域砂防フィールドミュージアム構想

2004（平成16）年の新潟県中越地震で大きな被害を受けた芋川流域では、災害復旧に当たり特色のある砂防施設が多数建設された。そこで、災害跡地や砂防施設を地域の歴史・文化・くらしと合わせ、防災学習や観光資源として活かすことを目的に、「芋川砂防フィールドミュージアム」の構想が進められた。

行政・住民・有識者等からなる委員会方式によって砂防施設周辺の整備やガイド等の活動計画が検討され、流域の砂防事業を担当してきた国土交通省湯沢砂防事務所が事務局を務めた。砂防広報センターはNPO法人として行政と地域をつなぐため、情報収集やさまざまな情報発信を行いながら事務局を補佐した。



実行委員会の開催



ガイド養成のための講習会



砂防フィールドミュージアムのポケットマップを作成し、地区の全戸に配付した



ガイド用に作成した地域資源の解説シート

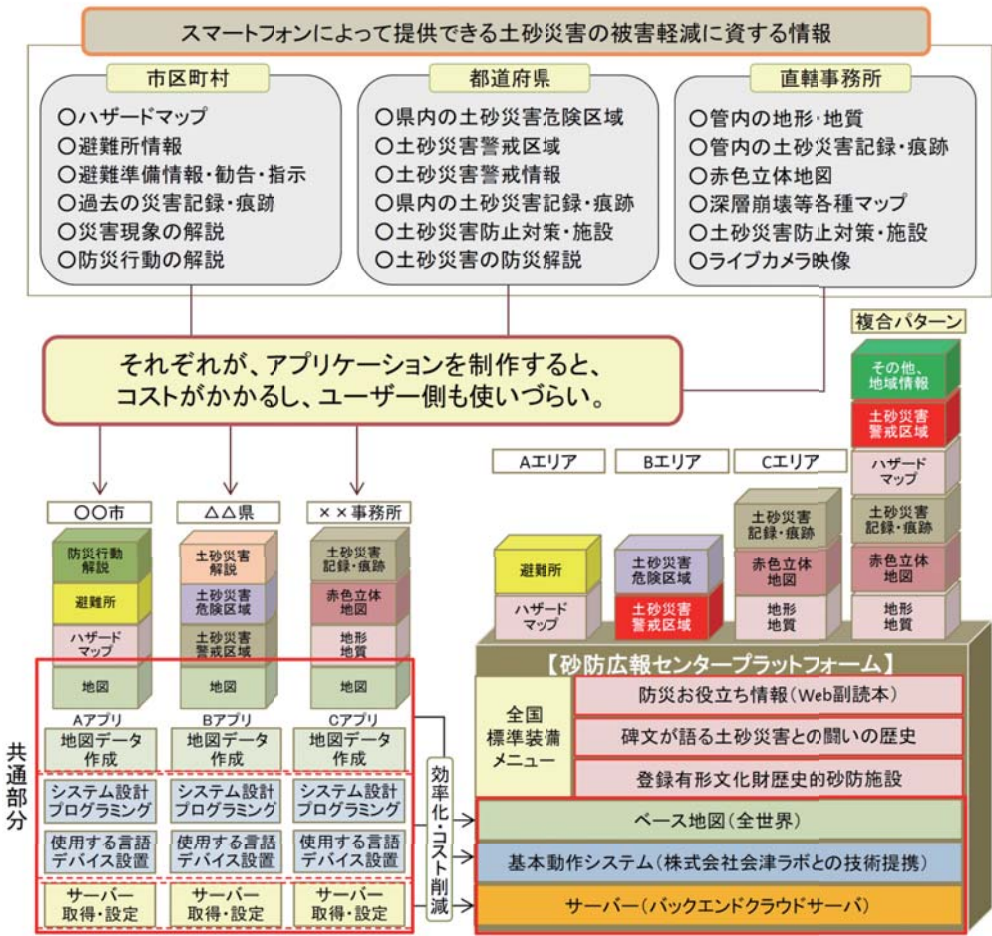


夏休みを利用して開かれた岩石採集の体験イベント

3-5. スマートフォン防災アプリの開発

近年、多発する自然災害を踏まえ、わたしたち一人一人が災害について正しい知識や情報を持ち、いざという時に備えることの大切さが再認識されている。インターネットの普及等によって、住民の情報収集手段が多様化する中、砂防広報センターでは、行政機関が発信する防災情報をより効果的に住民レ

ベルに浸透させるための新たな情報提供手法を検討してきた。その一つの方策として、急速に普及が進むスマートフォンを介して、防災関連情報を配信するためのプラットフォームを整備し、その利用拡大を図っている。



プラットフォームイメージ

平常時にも活用されるスマートフォン向けアプリを目指して ―磐梯山ジオナビ

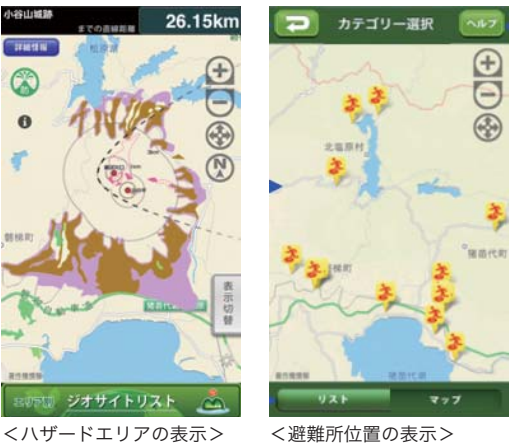
局地的短時間豪雨など、経験のない豪雨の頻発する今日であっても、住民にとって防災情報が必要な場面は限られている。従って、防災情報を提供するアプリケーション開発においては、いかに普段の生活において活用できるコンテンツを盛り込むかが肝要となる。

砂防広報センターのオリジナルアプリケーションの第1弾となった「磐梯山ジオナビ」は、スマートフォンの特性を活かし、現在の所在地を明確にし、活火山磐梯山が噴火した際のハザードエリアとの対比や最寄りの避難場所の方向・距離を示す機能に加え、平常時には磐梯山ジオパークのジオスポットの解説やナビゲーションに活用しているなどの機能を併せ持ち、噴火の危険性がない場合でも、ジオパークガイドなどが活用できる機能を盛り込んでいる。

■トップ画面 ※はめ込み合成画面



■防災情報の表示画面（一部）



■磐梯山ジオパーク関連機能（一部）



アプリ開発には
地元中学生の意見も反映された
(2013年11月福島民友新聞)

磐梯山ジオナビ

《砂防ボランティア基金》

1995（平成7）年の阪神淡路大震災では、全国から集まった数多くの民間ボランティアが、さまざまな被災地支援活動を行ったが、砂防の分野でも建設省（現・国土交通省）の呼びかけに応じて、砂防部局OBを中心に多数の砂防技術者が災害直後の現地に駆け付け、土砂災害危険箇所の点検や危険度判定、地震で傷んだ砂防施設の機能評価など、自発的にボランティア活動を展開した。その結果は直ちに関係機関に伝えられ、二次災害防止対策などに生かされた。この活動をきっかけに、各地で砂防OBなどによるボランティア団体の設立が相次ぎ、1997年に大阪府吹田市で開催された「土砂災害防止月間推進の集い（全国大会）」において、砂防ボランティア全国連絡協議会が発足した。

砂防ボランティアは、土砂災害発生時には被災地での支援活動、平時には自分の住む地域の土砂災害危険箇所の点検や防災啓発活動などを行い、土砂災害に強いまちづくりに取り組んでいる。こうした活動の助成を目的に、砂防関連諸団体によって、2001年に砂防ボランティア基金が設立され、当初、その事務局が砂防広報センターに置かれていた。また『月刊メディア砂防』でも、各地の砂防ボランティアの活動を定期的に紹介した。



小中学校教師を対象とした防災啓発と防災教育支援活動を行う砂防ボランティア会員



砂防ボランティアによる土砂災害危険箇所点検

《キャンプ砂防》

全国の直轄砂防関係事務所（約30事務所）では、おもに砂防に関連する学部的大学生・大学院生を対象に、夏休み期間中に「キャンプ砂防」を開催している。これは、砂防が行われている中山間地に学生が3～5日程度滞在し、砂防事務所職員や地元の人々との共同作業や交流活動を行うことを通じて、中山間地の暮らしの実態を体験的に理解し、そこでの砂防の意義について認識を深めてもらうというものである。1996（平成8）年に始まり、2013年までの参加者はのべ1,500人に迫る。

キャンプ砂防参加者の中には、卒業後、国や県の砂防部局や民間の砂防関連会社に進むものも多く、砂防を担う人材の育成という面でも、このプログラムの果たす役割は大きい。

砂防広報センターでは、参加学生募集の窓口となったり、キャンプ現場で事務所職員と学生との仲立ち役を務めたりして、キャンプ砂防を支援してきた。



事務所職員の指導でコンクリート締固め作業を行う参加者



指導員から説明を受ける

資料集

1. 「月刊メディア砂防」特集記事に見る砂防をめぐる動き

「月刊メディア砂防」では1984（昭和59）年の創刊以来、その時々の砂防行政の動向、砂防の新技術・新工法、砂防に携わる人々の活動状況、土砂災害のレポートなどを特集記事として取り上げてきた。ここでは、創刊号から330号までの特集記事および特報・速報記事をふり返し、30年の砂防をめぐる動きをたどる。

注：特集記事の掲載がない号はこの表に記載していない（171～209号は紙面構成上特集記事の設定がない）。

年	月	No.	特 集 記 事
1984 (昭和59)	4	1	砂防部長インタビュー 「砂防行政の歴史と今後」
	6	3	島根県浜田市で行われた「土砂災害防止月間推進の集い」
	7	4	国際河川博覧会協賛・視察・研修ツアー
	8	5	昭和59年度の大規模砂防工
	10	7	長野県大滝村地震災害レポート
	11	8	第17回砂防学会シンポジウム／秋田県・六郷砂防ダム竣工式／小渋川砂防50周年記念式典
1985 (昭和60)			米国工兵隊の来日／砂防技術講習会
	12	9	長野県西部地震に関連した砂防及び地すべり対策／1984年の災害
	1	10	新春年男座談会
	3	12	上田上、田上小学校卒業記念植樹式典
	4	13	第12回「赤木賞」受賞者決まる
	5	14	対談「膨大な残土量の処理に苦慮―不動之口川砂防災害関連工事」
	6	15	土砂災害防止月間推進の集い全国大会／昭和60年度砂防学会総会ならびに研究発表会
	7	16	立山砂防工事事務所60周年記念式典／東京都砂防協会発足
	8	17	昭和59年度土砂災害防止に関する絵画・作文・写真コンクール
	9	18	緊急特集 長野地すべり災害
	10	19	砂防に関する国際シンポジウム／第4回国際地すべり研究会議開催
	11	20	ポストシンポジウムツアー随行記（水山高久）／利根川上流直轄砂防事業50周年記念式典
1986 (昭和61)	12	21	大山山系の自然災害撲滅を目指して半世紀
	1	22	1986年 若虎信州座談会
	2	23	長崎は、いま／瀬田川砂防資料館開館／直轄砂防ダム100基完成
	3	24	雪崩惨事の町能生町を訪れる
	4	25	第13回赤木賞決まる
	5	26	新砂防部長に聞く／S53.5.18妙高高原地すべり災害レポート
	6	27	土砂災害防止月間推進の集い全国大会／昭和61年度砂防学会総会ならびに研究発表会
	7	28	土砂災害防止に関する絵画・作文コンクール入賞者発表
	8	29	鹿児島市に集中豪雨、がけ崩れ続出／寺下第四砂防ダム竣工式 多治見工事事務所
			石狩川上流直轄砂防事業15周年記念講演会
	9	30	優良工事業者座談会／木曽南部砂防で公開討論会ひらく
	10	31	地域防災国際会議開催される／小豆島災害10周年記念式典
1987 (昭和62)	11	32	第18回砂防学会シンポジウム／第5回砂防セミナー盛会に
	12	33	砂防事業予算の獲得を目指して
	1	34	年男新春放談「難問克服し、親しまれる砂防事業を目指して」
	2	35	21世紀の砂防を考える―六甲砂防OB大討論会―
	3	36	土研ルポ「期待集める土研・砂防研究室の水理実験」
	3	36	「活火山砂防広報検討―委員会」発足
	5	38	湯沢砂防工事事務所 直轄砂防50周年記念歴代所長座談会
	6	39	第5回土砂災害防止月間推進の集い全国大会開催される／土砂災害防止に関する絵画・作文コンクール入賞者発表／多治見工事事務所 大崖砂防公園オープン
	7	40	北海道有珠山現地レポート／松本砂防工事事務所「セイフティ・アップ上高地」
	8	41	金沢工事事務所 白山砂防直轄60周年を迎えて
			天竜川上流工事事務所「天竜川直轄砂防50周年」記念式典開催
	9	42	中津川市・多治見工事事務所公開討論会より「地質が数える郷土の危うさ」
1987 (昭和62)			湯沢砂防工事事務所「さんさい共和国」で砂防PR
	10	43	天竜川上流直轄50周年シンポジウム「地域開発にインパクトを与える砂防」
	11	44	静岡河川工事事務所 安部川砂防直轄50周年記念式典／湯沢砂防工事事務所 信濃川下流直轄砂防50周年記念式典
			急傾斜地崩壊対策事業20周年記念講演会及び研修会
	12	45	新庄工事事務所 50周年を迎えた最上川砂防

年	月	No.	特 集 記 事
1988 (昭和63)	1	46	1988年新春恒例砂防年男放談 ハード・ソフト両面から砂防の新しい波
	2	47	座談会「42年六甲災害をふり返って」
	3	48	阪神大水害50周年特集「目出巫君 阪神大水害の渦中を行く」
	4	49	昭和63年度砂防部新施策事業紹介
	5	50	砂防設備の有効利用
	6	51	土砂災害防止に関する絵画・コンクール入賞者発表
	7	52	昭和63年度土砂災害防止月間推進の集い全国大会
	8	53	土石処理船「さくらじま」完成 大隅工事事務所
	9	54	鹿児島国際火山会議「火山と人との共存をめざして」
			あれから35年 多羅尾災害をふりかえる
	10	55	昭和64年度予算 建設省砂防部概算要求決まる
	11	56	昭和63年の土砂災害
1989 (平成1)	12	57	地すべり等防止法施行から30年
	1	58	1989年新春恒例砂防年男座談会 砂防をつらぬく「世界の中の日本」
	2	59	平成元年度予算政府原案決まる
	3	60	建設業法改正のポイント
	4	61	消費税と土木請負工事の積算・契約／吉野川直轄砂防施設100箇所完成記念行事
	5	62	いま「ふるさと」で何が起こっているか―地域活性化と砂防―
	6	63	土砂災害防止に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	64	平成元年度土砂災害防止月間推進の集い全国大会
	8	65	取材レポート「建設業界では、いま」
	9	66	国際砂防シンポジウムツアー成功のうちに終える
	10	67	平成2年度予算 建設省砂防部概算要求きまる
	11	68	建設業関係女性経営者座談「建設業の明日を見つめて」
1990 (平成2)	12	69	雪崩防災週間創設大会ひらかれる
	1	70	新春恒例年男座談会 業際を駆ける駿馬たち
	2	71	飯豊山系直轄砂防事業20周年記念行事
	3	72	花博さばうランド 開幕せまる
	4	73	CCI現場からのレポート
	5	74	「土木技術者女性の会」に聞く
	6	75	土砂災害防止に関する絵画・ポスター・作文コンクール 入賞作品発表
	7	76	土砂災害防止月間推進の集い全国大会 記念講演（要旨） 吉村秀実NHK解説委員
	8	77	九州中北部豪雨災害
	9	78	取材レポート「いま砂防工事の現場では」
	10	79	文明の転換点に高まるSABOへの期待 SABO国際シンボ開かれる
	11	80	座談会「さばうランドを終えて」
1991 (平成3)	12	81	さばうランドの183日
	1	82	新春恒例年男砂防座談会「砂防は鼓動する。地球環境のなかに、人びとのなかに。」
			雪崩防災シンポジウム開かれる「豊かで安全な雪国をめざして」
	3	84	友松砂防部長にINTERVIEW
	4	85	カウントダウン21世紀（1）座談会「土木の将来像を見つめて」
	5	86	カウントダウン21世紀（2）プレスト「砂防の新たなランドデザインを求めて」
	6	87	土砂災害防止に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	88	平成3年度土砂災害防止月間推進の集い全国大会 土砂災害根絶のため決意も新たに
	9	90	'91火山砂防フォーラム 火山地域の安全で豊かな暮らしのために
	10	91	平成4 年度予算砂防関係概算要求 国民的ニーズに応える砂防関係事業の展開にむけ、意欲溢れる予算要求
	12	93	座談会「出雲大社 ここ大社もまた、伊勢と同様、砂防がお守りしていた」
1992 (平成4)	1	94	新春恒例1992年年男座談会 時代を先駆ける砂防マンたち
			雪崩防災週間シンポジウム「雪に強い郷土づくりをめざして」
			溪流環境シンポジウム「魚と人間に優しい豊かな溪流づくりをめざして」
	2	95	平成4年度予算政府原案 第8次治水事業五箇年計画がスタート
	3	96	「大分の砂防を語る会」特別講演より 自然との調和・生態系の保全、そしていきいきまちづくり―これからの砂防事業（松下忠洋）
	4	97	25年目を迎える急傾斜地崩壊対策事業「安心・うるおい・まちづくり」より多様な事業展開にむけて
	5	98	土砂災害防止月間10年のあゆみ
	6	99	土砂災害防止に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	100	平成4年度土砂災害防止月間推進の集い全国大会／第3次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画・インタビュー 国土保全事業のより豊かな展開をめざして

年	月	No.	特 集 記 事
1992 (平成4)	8	101	急傾斜地崩壊対策事業25周年記念「全国がけ崩れ防災シンポジウム」
	9	102	姫川水系直轄砂防事業30周年記念事業「国際アルプスサミット&景観シンポジウム」
	10	103	'92火山砂防フォーラム「火山を知り、火山とともに生きる」
	11	104	30周年を迎えた3つの直轄事業 亀の瀬地すべり対策事業・大和川工事事務所／地すべり対策事業・新庄工事事務所／姫川水系砂防事業・松本砂防工事事務所
	12	105	平成5年度からはじまる第3次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画
1993 (平成5)	1	106	1993年新春恒例年男男女砂防座談会 平成4年度雪崩防災週間シンポジウム「雪とふるさとそしてロマン」
	2	107	平成5年度予算政府原案 投資規模1兆1,500億円を確保し、第3次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画スタート
	3	108	景観対策講習会を開催 湯沢砂防工事事務所
	4	109	砂防部長インタビュー「若者よ砂防に來たれ」
	5	110	誕生した雲仙復興工事事務所
	6	111	土砂災害防止に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	112	平成5年度土砂災害防止月間推進の集い全国大会
	8	113	全建賞
	9	114	8月豪雨災害、九州南部を襲う！／北海道南西沖地震 7月12日、奥尻島を襲った地震津波
	10	115	平成6年度砂防関係予算のあらまし／'93火山砂防フォーラム
	11	116	地すべり等防止法制定から35年
	12	117	平成5年度の土砂災害「列島を襲った災害禍」
1994 (平成6)	1	118	平成5年度雪崩防災週間シンポジウム開催 みちのく砂防シンポジウム「八幡平山系を見つめて、火山とともに生きる」
	2	119	砂防フォーラム「溪流環境の創造」
	3	120	平成6年度砂防関係予算政府原案
	4	121	風倒木災害・大分県日田地方 激特指定区をゆく
	5	122	対談「砂防の周辺から―自然との調和を考える」
	6	123	土砂災害防止に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	124	平成6年度土砂災害防止月間推進の集い全国大会
	8	125	雲仙普賢岳噴火災害、水無川下流を行く
	9	126	'94火山砂防フォーラム
	10	127	世界リゾート博国際SABOシンポジウム「快適で安全なリゾートをめざして」
	12	129	現場代理人が語る砂防最前線
1995 (平成7)	1	130	新春年男男女座談会 砂防の未来世界を駆けめぐる亥たちの夢
	2	131	阪神淡路大震災1.17
	3	132	松下忠洋衆議院議員阪神・淡路大震災緊急提言「二次災害を警告する」
	4	133	傾斜地保全課設置20周年記念座談会
	5	134	雲仙普賢岳に復興の槌音を聞く
	6	135	土砂災害に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	136	兵庫県南部地震被災地は今
	8	137	平成7年7月11日梅雨前線豪雨災害
	9	138	続報梅雨前線豪雨災害（長野県・新潟県）復興へ向けて災関、続々採択
	10	139	'95火山砂防フォーラム開催
	11	140	砂防を語る女性たち
1996 (平成8)	1	142	阪神・淡路大震災から1年
	2	143	砂防における広報活動のあり方を考える「夏休みの自由研究のテーマは雲仙普賢岳」
	3	144	砂防設備の耐震設計に関する検討委員会報告書
	4	145	利賀・ツクチェむらおこし交流展inネパール
	5	146	「立山カルテラ砂防博物館（仮称）」着工
	6	147	土砂災害に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	148	二次災害防災訓練と同時進行という新しい試みが行われた平成8年度土砂災害防止月間推進の集い（全国大会）
	8	149	'96吹上浜砂の祭典にさぼうランド出展
	9	150	'96火山砂防フォーラム「静かなときは何をすべきなのか？」
	10	151	「砂防の父・赤木正雄」（矢野義男氏）
	11	152	「水辺の楽校」モデル事業 流路工を自然とのふれあい教育の場とする試み
	12	153	桜島砂防事業・歴代所長懇談会「桜島、現在に至る道程とその未来」 伊豆大島・三原山噴火10年記念事業・火山砂防フォーラム 利根川水系砂防工事事務所 砂防・地域づくり「夢フォーラム」

年	月	No.	特 集 記 事
1997 (平成9)	1	154	座談会「砂防に携わる女性たち―これからの砂防事業を見つめて」 平成8年度雪崩防災週間シンポジウム「ゆとり都山形・雪との共生を考える」
	2	155	愛媛県久万町で始まった災害関連緊急地すべり対策事業 動き始めた砂防ボランティア活動
	3	156	六甲山系グリーンベルト整備事業 地域の人々の手による植樹でスタート
	4	157	世界遺産とともに 宮島紅葉谷川庭園砂防
	5	158	建設省田畑砂防部長に聞く「21世紀への砂防事業の新たな展開」
	6	159	平成9年度土砂災害防止に関する絵画・ポスター・作文コンクール入賞作品発表
	7	160	砂防ボランティア色に染まった平成9年度（第15回）全国大会
	8	161	庄川水系利賀川砂防改良事業利賀川遊砂地工事起工式
	9	162	'97吹上浜砂の祭典に出現した雲仙普賢岳
	10	163	'97火山砂防フォーラムin箱根「ぼくらの山は天下の嶮」 長野県白馬村・小谷村平成7年7月梅雨前線災害から復興への道
	11	164	さまざまな反響を呼んだ「危険箇所通知DM」
	12	165	雲仏・普賢岳砂防指定地利活用SPORTS FESTIVAL'97／地すべりフォーラム'97「地すべりとまちづくり」／尊い人命を奪った蒲原沢土石流災害に学ぶ
1998 (平成10)	1	166	環境FORUMパネルディスカッション（抜粋）「信州の川と森を考える」
	2	167	平成9年度雪崩防災シンポジウム開催（概要）「雪国の活性化をめざして」
	3	168	長野オリンピックの成功を安全面から支援した砂防事業 安政の飛越地震140年記念シンポジウム「巨石がきた道から何を学ぶのか」
	4	169	富士川「砂防・夢フォーラム」開催 砂防を教材とした教育機関の取り組み 立山砂防工事事務所
	5	170	砂防資料館を見にいこう！ 全国砂防関係資料館・博物館リスト30
	9	210	女性技術者座談会「21世紀の砂防 女性のパワー、視点を生かそう」
2002 (平成14)	1	214	日本列島縦断るぼ（第1回） I Tに取り組む地域の建設産業
	3	216	日本列島縦断るぼ（第2回） 地域に根ざす建設業経営の課題
	6	219	日本列島縦断るぼ（第3回） 天空の工事現場をみる
	9	222	日本列島縦断るぼ（第4回） 四国山中の若き経営者の挑戦
	12	225	平成の鳶崩れに備える 天然ダムによる大土石流を想定した防災訓練実施
2003 (平成15)	1	226	日本列島縦断るぼ（第5回） 3Kの解消は砂防工事現場から
	4	229	日本列島縦断るぼ（第6回） CALS/ECが砂防現場に押し寄せてきた
	7	232	平成15年度「砂防関係工事現場代理人の会総会」並びに「安全施工管理技術研究発表会」開催される／平成15年度（第21回）土砂災害防止推進の集い【全国大会】in静岡
	8	233	日本列島縦断るぼ（第7回） 砂防事業のISOの取り組み
	10	235	砂防講演会「災害と過疎と砂防」開催 小谷村前村長・郷津久男氏が地元小谷村で講演
	11	236	日本列島縦断るぼ（第8回） 総合評価型落札方式による工事
2004 (平成16)	1	238	集まるう現場代理人 昨今の官民のコミュニケーション、何とかならないか―序章―
	2	239	日本列島縦断るぼ（第9回） 砂防工事に携わる地域建設業が直面している課題
	3	240	集まるう現場代理人 昨今の官民のコミュニケーション、何とかならないか（第1回）
	4	241	集まるう現場代理人 昨今の官民のコミュニケーション、何とかならないか（第2回）
	5	242	日本列島縦断るぼ（第10回） 兵庫県南部地震発生10年を迎えた六甲砂防
	7	244	平成16年度砂防関係工事現場代理人の会総会並びに砂防関係工事安全施工管理技術研究発表会開催される
	8	245	富士砂防の現場から 溪流保全工工事における女性誘導員の配置及び記念植樹の実施
	9	246	速報 新潟豪雨における砂防ボランティア活動 日本列島縦断るぼ（第11回） 総合評価落札方式による砂防工事Ⅱ
	10	247	福井豪雨における砂防ボランティア活動
	11	248	土砂災害各地で続発 建設作業員も救助・復旧作業にかけつける 浅間山火山噴火における事務所の取り組み
	12	249	新潟県中越地震における砂防ボランティア活動 愛媛豪雨災害で復興に尽力した建設業従事者
2005 (平成17)	1	250	日本列島縦断るぼ（第12回） 地域を守る強い使命感 ―新潟県中越地震災害復旧に活躍する「十日町支部災害対策本部」―
	2	251	行政サイドからの情報 平成17年度砂防関係予算内示概要と三位一体改革
	3	252	対談「新潟中越地震・皆川優太ちゃん救出劇―あの現場には砂防専門家がいた！」
	10	259	8.11白馬大雪渓崩落事故
	11	260	台風14号豪雨により各地で発生した土砂災害／「愛・地球博」砂防出展の結果報告

年	月	No.	特 集 記 事
2006 (平成18)	3	264	「由比地すべり対策事業起工式」及び「幸田文・文学碑除幕式」開催報告
	4	265	豪雪レポート「新潟県における今冬のこれまでの雪崩発生状況と対応について」
	10	271	平成18年7月豪雨災害における砂防ボランティアの活動状況について
	11	272	常願寺川砂防100周年の集い開催
	12	273	立山砂防100周年座談会「現場代理人から見た立山砂防の今・昔」
2007 (平成19)	12	273	新潟県中越地震から2年
	4	277	「平成18年度雪崩防災シンポジウム」開催報告
			「地すべりフォーラム2007 in 由比」開催報告
	5	278	平成19年(2007年)能登半島地震による土砂災害
	6	279	能登半島地震におけるボランティア活動
	7	280	三重中部地震における砂防ボランティア活動
	8	281	寄稿「西南戦争から130年、あらためて考える『安全なくらし』の基本」
	9	282	新潟県中越沖地震
2008 (平成20)	11	284	大谷崩300周年座談会「大谷山腹工の今昔」
	12	285	砂防技術の今後の展望(前編)
	1	286	砂防新技術の今後の展望(後編)
	2	287	座談会「民間・砂防行政の連携協会による砂防広報活動」(前編)
	3	288	座談会「民間・砂防行政の連携協会による砂防広報活動」(後編)
2009 (平成21)	7	292	砂防関係工事現場代理人の会総会に寄せて
			平成20年度土砂災害防止推進の集い「全国大会」
	8	293	平成20年岩手・宮城内陸地震
	9	294	多治見砂防国道事務所と「砂防関係工事現場代理人の会」との意見交換会
	12	297	平成20年度砂防関係事業補正予算について
2010 (平成22)	1	298	富士川砂防事務所と砂防関係工事現場代理人の会との意見交換会報告
	3	300	創刊から300号まで—メディア砂防の25年間をふりかえる
	5	302	山梨へようこそ／砂防遺産の地域がつなぐ絆—赤谷川と万内川の砂防交流
	7	304	平成21年度「砂防関係工事現場代理人の会」全国大会報告
	8	305	緊急取材 山口県防府市を襲った土砂災害
			七五三掛地すべり取材記 災害の姿と対策の現状
	9	306	「台風と土砂災害」(特定非営利法人防災情報機構会長 伊藤和明)
	10	307	「洞谷災害復興30周年記念式典」開催報告
	11	308	現場で役立つ雪崩の基礎知識2009
	12	309	地すべり対策技術の今
	3	312	座談会「キャンプ砂防を語る」
	4	313	「歴史的砂防施設」が結ぶ絆 万内川・牛伏川砂防遺産学習交換会
2011 (平成23)	5	314	広島へ行こう！
	7	316	土砂災害防止「全国の集い」in広島
	8	317	三宅島噴火災害から10年
	10	319	キャンプ砂防が拓く砂防への道のり
	11	320	2010火山砂防フォーラム
	12	321	雪崩現象の基礎知識
	1	322	砂防の海外技術協力
	3	324	新燃岳の噴火に伴う緊急対策
2012 (平成24)	5	325	東北地方太平洋沖地震等「巨大地震日本を襲う」
	7	326	普賢岳大火砕流から20年
	9	327	稗田山崩壊から100年
	11	328	蒲原沢土石流災害から15年「災害に学んだ砂防工事の安全対策」
	1	329	座談会「砂防教育元年」を迎えて(前篇)
	3	330	座談会「砂防教育元年」を迎えて(後編)

2. 「月刊メディア砂防」歴代砂防部長の年頭の辞に見る砂防行政の動向

「月刊メディア砂防」では毎年新年号に、時の砂防部長より寄稿していただいた「年頭の辞」を掲載してきた。

これらの言葉から、その時々建設省・国土交通省砂防部の重点施策や、防災ソフト対策に対する考え方などを伺い知ることができる。



〈1985.1〉

新しい年の初めに

矢野 勝太郎

明けましておめでとうございます。

昨年は何かとお世話になり有難うございました。ふりかえって見ますと、去年は台風が1つも上陸しないと云う不思議な年でありまして、一般的な災害は少ない年となりましたが、土砂災害の方は、やはり各地で発生し、尊い人命が失われているのであります。

特に、熊本県の五木村、長野県の王滝村等では、多数の人命が損なわれ、大きな社会問題となったことは御記憶にも新しい事と存じます。

この様に打ちつづく土砂災害から人命を守ることとは、砂防関係にたずさわる者の大きな責務であり、このために予算の獲得、新しい政策の検討及び実施、新しい工法の研究等を、一刻もおろそかにすることができないのであります。

緊縮財政のこの時代、ここ数年予算の大幅な増額を期待することは困難であります。一方、上記の様に土砂災害は絶えず我々をおびやかして居る現状であります。

この様な時にこそ、我々は力を合せ、頭脳を結集して土砂災害撲滅に努力しなければならないと存じます。

その様な意味合で、59年度から「総合土石流対策モデル事業」を直轄で実施しております。これは一言で云えば「雨量計」と「電波」と「電算機」で、時々刻々の雨の状況を把握すると同時に、その情報を地域住民に知られ、警戒避難のデーターとしていただく方式であります。この様にわずかな金で人の命を救う方法について、今後はさらに研究をつみ重ね、発展させて行かなければならないと存じます。

この「月刊メディア砂防」も、以上の点から、読者諸氏の良きアイディア、あるいは立派な御経験の発表の場となることを期待するものであります。

砂防工事を発注する側と受注される側、砂防行政の企画側と実施側等々、1つの組合せが、互に意見を交換し得る場として、この雑誌が、今後御発展される事を心から望むものであります。

新しい年の初めに「月間メディア砂防」への期待と読者の皆さま方の今年の御多幸を心から願う次第であります。

新しい年の初めに

矢野 勝太郎

明けましておめでとうございます。

皆様には、お元気で新春を寿かれた事と拝察いたしております。今年は「砂防広報センター」におかれましても、創設3年目となり、幹部の皆様の陣容も新たに大いに進展される事と期待しております。

当センターも、昨年は「メディア砂防」の発刊、各地での講習会の開催、砂防国際シンポジウムへの御援助等々、大いに御活躍をいただき我々としても心から感謝申し上げているところであります。

読者の皆様からも当センターの育成に、何かと御協力御援助を賜わっております事に心からお礼申し上げます。

昨年11月コロンビアのネバドデルルイス火山で融雪による泥流が発生し多くの人が尊い生命を失った事は、御記憶に新しいと存じます。くわしい事情はまだ明確ではありませんが、当時すでに危険区域を示す図面ができ上がっていたとの報道もあり、地域の住民に今少し泥流に対する知識があれば、これほどまでの惨事には至らなかったかも知れないと思うとき、正しい情報を正確に伝える事が如何に大切かを知るのであります。このためには日頃から土砂災害に対する正しい認識を、地域の人々に持っていただく事が重要なことであると考えています。

また一方、行政側の土砂災害防止に対する努力についても、正しい評価をしていただくことを忘れてはなりません。「砂防広報センター」には、こうした広報面での重要な仕事の他に読者と行政との相互理解を進める大きな役割があると存じます。

読者の皆様の砂防に対するお考え、御努力、御批判等を正確に行政側に伝え、また行政側も方針、考え方等を読者の皆様に御理解していただきやすく伝える「情報媒体」としての働きも大切であると存じます。

この様に新しい分野での発展が大きく要求されている「砂防広報センター」の今年の御活躍を我々も大いに期待しているところであります。

今年こそ皆様と手をたずさえて、土砂災害による死者の根絶と砂防関係事業の一層の発展とに大いに努力しようではありませんか。

私も微力ながら力一杯頑張りますので、よろしく御指導賜わります様お願い申し上げます。

新春のごあいさつ

成田 久夫

新年あけましておめでとうございます。

「メディア砂防」読者の皆様方には、平素から砂防関係事業の推進にご理解、ご協力をいただき、ありがたく厚くお礼を申しあげます。

昨年は、貿易摩擦や円高不況など内外ともに厳しい年でありましたが、公共事業は、内需拡大の要請から、年度半ばに大型の補正予算が組まれ、長年続いた抑制から拡大に転じ、明るさの見られた年でありました。われわれの担当している砂防関係事業においても事業費が増え、事業が進捗した年でありました。また、土砂災害は各地で発生したものの、人命にかかわる災害の少ない年でもありました。

わが国は、地形、地質、気象等の自然条件と、斜面または斜面周辺に集落などがある等の社会条件から土砂災害の危険箇所が全国に約16万箇所もあり、毎年、全国各地で土砂災害が発生しております。あらゆる機会をとらえて、危険区域に住んでいる人々に土砂災害の恐ろしさ等を理解していただき、危険を未然に防止することが肝要であります。

昨年は、直轄砂防事業に着手して60周年を迎えた手取川(金沢工事事務所)や50周年を迎えた最上川(新庄工事事務所)、渡良瀬川(渡良瀬川工事事務所)、魚野川(湯沢砂防工事事務所)、木曽川、庄内川(多治見工事事務所)、天竜川(天竜川上流工事事務所)、安倍川(静岡河川工事事務所)をはじめ、直轄地すべり対策事業に着手して25周年を迎えた大和川(大和川工事事務所)など各所で節目を迎え、それを記念して砂防関係事業についての認識を深めていただくための行事が開催されたところであります。

本年は、第2次急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画(所要額、8,800億円)を策定し、事業を強力に推進しなければならない年であります。さらに、砂防事業、地すべり対策事業、雪崩対策事業についても強力に推進する所存でありますので、皆様方の一層のご協力をお願い申し上げます。

「メディア砂防」も昭和59年4月に創刊されて以来、本年で5年目を迎えられるわけですが、皆様とともに着実に発展されることを心からお祈りいたしまして、年頭のごあいさつといたします。

新年を迎えて

友松 靖夫

昨年は砂防関係行政にとって記念すべき年でありました。予算の久しぶりの大幅増や、急傾斜地崩壊対策事業の第2次五ヶ年計画策定に始まり、地すべり等防止法制定30周年など、多くの記念すべき時を迎えました。事業の展開においても、NTT株式売却益を活用した地域振興、開発支援型事業がとり入れられ、より一層地域に密着した事業の展開が強められてきました。砂防関係事業は、本来地域との一体性の強い事業ですが、防災という点にさらに他の要素を付加した事業を実施できるよう、発想をひろげてきております。

例えば、「緑の砂防ゾーン創出事業」のように、景観・環境の創造、いこいの場の提供という観点から施設計画を作るといった事業等であります。このような事業を計画するためには、従来以上に地域の意見、発想、助言を必要としますし、これらの計画を練り上げる過程において、地域に事業に参加するという意識が芽生え、ひいては砂防一災害防止という事柄が日常的な思考、感覚、知識として地域の方々の頭の中に根付いてくることが期待されます。地域の方々の能動的な力を引き出す努力と、地域が何を期待しているかを把握することが今まで以上に重要になってくると考えます。

本年は、従来の砂防事業を火山地域と一般地域に分け、それぞれの特性に応じた事業展開ができるよう整理をしたり、砂防施設等を潤いのある溪流、斜面空間の中で、景観の一部として活用できるような配慮とか、施設ゾーン全体を公園とか自然空間としてよみがえらせるとか、あるいは溪流や斜面の活用とそのため防災施設設置に対する支援、さらには急傾斜の事業のようにきめ細かな制度の充実等、多面にわたる配慮をしつつ、事業を繰り抜けていくことになります。

さらに海外に目を転ずれば、第3回の国際砂防シンポジウムがインドネシアで開催されますし、海外技術協力もさらに拡大していくことが予想されます。また全世界的な「防災の10年」に対する準備も活発化していきます。世界の中の日本の砂防に対する期待も一層高まってまいります。

新しい年を迎えるにあたり、気持を新たにして砂防関係行政の充実を図り、災害のない住み良い地域づくりを考えていく所存であります。引き続き熱意あふれる関係各位のご支援をお願い申し上げます。

新年を迎えて

友松 靖夫

新年あけましておめでとうございます。

「メディア砂防」の読者の皆様には、平素から砂防関係事業の推進に格別のご支援、ご協力をいただき、心から厚くお礼申し上げます。

昨年は、昭和から平成へと新しい歴史の幕開けを迎えました。新しい時代を目指して、全国各地で「ふるさと創生」や「新しい町おこし、村おこし」など、地域活性化に向けてのさまざまな取り組みがなされています。

砂防関係事業においても、従来から多様化した地域のニーズを取り込んだ新しい施策の展開を図っています。しかし、その根幹にある防災を忘れてはなりません。防災なくして地域の発展はありません。

昨年は沖縄県を除く全県で土砂災害が発生いたしましたが、こういった時に被害を少しでも軽減するために、ハード対策もソフト対策も盛り込んだ「総合土砂災害対策モデル事業」や「土石流危険溪流総合整備事業」などをスタートさせましたが、今後も地道で、息の長い取り組みが必要だと思っています。

また、雪崩災害に対しても、昭和60年度より雪崩対策事業が創設され、主としてハードな対策を推進してきましたが、6月の「土砂災害防止月間」のような取り組みをすべく、12月1日からの第1週を「雪崩防災週間」に設定し、昨年12月1日には長岡市で創設全国大会を開催いたしました。今後の皆様方のご支援、ご協力をお願いいたします。

今年の4月1日から9月30日にかけて、大阪市鶴見緑地で「国際花と緑の博覧会」が開催されます。267の国内出展、120の海外出展が予定されていますが、この中に「砂防ランドー砂防への招待ー」と銘打って、砂防関係の出展を行います。開期中はこのエリアを使ってさまざまなイベントも検討中です。皆様方の暖かいご支援、ご協力をお願いするとともに、大勢の方々の参加を期待しております。

新年を迎えて

友松 靖夫

新年おめでとうございます。「メディア砂防」購読者の皆様や、砂防広報センターの関係者の皆様方には、平素から砂防関係事業の発展、普及にご支援、ご協力を賜り、心から厚く御礼申し上げます。
昭和から平成へと時代は移り、早や3年を迎えました。新しい時代の幕開けにふさわしく、ここ数年、新しい町おこしや村おこしなど、地域活性化への取り組みが全国各地で行われています。

砂防関係事業におきましても、こういった時代の流れの中で、少しでも地域活性化のお役に立つようにいろいろと知恵を出し、新しい施策をうち出してきました。そして平成3年度からは、これらを集大成した「砂防コミュニティ事業」を実施することにしております。

これらの事業とは別に、全国各地で各種多彩なイベントも開かれております。これらのイベントの企画から実施にいたるさまざまな段階において、砂防広報センターの協力をいただいております。特に昭和63年7月、鹿児島で開催された「国際火山会議」における「砂防展」や、昨年の「花と緑の博覧会」における「さぼうランド」の出展、ならびにそれに関わるさまざまな関連行事、8月31日に開かれた「S A B O国際シンポジウム」などのビッグイベントも、砂防広報センターに一元的に引き受けていただき、いずれも成功裡に終了することができました。

これは砂防広報センター設立後、たゆまぬ努力を重ねてこられた関係者の方々の力であり、また常日頃よりセンター発展のためにご支援くださっている購読者の方々の力によるものと、心から感謝いたしております。

本年もまた広報活動に、イベントに、記念事業にと、さまざまな分野において、砂防広報センターのさらなる活躍に熱い期待を寄せています。皆様方の暖かいご支援も併せお願い申し上げます。

新年にあたって

松下 忠洋

新年あけましておめでとうございます。
「メディア砂防」の読者の皆様には、日頃から砂防関係事業の推進ならびに土砂災害防止のための諸事業に特段のご支援、ご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

去年は、春先から長崎県の雲仙普賢岳火山噴火災害が発生しました。また、秋には台風17号、19号がわが国に上陸し、多くの被害を発生させました。

このような全国的な、また火山地域での激甚な災害は、あらためてわが国がいかに土砂災害に弱い体質を有しているかを世に示しました。とりわけ、普賢岳に発生した火砕流と土石流は、連日テレビや新聞等マスメディアで全国的に報道されたため、国民のほとんどがその名前を知るに至っています。

それだけ火山災害を防止するための火山砂防事業に国民の期待が高まっているわけであり、火山地域における土砂災害から人命・財産を守り、美しい景色と環境を守る砂防事業の展開をはかっていきたいと考えています。

また、台風19号は強い風とともに去っていきましたが、その風により多くの立木が倒され、山に残った林木の多くも根がゆすられて、山全体がもろくなっています。そのため今後強い雨が降ると山崩れや土石流の発生が予想されます。その点を充分留意して、事前に予防対策をたてたいものです。

本年は第8次治水事業五箇年計画の初年度の年であります。目前にせまった21世紀、後世に良質な社会資本を残すよう努力すべき重要な時であります。まさにこの時期に、安全で快適な国土基盤をつくるため、砂防技術の総力をあげて頑張りたいと考えています。

このように世の中から期待されている砂防関係事業を実施するためには、広報活動をはじめ多くの分野で皆様の温かいご理解とご支援が必要です。

今年もよろしく願いいたしまして、年頭の挨拶といたします。

新年を迎えて

益子 恵治

新年あけましておめでとうございます。
「メディア砂防」の読者の皆様方と砂防広報センターの関係者の皆様方には、砂防関係事業の促進、充実に特段のご支援・ご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

さて、砂防広報センターは昭和58年11月に設立されましたが、今年でちょうど10周年を迎えられることとなりました。全国各地の砂防事業関係者に対して工事や調査における新技術・新工法及び行政情報を広め、そして一般住民に対しては土砂災害やその防災対策及び砂防事業等についての認識と理解を深めるなど、数々の業績を積み重ねてこられました。

この間、世界は政治経済構造に大きな変化を生じ、地球的環境問題が21世紀の各国民のあり方に大きく影響を与えようとしている一方、国内では、世界有数の経済力をどのように活用し、どのような社会や国土を構築すれば良いのか、多様な選択が議論されています。

しかしいづれにしても、新経済計画、いわゆる生活大国五ヶ年計画が示す「地球社会と共存する生活大国」の創造のためには、社会資本の充実が要であり、欧米先進国にはるかにおくれたその質と量をレベルアップさせる必要があります。これまでに安全で快適な生活環境の改善や向上をめざして、砂防関係事業等も懸命に進められて参りましたが、その整備水準は約20パーセントと依然として低く、国民は水害、土砂害等の恐怖から逃れ得ないのが実情です。全国に散在する約16万箇所に及ぶ土砂災害危険箇所に居住する1,000万人余の方々が一日も早く安心して生活ができるよう、今後とも引き続き努力を傾注していかなければなりません。関係者の皆様方の温かいご支援を切にお願いする次第であります。なかでも広報活動につきましては、その重要性に鑑み、砂防広報センターのさらなるご活躍に一層の期待を申し上げたいと思います。

今年もまたよろしく願いいたしまして、年頭の挨拶といたします。

いい溪流や斜面を造りましょう

大久保 駿

砂防がどんどん変わっています。近くの砂防の仕事をしている溪流や斜面をちょっと見に行ってみませんか。最近の砂防施設、地すべり防止施設、がけ崩れ防止施設が昔のものに比べて大きく様変わりしてきているのに気付かれるのではないのでしょうか。

砂防ダムの前には樹木を植え、修景に力を注ぎ、流路工は自然石を使った曲線的な護岸になり魚道もでき、背後には植樹もしてあります。自然を生かし、保全し、維持し、回復させようと工夫がしてあります。深礎工や集水井工など地中での構造物が主体の地すべり地ではその緩やかな斜面は公園に生まれ変わっています。人家の裏の急傾斜地の斜面ではむき出しのコンクリートの壁に代わって緑や花のあふれる斜面空間が出現しています。

画一から多様への変化であり、自然に正面から向き合おうとする変化であり、いろいろな役割を持たせようという変化であり、そして何よりも災害防止という機能追及に加えて品性追及への変化だと思います。溪流に斜面に、創意と、いいものを造ろうとする熱意と、そして細かな気遣いが伝わってくるような施設が増えてきていると思いませんか。今年から溪流再生事業も始めます。

ところで、このような溪流や斜面をさらに自然あふれるいい物にするにはどうすればいいのでしょうか。多くの方々が『involve』されてみる…巻き込まれる…のもいいのではないのでしょうか。溪流や斜面の近くの人、工事の要望をする人、受けとめる人、絵を描く人、決定する人、仕事をする人、あとあと溪流や斜面を見守っていく人、訪れる人などなど、いろんな方々が『involve』されて、いい溪流・斜面を造っていつてはいかがでしょうか。どうか一度ぶらっと、そこに住む人として、あるいはリフレッシュに行く人として溪流や斜面を見に行ってみて下さい。きっといいアイデアが浮かび、すばらしいデザインが描け、いい仕事が一工事ができると思います。

平成7年の年頭にあたり新年の御挨拶を申し上げます。砂防に関係する皆様方のご多幸、ご活躍を心より祈念し、そして砂防関係の仕事が多くの方々に関るな形でお役に立てることを祈り、そして勿論、砂防関係事業の発展を衷心より念願して新年の御挨拶とさせていただきます。

〈1996.1〉

昨年から今年へ

大久保 駿

平成8年の年頭にあたり新年のご挨拶を申し上げます。

昨年は阪神・淡路大震災という大変な出来事で年が明け、また梅雨前線などの豪雨による土砂災害が相次いで各地で発生した年でありました。砂防事業を進めていく上でいろいろな教訓が得られた1年であったということが出来ます。

阪神・淡路大震災では危機管理の大切さと震後の二次災害への対応の重要性が指摘されました。

地震直後の危険箇所や施設の点検を迅速に行い、応急・緊急対策に反映させるための『斜面判定土制度』がスタートすることになります。高度な知識の活用とボランティア的な活動をあわせて期待するものです。

都市山麓グリーンベルト整備事業が新年度の新規事業として認められました。市街地に接する山麓斜面で緑の樹林帯を形成し、土砂災害に対する安全度を向上させるとともに、緑豊かな都市環境と良好な景観を創出しようとする事業です。阪神間の市街地の背後の六甲山が過去の幾多の大災害と、それに対する砂防事業により、山を緑に戻し、安定した山や谷を回復してきた成果が今回の震災のときに大に発揮されたというその教訓を事業化したのです。都市計画や公園事業と共同作業になります。

梅雨前線による各地の災害ではいくつかの示唆を我々に与えてくれました。事前の避難がうまくいって、

死傷者につながる災害にならずにすんだという事例が目立ったことです。警戒避難の大切さをあらためて認識させました。新年度の新しい事業として情報基盤緊急整備事業の創設という成果を得ることができました。警戒避難体制の充実におおいに貢献することが出来ます。

また、各地で交通網が寸断され、集落が孤立し、経済活動が停滞した事例が顕著でした。従来から砂防事業で取り組んできた目標の大きなものの1つですが、今度の予算編成では『交通網集中地域での土砂災害対策』を大きな柱として打ち出しました。もう1つの大きな特徴は、砂防施設が整備されたところでは災害防止の効果が見事に発揮されたということです。それでも災害が相次いだのは未整備箇所がいかに多く残されているかを如実に物語った災害でした。

今回の予算編成では急傾斜事業の制度の拡充が認められました。災害弱者に対する施策の拡大と避難地への事業の拡大です。地道な骨の折れる折衝によるものですが、事業の拡充にまた1つ大きな道が開かれました。平成5年の災害が教訓になっています。

さて、砂防関係事業は本来的な目的を達成しながら、多様に多目的的に事業展開を図ってきています。メニューは揃ってきましたが、これからさらにどんどん変貌を遂げていくと思います。いかに地域の実情に合わせ、社会のニーズを充たしていくかということが大事です。広い視野で従来の枠を越えて発想し、世界に冠たる「SABO」はこれだというものを作っていきたいと思っています。

砂防関係事業の発展と皆様方のご多幸・ご活躍を念願して、新年のご挨拶とさせていただきます。

〈1997.1〉

牛歩

田畑 茂清

あけましておめでとうございます。

昨年は大変お世話になりました。建設省砂防部の諸君が平成8年10大ニュースをまとめており、それを見ますと、(1) 砂防世界を駆けめぐる(世界砂防会義、衆議院災害対策委員会砂防調査に、ネパール砂防センタープロジェクト延長等々)、(2) 神戸震災後のプロジェクト本格化(グリーンベルト構想、砂防ボランティア制度発足等々)、(3) キャンプ砂防(学生に砂防地域の生活を体験させる)や「砂の祭典」等の新機軸関連等が見られます。各々が努力し、「小さなところでもよいから始めよう 小さな1歩が5年後の21世紀に花開く」を合言葉にがんばってきました。皆様にはどう映ったでしょうか。

特に昨年末には、長野・新潟県境で発生した砂防工事現場での土石流災害に対しては、あたたかいお励まし、御支援をいただきありがとうございました。災害現場にずっと常駐した私にとって本当にうれしゅうございましたが、「今後検討せねばいけないなあ」と感ずる点も多くありました。今後皆様に明らかにしていくつもりです。

1996年は行革論議に火のついた年になりました。永田町、霞ヶ関はもとより全国、我々をとりまくすべてのものが出発点に戻ったような気がします。

幸い今年はうし年です。30歩を20.7秒でセカセカと歩く日本人は世界一だそうです。これでは何が本質であるかをしっかりと見極めて歩むわけにはいきません。こざかしくない落ちついた牛の歩みのように、ゆっくりと見極めて歩む仕事をしてみたいものです。そのためには、(1) 情報を共有し、(2) 我々の歩むべき基準をしっかりと持って、(3) 我々の底力をみせるべく、本年もがんばりたいと決意するものです。年賀状にもたくさんの人達からいろいろな提案が書かれてありました。それらを実現するためにも……、どうぞよろしく。

〈1998.1〉

まず変わろう

ーコミュニケーション元年

田畑 茂清

あけましておめでとうございます。

昨年は大変お世話になりました。砂防ボランティア活動は軌道に乗ってきましたし、緑の施策もグリーンベルト構想や間伐材の利用等多面的な展開を始めたようですし、急傾斜地崩壊対策事業五箇年計画も新しく危険地増加抑制策を盛り込んで無事認められました。昨年8月から吹き荒れた中央省庁再編も、皆様方の声によって国土整備の一環として砂防事業をすすめることになりました。

今年は行政改革の方向に沿って、種々の見直し、再構築が始められます。こういう時だからこそ、自己変革が求められ、情報公開・説明責任・透明性の確保の中で、お互いの信頼関係を築いていくことが必要です。

信頼関係は、コミュニケーション活動から生まれます。これを通じて、人々が何を求めているかといったニーズを把握し、人々の期待に応えられる行動に表わせるのです。

幸い我々は砂防広報センターという機関をもち、メディア砂防という月刊誌をもっています。積極的に新しい発想で、自ら考え、行動し、主張すべき基本理念を理解してもらおうではありませんか。

砂防は行政のみで進められるものではありません。シンポジウムの開催、ボランティア活動等に加え、新しいコミュニケーション手段を駆使し、「客観的な情報を正確に、迅速に、分かりやすく知らせること」を原則に、地域とのコミュニケーションによって、地域の人々とともに、砂防について考えていこうではありませんか。専門的な内容を分かりやすく説明して、地域とのコミュニケーションに携わることこそ、資質の向上、やりがいにつながるわけですから。

今年もどうぞよろしく。



感動を与える砂防施設を

亀江 幸二

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

国土を保全し、土砂災害から国民の安全・安心を確保する砂防施設は、砂防の現場に携わる方々によって現実の形となり、はじめてその機能が発揮されます。全国で約2,000箇所の砂防工事が実施されていますが、厳しい環境にある砂防の現場において、日々ご活躍をいただいていることに対し、心から感謝申し上げます。

○多発する土砂災害

記録的な災害多発年であった平成16年に続き、昨年は、福岡県西方沖地震、梅雨前線豪雨、台風等によって約800件の土砂災害が発生しました。中でも記録的な大雨を降らせた台風14号では、死者・行方不明者29名のうち土砂災害で22名を数え、土砂災害がいかに人命を奪う悲惨な災害であるかを改めて示しました。また、近年集中豪雨が増加しており、土砂災害の多発化が心配されます。

わが国は、荒廃が著しい山岳地域や火山が多く、豪雨等によって大量な土砂を流出させています。また、人命災害に直結するような土砂災害危険箇所が21万にのぼり、その整備率はいまだに2割程度と低い状況です。都市域の拡大によって危険箇所が増大しているほか、流木による災害の多発、多い高齢者等災害時要援護者の被災、避難所の被災、集落の孤立化、警戒避難の遅れ等解決すべき課題が増えています。こうした課題の解決には、警戒避難体制の整備といったソフト

対策の推進とともに、土砂災害そのものを減じていくために、ハード対策すなわち重点的な砂防施設の整備が欠かせません。

○大切な技術の向上・工夫と安全対策

砂防工事は、地形や地質など自然条件が異なるそれぞれの現場に最も適した砂防施設を、最も適した工法で施工する必要があります。時として、構造物自体を現地の状況に合わせて変更することも必要であり、砂防の技術的観点と工夫が求められます。また、地域の安全を向上させるための砂防工事、とりわけ災害発生後の緊急的な砂防工事は、現場が極めて危険な状態にあり、慎重な安全対策が必要です。

毎年、6月初めの「土砂災害防止推進の集い」にあわせて、「砂防関係工事安全施工管理技術研究発表会」が開催されますが、今年は秋田県で予定されています。全国から現場に携わる人達が集まり、安全施工・技術開発・地域とのコミュニケーションなどに関して研究発表などが行われます。こうした貴重な機会を通して、さらに工事の安全性や砂防技術が向上することを期待しています。

○感動を与える砂防工事を

立派に完成した砂防施設は、しっかりと土砂災害を防ぐ頼もしい存在であり、しかも心をこめて造った施設は、すばらしい景観のひとつとして見る人に感動を与えるといわれています。砂防の現場は、住民との接点でもあり、地域の方々に砂防事業に対する理解を深めていただく場でもあります。現場で働く方々のご活躍が、地域の方々には心強く映ります。感動を与える砂防施設を、官民が力を合わせて造っていききたいものです。ますますのご活躍を祈念しています。



砂防・防災教育をスタートさせよう

中野 泰雄

明けましておめでとうございます。

皆様には清々しい新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

アメリカ発の株価の大暴落に始まり、世界的な経済不況の動きが激しくなり、厳しい経済環境の中で新年を迎えました。気分を一新して未来志向で年の初めのスタートを切られたことと存じます。

さて、砂防広報の重要性は、今更ながら言うまでもないことであります。

自然の変化や社会の動きが非常に激しくなっています。したがってそれに応じて間違いなく対応するためには、平常状態から異常時への変わり目の変化を的確に把握、適応策というものを素早く立案し実行する必要があります。

例えば朝の天気予報で前線や台風の動きを見、その日の自分の行動範囲の中で「雨がどのくらい降るか、(土砂) 災害に結び付くか。」まで考えるのは、我々のようにそれを職業としている者や過去に災害を経験した者でしょう。あるいは何らかの必要性を持った人か、いわば動物的感覚を失わない人達であります。また一方で文明が進めば進む程、自然の変化を感じる能力や意欲が小さくなると考えられます。

ここに「砂防・防災教育」の出番があります。そしてその「教育」を受け入れる素地は、その人の生い立ち・職業・家族・友人関係などで規定されてくるため、その形成過程に「教育」が必要であります。

昨年3月、都内で防災教育に熱心な大学の先生方にお集まりいただき、ご議論をいただきました。

(1) 子供たちに教えるべき事柄をどの教科で教えるか、また学年はいつ頃が適当か整理する。

(2) 新学習指導要領で、小6理科で「地震」と「火山」が必修化され、小5社会で「自然災害の防止」が盛り込まれた。

(3) 自然現象、災害現象を実感できる体験型教材が不足しているので開発が必要。

(4) 教育の場としての体験型学習は重要。

等の意見や情報が出されました。

これらの意見をベースに全国各地の教育現場で活躍される人々とディスカッションをしながら教材作成・実地研修等を行い、その中から防災リーダー、災害時要援護者等を荷負う人々が生まれて来るようになるよう、進めて行きたいと考えております。

砂防技術者の一分

牧野 裕至

新年あけましておめでとうございます。皆様には健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、皆様には砂防の現場で日々ご活躍頂いておりますこと、心より感謝申し上げます。

土砂災害から国民の生命身体を護り、国民の安全・安心を確保する砂防設備は、砂防の建設現場に携わる多くの方々によって形作られています。砂防構造物は過去の災害実態や、住民の皆様のご要望、地形・地質・環境等を総合的に勘案して、雪や雨も降る厳しい現場環境の中で施工されています。このため砂防工事は工場制作の工業製品と異なり、現場での安全管理や出来形管理、工程管理、経済(原価)管理等非常に高度な技術が求められます。

昨年は砂防工事の現場代理人の方々と工事を発注する事務所等とのあいだで意見交換会が開催され、多くの貴重なご意見を頂きました。崇高な使命を成すに相応しい積算や事務所内の素早い意思決定等多くのご要望を頂きました。こうした機会等を活用し、お互いの意思疎通を図るとともに、理解を深め生産の向上に向けた改善を行うことが必要です。

昨年、立山砂防の白岩堰堤が砂防設備として初めて、重要文化財の指定を受けました。当時の砂防工事に携わった多くの技術者のご苦勞に少しは報いることが出来ました。立山砂防にはこうした構造物に付随していくつかの小さな石碑があります。いわく「護天涯(てんがいを護る)」 「山静川清(やましずかにして川きよし)」。これらは、現場の技術者の気概を小さな石碑に彫り込んだものです。

砂防技術者の気概を示すものは他にも見ることが出来ます。写真(編集部注・略)は明治40年に山梨県の富士川支流屋敷入沢で撮られたものです。なだらかな曲線を描き、寸分の狂いを見せない石積み堰堤の美しさに並び、前年の大土砂災害の中から、砂防堰堤を造りあげた現場技術者の気概がひしひしと伝わって来ます。

この堰堤は、緑に覆われた溪流の中、現在も現役で立派に機能しています。私たちも明治先人に負けないよう民・官それぞれの役割の中で、気概のある施設を造って参りたいものです。

厳しい予算等、現場の皆様には引き続きお世話になりますが、今年もどうぞよろしく願いいたします。皆様のますますのご活躍を祈念いたしております。

現場力 牧野 裕至

新年あけましておめでとうございます。皆様には健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、皆様には砂防の現場で日々ご活躍頂いておりますこと、心より感謝申し上げます。

さて、昨年秋の臨時国会で「土砂災害防止法」の一部改正案が可決成立しました。この「改正土砂災害防止法」は、従来の土砂災害防止法の法益に加え、天然ダムや火山の噴火による土石流や地滑りを対象として、土砂災害が急迫している場合、特に高度な専門的知識及び技術を必要とする場合は国が、その他の場合は都道府県が緊急調査を行い、その結果（土砂災害緊急情報）を関係市町村に通知すると共に国民に周知するものです。

この法律により、大規模な土砂災害から生命・身体を保護する新たな枠組みが整備されました。しかしながら、こうした緊急調査等からの「情報」は情報のみでは「意味」を持ちません。ある情報が当事者に伝わり現場での行動（出力）に結びついて、初めて情報が本来の意味を持つのです。

土砂災害で言えば、土砂災害に対する基礎調査等によって判明した危険な区域や、改正土砂災害防止法の土砂災害緊急情報及び大雨の時の土砂災害警戒情報といった情報に対して、現場での対策工事や避難といったアナログ系の行動（出力）が行われて初めて情報

の意味が完結するのです。

こうした観点で、私たちの身の回りを見渡してみますと、アナログ系の大切さがよく判ります。例えば視る・聴く・嗅ぐ等の情報入力アナログ系に限りませんが、大脳皮質で考えた思想や意志を出力する場合、書く・弾く・話す・まばたきや手振りをする等いずれもアナログ系です。

他の例は近年人気のハイブリッド車にも視ることができます。このハイブリッド車はエンジンとモーターを組み合わせると共に、車両姿勢が乱れた際に横滑りを防ぐ装置など高度な電子技術で制御され、高い燃費等性能を誇ります。しかしながら、車の基本性能を大きく左右するのは電子システムを支えるボディー剛性や機械部分のサスペンションです。

土砂災害から国民の生命身体を護り、国民生活の安全・安心を確保する砂防設備は、雪や雨も降る建設現場で多くの方々によって造られています。現場代理人の会では「砂防関係工事安全施工管理技術研究発表会」や「直轄事務所と現場代理人の意見交換会」の実施方法をより現場主義とし、所期の成果を挙げられています。今後も現場力の確保を通じ、民・官それぞれの役割分担のもと、土砂災害対策の骨格である砂防設備をしっかりとしたものとして整備して行かなければなりません。

厳しい予算の中ではありますが、現場の皆様には引き続きお世話になります。今年もどうぞ宜しくお願いいたします。皆様の益々のご活躍を祈念しております。



砂防関係事業で働く皆様へ 南 哲行

このたび、1月1日付で砂防部長を命じられました。昭和52年に建設省（現国土交通省）入省以来、これまで四国、北海道、中部、関東、九州、奈良、東北の地方整備局（地方建設局）や地方自治体で勤務し、昨年末までは砂防部砂防計画課長を務めて参りました。これまでの現場で得られた経験や皆様からいただいた情報を十分に活かし、これまで以上に土砂災害防止と国土保全に取り組んでいく所存でいます。読者の皆様には一層のご支援とご協力をお願いいたします。

さて、昨年2010年は、広島県庄原市、鹿児島県奄美大島をはじめ1,128件もの土砂災害が発生し、死者10名、行方不明者1名と尊い命が奪われました。被災された方々に心からお見舞いを申し上げ、また、これらの災害の対応や復旧にご尽力された建設業の方々、及び様々な面でご支援ご協力を頂いた関係者の方々に敬意を表します。

砂防部の調査では、2001年から2010年までの10年間に年平均で1,062件の土砂災害が発生しています。気象庁によりますと2010年の台風の発生数は14個で台風統計開始（1951年）以降最少でしたが、土砂災害の発生件数は年平均以上になりました。このことは、ある程度予測可能な降雨よりも、発生予測の困難な局所的で突発的な集中豪雨により対応の困難な被害が増大傾向にあることを伺わせます。

現在、土砂災害危険箇所を有する市区町村の数は1,613です。これらの市区町村は、我が国の全市区町村数1,750（2010年3月末現在）の92パーセントをも占めており、土砂災害に対する安全の確保は全国の地域の共通の課題と思っています。近年土砂災害の現場で私が特に感じることは、家屋や人家に被害が及んでしまった場合には、たとえ被災地域が1地区であっても、直接の被災地区・被災者のみならず、周辺地域に例えば交通途絶等で社会的・経済的に多大な影響を与え、地域住民の生活や自治体行政に長期にわたる負担を強いることとなり、結果として地域の疲弊に繋がりがかねないということです。

砂防関係事業を含め公共事業を巡る情勢には厳しいものはありますが、地域の社会や経済の安定・発展のためには、土砂災害を予防することが第一であり、そのためにはハード中心とした対策もしっかり実施し

て行く必要があると思っています。

その実現のためには、皆様に「良い施設を早く・安く・安全に」作っていただくことが大変重要です。皆様がそのために日々現場で様々な工夫を凝らし、地域住民や環境保全への対応も怠り無く努力をしておられることに心から感謝を申し上げるとともに。そこから生み出される様々な技術開発を後世につなげて頂けますよう、期待しております。私自身が体験したことで、1977年の有珠山の噴火後に、北海道庁の室蘭土木現業所洞爺出張所に勤務した際、有珠山の泥流対策施設の設計や施工にあたってまさに最前線で地場の建設会社の代理人さんたちと様々な工夫をしました。その工夫が、その後の全国の火山噴火対策に活用されています。

日本の国土面積の7割は、山地が占めています。砂防を担当するものとして国民の安全な暮らしの確保とともに、貴重な国土を資源として捉え積極的な保全・活用を進める等様々な面から新しい国土保全のあり方を模索していく時期と強く感じています。その第1歩として、地域の住民の方々も参加しつつ、一緒に里山を保全していく「里山砂防」を考えています。読者の皆様にも、地域が自ら地域を守り育てる「里山砂防」に積極的に取り組んでいただき、地域により役立てるようにお力を発揮して頂きたいと思います。

最後になりますが、新たな展開として、地域に壊滅的な被害を及ぼしかねない大規模土砂災害に対しては、昨年末の国会で、国が自ら緊急調査を行う等の規定を土砂災害防止法に盛り込む改正が成立し、政令も公布されました。この法改正は大規模な土砂災害に関する国の責務を明確に位置付けたものであり、国としての役割を十分に果たすため必要な調査研究や技術開発、体制の整備にこれから本格的に取り組んでいきますが、これらの大規模土砂災害に現地で素早く適切に対応するためには、皆様方との緊密な協力体制の構築も不可欠であります。皆様方がお仕事されている地域で大災害が発生したと想定し、そのための準備についても是非お考え頂き、力を合わせて壊滅的な被害から地域を守って参りたいと考えています。

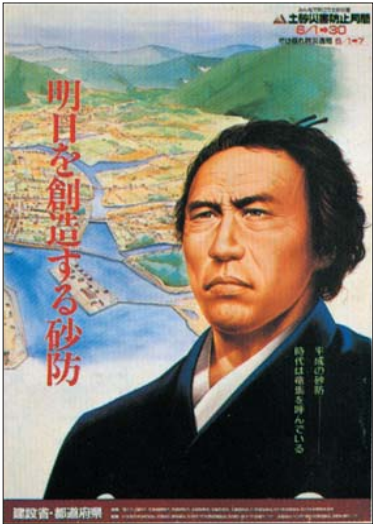
混沌とした時代ではありますが、土砂災害から人の命や暮らしを守ることの重要性は、今も昔も変わることはありません。砂防関係事業に携わる者として、そのような言わば時代を超えた使命と責任を改めて心に刻み、皆様と一歩ずつ進んで参りたいと思います。今後ともご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

3. 土砂災害防止月間・雪崩防災週間ポスター

■土砂災害防止月間

土砂災害防止月間は1982年（昭和57）の梅雨前線豪雨災害（長崎豪雨災害）を契機に、翌1983年に創設された。毎年6月1か月間を防止月間と定め、土砂災害に対する防災知識の普及や、警戒避難体制の整備等に関する各種運動を実施している。

砂防広報センターでは1984年度から、月間を告知するポスターの制作を支援している。



1989（平成 1 年）



1990（平成 2 年）



1991（平成 3 年）



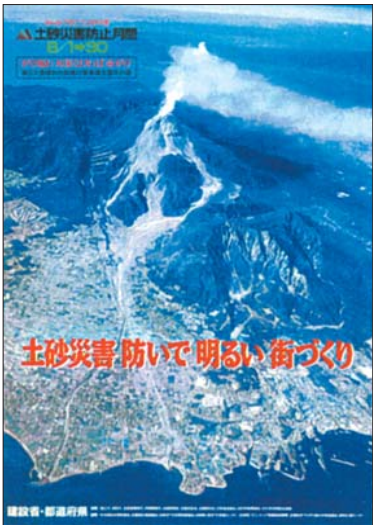
1983（昭和58年）



1984（昭和59年）



1985（昭和60年）



1992（平成 4 年）



1993（平成 5 年）



1994（平成 6 年）



1986（昭和61年）



1987（昭和62年）



1988（昭和63年）



1995（平成 7 年）



1996（平成 8 年）



1997（平成 9 年）



1998 (平成10年)



1999 (平成11年)



2000 (平成12年)



2007 (平成19年)



2008 (平成20年)



2009 (平成21年)



2001 (平成13年)



2002 (平成14年)



2003 (平成15年)



2010 (平成22年)



2011 (平成23年)



2012 (平成24年)



2004 (平成16年)



2005 (平成17年)



2006 (平成18年)



2013 (平成25年)

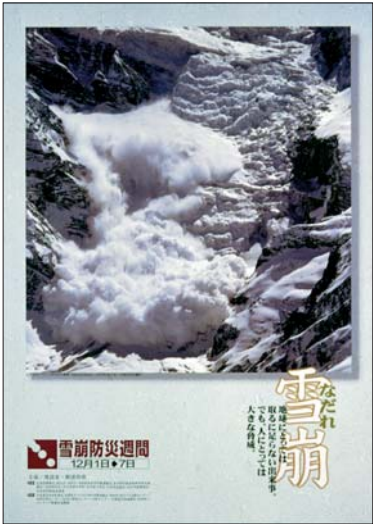


2014 (平成26年)

■雪崩防災週間

昭和50年代後半、雪崩が集落をおそい犠牲者を出す災害が続いたことから、1985（昭和60）年度に、それまでの公共施設等を対象とした雪崩防災対策に加えて、集落保護を目的とする雪崩対策事業が創設された。さらに1989年（平成元年）に、12月1日から7日までを雪崩防災週間とし、雪崩に対する国民の理解と関心を深めるための広報活動等が行われるようになった。

砂防広報センターでは雪崩防災週間創設当初から、これを告知するポスターの制作を支援している。



1996（平成8年）



1997（平成9年）



1998（平成10年）



1990（平成2年）



1991（平成3年）



1992（平成4年）



1999（平成11年）



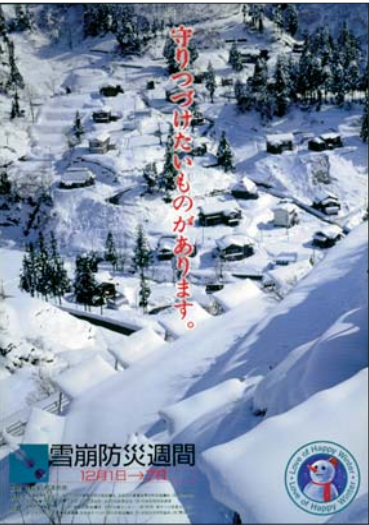
2000（平成12年）



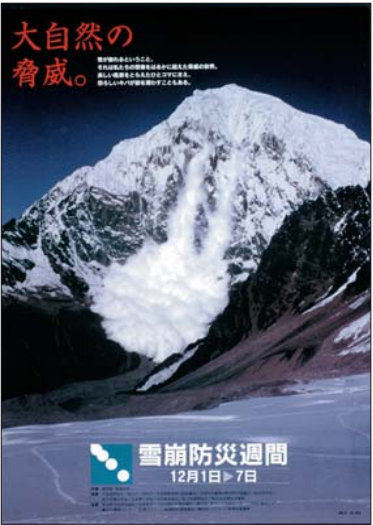
2001（平成13年）



1993（平成5年）



1994（平成6年）



1995（平成7年）



2002（平成14年）



2003（平成15年）



2004（平成16年）



2005（平成17年）



2006（平成18年）



2007（平成19年）



2008（平成20年）



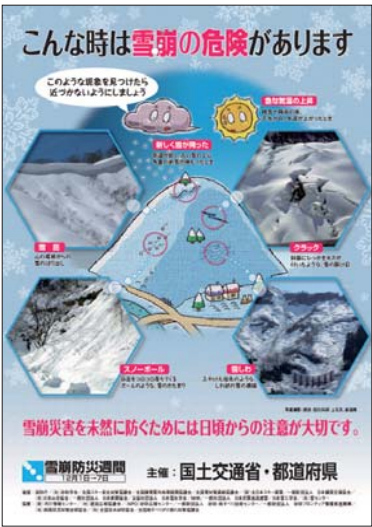
2009（平成21年）



2010（平成22年）



2011（平成23年）



2012（平成24年）



2013（平成25年）

4. 制作した映像

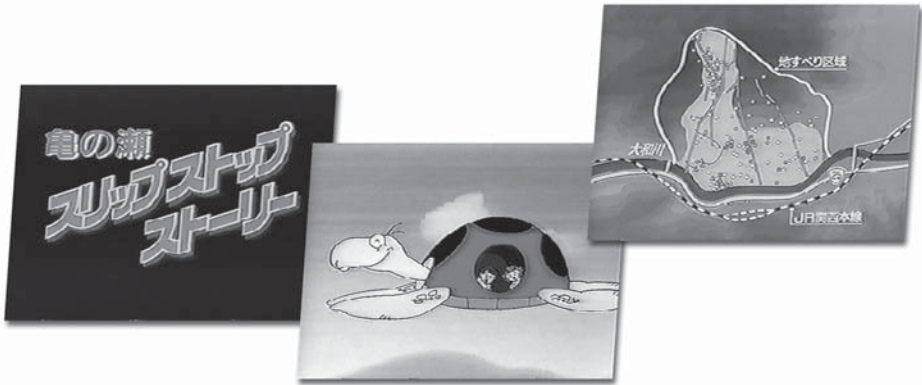
砂防広報センターが30年間に制作した映像は、一般の人々への防災啓発、砂防事務所の事業紹介、各種シンポジウムやフォーラムの解説資材、砂防資料館の映像展示用ソフトなど、計350作品を超える（同ソフトの外国語版は除く）。

1997（平成9）年の出水市・針原川土石流災害を契機に、いかにして一般の人々に土石流の恐ろしさを理解してもらい、迅速な避難行動がとれるよう啓発していくかが砂防ソフト対策の課題となったが、砂防広報センターでは土砂災害をリアルに「疑似体験」できる手法として、早くから3D映像に着目してきた。最初の3D作品は1998年制作の「土石流災害に備えて」（四国山地砂防事務所発注）であるが、ここでは迫りくる土石流の振動をボディソニックで、さらに土石流に被災した実感を「土石流のにおい」で再現するなど、土石流を「五感」を使って疑似体験できるよう工夫した。

年度	企画	表 題	分
1985 昭和60	自主企画	土砂災害のお話 恐ろしい土砂災害 あの山があのか何故―土砂災害はどうして起こる―	20 20 20
1986 昭和61	琵琶湖	ハゲ山を緑に＜日本語・英語＞	各32
1987 昭和62	立山砂防 大隅	富山平野を守る ―常願寺の砂防―＜日本語・英語＞ 桜島の土石流	各13 28
1988 昭和63	松本砂防	流域に生きる 姫川 流域に生きる 梓川・高瀬川 信濃川上流	15 16
	木津川上流 六甲砂防 福井河川	木津川の砂防＜日本語・英語＞ 日本の活火山砂防 真名川の砂防＜日本語・英語＞	各20 18 各15
1989 平成1	福島河川 関東地整 日光砂防 富士川 沼津河川 重信川 松山河川	土砂災害を防ぐ―吾妻山系の砂防― ベネズエラの砂防 鬼怒川上流域を守る＜日本語・英語＞ 巨石の舞 昭和34年土砂災害を思う 伊豆の自然を守る 狩野川直轄砂防＜日本語・英語＞ のびのびランド重信川 ふれあい重信川 砂防ってなあに？―くらしを守る重信川砂防―	20 25 各20 20 各23 11 20 21
1990 平成2	建設省監修 関東地整 日光砂防 富士川 近畿地整 六甲砂防 松山河川	土石流の特徴と前兆現象 砂防工事現場における安全確保 カワセミ・かんちゃんの砂防ダム探検記 地域とともに 南アルプスと共に ―富士川砂防事業― ふくろう谷の仲間たち 鼓動する山河＜日本語・英語＞ EXPO'90 SABO LAND さぼうランド 緑・花・愛ランド四国	7 11 13 20 20 10 各10 20 10
1991 平成3	自主企画 岩手河川 新庄 利根川水系 北陸地整 湯沢砂防 東北地整	雲仙・ピナツボその驚異 八幡平山系 開放講座 川はともだち 生活を守る砂防 水の詩in HOKURIKU 砂防で作る豊かな郷土 ―信濃川下流直轄砂防事業― 砂防への招待 人も自然も輝く東北の砂防	10 11 21 22 9 22 10
	四国山地	四国の地すべり 吉野川砂防の地すべり① 吉野川砂防の地すべり② 地すべりのしくみ 吉野川砂防の地すべり③ 地すべり対策（調査編） 吉野川砂防の地すべり④ 地すべり対策（工事編） 吉野川砂防の地すべり⑤ 暮らしを守る地すべり対策	42 11 5 4 10 5

年度	企画	表 題	分
1992 平成4	新庄	直轄地すべり対策事業30周年記念 事業	25
	関東地整	火山と砂防	5
	日光砂防	日光大谷川流域の微地形	30
	松本砂防	北アルプス 上高地<日本語・英語>	各10
		国際アルプスサミット	22
		姫川砂防三〇年を迎えて―はじめに砂防ありき―	20
		北アルプスの自然と砂防 太郎と花子のアルプス砂防紹介	17
	神通川水系	神通川上流域の微地形（蒲田川 平湯川編）	39
	中部地整	ザ・地すべり 大地のパワー	10
	大和川	亀の瀬 スリップ・ストップ・ストーリー	20
	六甲砂防	阪神大水害の記録 ―住吉川・芦屋川―	20
	地すべりがけ崩れ対策協議会	がけ崩れ―災害と対策―	14
	北陸地整	大のけと人柱伝説	10
	四国山地	吉野川砂防	45
1993 平成5	新庄	うそ？ほんと！ 地すべりのはなし	20
		地すべりを科学する ―人と自然との対話をめざして―	20
	関東地整	砂防は僕らのパートナー	15
	富士川	ケロン太ピョン子 富士川探検	18
	松本砂防	アルプス景観シンポジウム	20
	大和川	平成4年土砂災害防止月間CM	15秒
		平成5年土砂災害防止月間CM	30秒
1994 平成6	岩手河川	人と自然のふれあいの場 八幡平山系	11
	湯沢河川	その日のために - 八幡平の砂防 -	15
	新庄	紙芝居3部作（カッパの恩返し・モグ君の夏休み・夢でよかった）	17
	立山砂防	立山砂防の根幹「白岩砂防ダム」 ―その半世紀の歩み―	10
	近畿地整	リゾートをささえる―砂防新時代の到来―	11
	日光砂防	難に挑む ―大雑山腹工―<日本語・英語>	各20
	雲仙	雲仙・普賢岳 噴火活動と災害	16
		豊かな明日をめざして ―雲仙・普賢岳の砂防―	17
	湯沢河川	守ろう・創ろう・緑豊かで安全な環境を ―八幡平山系玉川水系の砂防―	19
	新庄	覚えていますか 昭和50年8月6日真室川災害を	9
1995 平成7	立山砂防	もう一つの立山―立山砂防―<日本語・英語>	各30
	越美山系	「自然・砂防・文化」―揖斐川上流域の砂防―	15
	四国山地	砂防がつくるやさしい大地―善徳地すべり対策―	20
	雲仙	雲仙普賢岳は今	5
	自主企画	阪神・淡路大震災	5
	福島河川	土砂ものがたり	15
	雲仙所	活火山に挑む 雲仙普賢岳の無人化施工	20
	自主企画	オーストリアの砂防―オーストリアにおける砂防―	40
		オーストリアの砂防―砂防ダムと模型実験によるその効果―	16
		オーストリアの砂防―オーストリアにおける雪崩対策―	20
1997 平成9	岩手河川	砂防って知ってる？ ―八幡平山系の砂防―	16
	利根川水系	譲原地すべりを訪ねて	17
	松本砂防	砂防と北アルプスの四季（第一話） 北アルプスの四季<日本語・英語>	各18
		砂防と北アルプスの四季（第二話） 北アルプスの地形と地質<日本語・英語>	各12
		砂防と北アルプスの四季（第三話） 災害を乗り越えて―オリンピックを迎える白馬村―<日本語・英語>	各11
		砂防と北アルプスの四季（第四話） 自然環境を守る砂防<日本語・英語>	各9
		砂防と北アルプスの四季（第五話） 北アルプスの山麓を走る一本の道 塩の道<日本語・英語>	各11
		砂防と北アルプスの四季（総集編） 緑・花・祭 愛ランド白馬<日本語・英語>	各15
	神通川水系	キャンプ砂防 in 奥飛騨 上宝村で過ごした12日間の記録	30
	新庄	黒淵地すべり―地すべりとまちづくり―	21
	富士川	平成10年度キャンプ砂防開講式	24
		平成10年度キャンプ砂防 キャンプ長講話	52
	松本砂防	砂防工事での安全確保	10
		1995年12月～1997年11月 蒲原沢土石流災害から一年	14
		1995年～1997年 土砂災害	12
		1998 in NAGANO みんなが支えたオリンピック	16
1998 平成10	雲仙	平成10年度キャンプ砂防 懇談会・講演・閉講式	60
	大隅	キャンプ砂防in桜島	22
	四国山地	土石流災害に備えて【3D】<日本語・英語>	各8

年度	企画	表 題	分
1999 平成11	新庄	日本・災害列島	11
	神通川水系	99キャンプ砂防 in 奥飛騨 上宝村で輝いた体験学習の日々	20
	富士砂防	幸田 文 崩れ<日本語・英語>	各12
2000 平成12	飯豊山系	砂防が創る豊かな暮らし	11
2001 平成13	神通川水系	自然と人にやさしい砂防ダム	7
		土石流のメカニズム	1
		2000キャンプ砂防 in 奥飛騨 砂防にかける上宝村の人々に学ぶ	21
	大隅	キャンプ砂防in桜島 2000	22
	自主企画	恵南豪雨災害ドキュメント～天空のさけび～ 平成12年9月12日	70
	松本砂防	僕は砂防の専門家	21
		北アルプス地域の暮らしを守る ―松本砂防工事事務所の取り組み―	24
	神通川水系	キャンプ砂防in奥飛騨2001 5年目を迎えたキャンプ砂防	21
	立山砂防	平成11～13年度 白岩砂防堰堤右岸対策工事	
		赤木正雄 ～砂防への熱きおもい～	10
	富士砂防	富士山御中道「ぐるっと歩こう360度」改訂版	38
		「ザ・土石流」富士山版	4
		堆積した土石流の有効利用	5
		大沢崩れ源頭部対策	4
		富士山の砂防―歴史と現在―	4
		富士山の砂防―その工事の効果―	5
		富士山の砂防―その広報活動―	5
		富士山の砂防―技術開発―	5
		富士山の砂防―砂防事業への意見―	6
		富士山の砂防―植物を活かす―<日本語・英語>	各4
		富士山の土石流	9
		富士山の土石流―その監視と観測―	5
		富士山の土石流―その特徴―	5
		富士山の噴火履歴と災害	5
		富士山大沢扇状地での砂防計画<日本語・英語>	各4
		富士山麗南西野溪での砂防工事	5
		富士山大沢崩れ―その対策と可能性（英語）	4
	琵琶湖	富士山の土石流―土砂の利用―（英語）	5
		富士山の土石流―その観測―（英語）	5
		富士山の砂防―新技術の開発―（英語）	5
		富士山の砂防～歴史と現在（英語）	4
		富士山での火山活動と災害（英語）	5
		砂防百年の歩み―瀬田川の砂防事業―<日本語・英語>	各15
		山に緑がよみがえる～田上山の砂防～・一般編	15
		山に緑がよみがえる～田上山の砂防～・短縮版	5
	神奈川県	安全な都市空間を目指して―急傾斜地崩壊危険区域指定への道しるべ―	10
		急がれる神奈川のがけ崩れ対策事業	10



年度	企画	表 題	分
2002 平成14	関東地整	関東ブロック花博レポート	17
		Youちゃんの魚沼うおッチング 魚沼の自然と砂防	13
	湯沢砂防	Youちゃん 魚沼ウォッチング（短縮版）	2
		第2回魚沼自然塾	3
		砂防えん堤のはたらき	5
		魚がのぼる川づくり	3
	松本砂防	上高地の砂防	2
		小学生インタープリント2002	3
	立山砂防	大崩壊地とたたかう＜日本語・英語＞	各12
		平成の鳶崩れに備えるーダイジェスト版ー	23
		防災シンポジウム『ザ・避難』	3
	金沢河川	百万貫の岩は語る（完バケ）	14
	神通川水系	焼岳火山防災マップは問いかけるー地域の安心を支えるためにー	13
	多治見	ビデオが捉えた土石流 改訂版＜日本語・英語＞	各7
		滑川の土石流（短縮版）	1
	太田川	1999.6.29 災害を忘れるな！～土砂災害と砂防事業に関する映像作品集	8
	雲仙	雲仙・普賢岳子供塾	3
		大野木場メモリアルデー	3
	長野県	地附山 地すべり対策CG	2
	神通川水系	「焼岳火山砂防～自然と暮らしを守る～」	21
	新庄	肘折火山セミナー：肘折火山を知る	2
	湯沢砂防	新粗石コンクリート工法	5
		花まつりゆざわ	2
		平成15年度第一回魚沼自然塾	4
		山菜談義（第一回魚沼自然塾）	3
		三国街道歴史談義（第一回魚沼自然塾）	3
		登川上流第2号えん堤 現場報告	5
		平成15年度第2回魚沼自然塾	5
		平成15年度 第3回魚沼自然塾	5
		大源太川第一号砂防堰堤	5
	立山砂防	キャンプ砂防立山2003	22
		平成の鳶崩れ	6
2003 平成15	金沢河川	白山砂防女性特派員	3
		来さっしゅれ 白山砂防科学館	3
	神通川水系	HP配信映像	5
		焼岳火山防災マップは問いかける（短縮版）	2
	大隅	桜島の噴火	2
		土石流ってなんだ	1
		土石流への挑戦	2
		緑の山にするために	2
		火山とともに	2
		桜島国際火山砂防センター	2
		防災こども調査隊	4
	長野県	地附山の災害 復興の記録＜日本語・英語＞	各10
	三重県	命を守る～土石流への備え～	12
		命を守る 土石流への備え（短縮版）	4
	山口県	こまった土石流	14
		地域に生きる砂防	17
	地すべりがけ崩れ 対策協議会	「土砂災害防止法」とは	14
	利根川水系	火山災害に備えて【3D】	9

年度	企画	表 題	分
2004 平成16	利根川水系	火山災害に備えて	9
		平成15年度 第4回魚沼自然塾	5
	湯沢砂防	雪国案校応援隊報告	5
		湯沢砂防 女性モニター	4
		平成16年度 第1回魚沼自然塾	5
		平成16年度 第2回魚沼自然塾	5
		平成16年度 第3回魚沼自然塾	5
		湯沢砂防無人化施工ー佐梨川の溪岸崩壊と対応ー	6
		新潟県中越地震と土砂災害	4
		寺野地区の応急対策	5
		東竹沢地区の応急対策	5
		湯沢砂防の初動対応と土砂災害緊急支援チーム	3
		芋川河動閉塞対策検討委員会	4
		土砂災害緊急支援チーム 本部長インタビュー	2
		芋川の天然ダムー緊急ハード対策ー	2
		芋川の天然ダムー緊急ソフト対策ー	2
		芋川流域寺野地区 緊急対策工事20041113	2
		第1回芋川河道閉塞対策検討委員会	3
		芋川流域東竹沢地区 緊急対策工事20041123	2
		芋川流域寺野地区 緊急対策工事20041125	2
		第2回芋川河道閉塞対策検討委員会	3
		芋川流域5箇所 of 河道閉塞 20041123	3
		芋川流域寺野地区 緊急対策工事20041202	2
		芋川流域東竹沢地区 緊急対策工事20041202ー04	2
		山古志村 東竹沢地区 工事現場公開	3
		芋川流域5箇所 of 河道閉塞 20041218	3
		芋川河道閉塞対策検討委員会 東竹沢視察	2
		竜光地区住民を対象とした東竹沢現場視察	3
		第3回芋川河道閉塞対策検討委員会	3
		第4回芋川河道閉塞対策検討委員会	3
		芋川流域と直轄砂防のはじまり	4
		写真で見る芋川流域2箇所の河道閉塞部の変化	3
		芋川流域5箇所の河道閉塞 20050315	3
	立山砂防	立山カルデラ緑の復元	1
		立山の崩れと生きるフォーラム	122
		立山の崩れと生きるフォーラムー人物伝ー	12
	越美山系	宮 of 谷第1砂防えん堤	4
	富士砂防	富士山火山防災マップの見方	11
		富士山 of 水	11
		富士山と出会う	10
	琵琶湖	瀬田川の砂防技術ー水系砂防ー＜日本語・英語＞	各7
		瀬田川の砂防技術ー田上・信楽の砂防事業ー＜日本語・英語＞	各9
		瀬田川の砂防技術ー田上・信楽の山腹エー＜日本語・英語＞	各9
		瀬田川の砂防技術ー田上・信楽の保育エー＜日本語・英語＞	各7
	雲仙	雲仙・普賢岳 大野木場砂防みらい館	3
	宮崎河川	大幡第5砂防えん堤	4
	大隅	20010906桜島の土石流	4
		大隅地方 of くらしを守る	2
		桜島で観測された土石流	7
		桜島火山砂防15周年記念シンポジウム	3
		幸田文 文学碑除幕	3
		2004' 吹上浜砂 of 祭典 吹上浜さばうランド	5
		いのちとくらしを守る～がけ崩れ対策工事～	10
	広島県	いのちとくらしを守る～がけ崩れ対策工事～	3
		地域に生きる砂防1「山口県 of 土砂災害とその原因」	6
	山口県	地域に生きる砂防2「山口県 of 砂防対策」	5
		地域に生きる砂防3「山口県 of 環境砂防」	1
	治水砂防協会	土砂動態	27
	四国山地	土石流と砂防えん堤【3D】	5
	天竜川上流	砂防えん堤 of はたらき【3D】	6
	多治見	土砂 of 移動と人々の暮らし【3D】	7

年度	企画	表 題	分
2005 平成17	国交省監修	台風14号による災害	5
	新庄	最上川資料館 リニューアルオープン	4
	利根川水系	火山を学ぶ ―浅間山山麓、3D簡易シアターによる上映会―	3
	湯沢砂防	平成16年 日本列島を襲った土砂災害	8
		登川上流第2号えん堤 現場報告2004	6
		平成16年度 第4回魚沼自然塾	6
		湯沢砂防女性モニター 2004	5
		平成17年度第1回魚沼自然塾	5
		平成17年度第2回魚沼自然塾	5
		SABOバスペインティング	4
		平成17年度第3回魚沼自然塾	5
		雪国楽校応援隊 平成17年度活動報告	3
		平成17年度 第4回魚沼自然塾	5
		平成17年度湯沢砂防女性モニター	5
		芋川河道閉塞対策応援者意見交換会	5
		芋川砂防事業9―10月上旬	5
	金沢河川	甚之助谷の地すべり対策	2
	立山砂防	岩盤崩壊を防ぐ―白岩砂防堰堤右岸の保全対策―	25
	多治見	万博映像「土砂移動と人々の暮らし」	6
		木曽川水系 滑川で発生した土石流①（2004.8.18発生）	2
		木曽川水系 滑川で発生した土石流②（2004.8.18発生）	3
		築け！ふるさと憩いの森	2
	越美山系	登川上流第2号えん堤 現場報告2004	5
	宮崎河川	宮崎河川国道事務所の霧島検討会	3
	大隅	砂防教室	3
		大隅河川国道事務所 新たな挑戦	2
桜島火山噴火避難訓練 No.1		4	
桜島火山噴火避難訓練 No.2		3	
桜島のあすを考える会		3	
2005 吹上浜砂の祭典		5	
2006 平成18	飯豊山系	スリット化する際の留意点	5
		スリット化工事の概要	5
		スリット化された砂防えん堤	5
	旭川開建	十勝岳火山砂防情報センター	4
		十勝岳の恵みと火山災害について学ぶ	5
	湯沢砂防	平成17年度芋川砂防事業1―中越地震による被害とその対策工事	10
		平成17年度芋川砂防事業2―芋川流域の復興を目指して～芋川本川の対策工事	10
		平成17年度芋川砂防事業3―芋川流域の復興を目指して～芋川支川の対策工事	10
	天竜川上流	ぼくらの大鹿村【3D】	11
	越美山系	揖斐川町東横山地すべり	
	雲仙	雲仙普賢岳資料館	3
	大隅	桜島の火山砂防を学ぼう―砂防教室―	5
	立山砂防	崩れ―大地のいとなみと私たち―【3D】	17
	静岡河川	大谷崩と安倍川【3D】	11
2007 平成19	多治見	土砂の移動と人々の暮らし【3D】	7
	四国山地	山が崩れる【3D】	7
	静岡河川	大谷崩と安倍川【3D】	11
	自主企画	大谷崩と生きる「CGフライトシミュレーション―安倍川コース」	5
		大谷崩と生きる「CGフライトシミュレーション―山川河内川コース」	5
2008 平成20	越美山系	みっちゃん砂防教室【3D】	10
自主企画	避難していて良かった―犠牲者ゼロをめざして―	9	
2009 平成21	自主企画	がけ崩れを知ろう！【3D】	6
治水砂防協会	土砂動態（改訂版）	33	
2010 平成22	太田川	広島県の土砂災害から身を守る【3D】	11
		まもるくんとMr.エンテの「調べてみよう！私たちの広島と土砂災害」【3D】	11
	四国山地	山が崩れる【3D】	7
2011 平成23	自主企画	地すべり地の歴史を訪ねて【3D】	20
私たちのいの町		7	
2012 平成24	湯沢砂防	新潟県中越地震 大地と人のドキュメント【3D】	23

5. 企画・制作に関わった砂防資料館・砂防フィールドミュージアム

砂防関係の資料館は、砂防事務所が運営するもの、市町村や第三セクターなどが運営するものなどがあるが、事務所が運営する資料館は、いわゆる「ハコモノ批判」の風潮の中で、現在は閉館や休館を余儀なくされているところ（または検討しているところ）もある。表では、現在も活動している砂防関係の資料館のうち、砂防広報センターが企画・展示物制作等で関わった資料館を取り上げた（企画・展示物制作は展示改修も含む）。



■砂防資料館

No.	名 称	所在地	砂防に関わる展示テーマ
1	十勝岳火山砂防情報センター	北海道 美瑛町	十勝岳の火山活動と防災
2	砂防資料館	山形県 庄内町	立谷沢川の砂防
3	豊牧地すべり資料館	山形県 大蔵村	豊牧地区の地すべり対策
4	最上川資料館（旧・黒淵地すべり資料館）	山形県 戸沢村	黒淵地区の地すべり対策
5	譲原地すべり資料館カッビー	群馬県 藤岡市	譲原地区の地すべり対策
6	S A B Oインフォメーションセンター	栃木県 日光市	日光の砂防
7	地すべり資料館	新潟県 上越市	上越地方の地すべりとその対策
8	西湖いやしの里根場 砂防資料館	山梨県 富士河口湖町	昭和41年足和田土石流災害
9	立山カルデラ砂防博物館	富山県 立山町	立山カルデラと常願寺川の砂防
10	白山砂防科学館	石川県 白山市	手取川流域の砂防
11	大鹿村中央構造線博物館	長野県 大鹿村	三六災害と大鹿村の砂防
12	砂防情報センター（森と水のアウトドア体験広場内）	長野県 宮田村	太田切川の砂防
13	砂防学習館（アルプス公園無線中継所内）	長野県 松本市	梓川上流と松本市周辺の砂防
14	奥飛騨さばう塾	岐阜県 高山市	奥飛騨の土砂災害と砂防
15	さばう遊学館	岐阜県 海津市	羽根谷の砂防の歴史
16	フジヤマビューギャラリー（道の駅富士川楽座内）	静岡県 富士川町	富士山の火山砂防
17	亀の瀬地すべり資料室	大阪府 柏原市	亀の瀬地区の地すべり対策
18	重信川砂防資料館	愛媛県 東温市	重信川の砂防
19	大野木場砂防監視所（愛称：大野木場砂防みらい館）	長崎県 南塩原市	雲仙普賢岳の噴火災害と火山砂防
20	桜島国際火山砂防センター	鹿児島県 鹿児島市	桜島の火山砂防

■砂防フィールドミュージアム

No.	名 称	所在地	主な見学箇所
1	芋川砂防フィールドミュージアム（整備中）	新潟県 長岡市	芋川流域の、新潟県中越地震の災害遺構・対策施設
2	駒ヶ根砂防フィールドミュージアム	長野県 駒ヶ根市・宮田村	太田切川の土石流堆積物（巨石など）・砂防施設

6. 「土砂災害防止推進の集い(全国大会)」の記録(1995年度以降)

「土砂災害防止推進の集い(全国大会)」は、土砂災害防止月間が創設された1983(昭和58)年に第1回大会が長崎市で開催され、以来毎年6月に開催されてきた。2010年(平成22)からは会の名称が「土砂災害防止全国の集い」と改められた。

初期の全国大会は、土砂災害防止功労者表彰を含む式典と記念講演(1日目)、現地視察(2日目)で構成されていたが、砂防広報センターが企画・運営に携わった第13回大会から、1日目に式典のほかシンポジウムまたはパネルディスカッション等のイベントが行われるようになり、以後その形式が定着している(下表は、シンポジウム・パネルディスカッション等のプログラム)。



注：出席者の肩書は開催当時のもの

回	年度	開催地・主会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
13	1995 平成7	大分県別府市 別府ビーコンプラザ	▶記念演奏　大分県警察音楽隊 ▶パネルディスカッション「都市と防災―自然災害と危機管理施策のありかた」 平松大分県知事／伊藤　滋(慶應義塾大学大学院教授)／石川幹子(千葉大学講師)／吉村秀實(コーディネーター・NHK解説主幹)
14	1996 平成8	兵庫県神戸市 神戸国際会館	▶「二次災害防止のためのセミナー」 中野泰雄(六甲砂防工事事務所長)／田野育利(神戸市消防局警防部長)／渡辺行雄(兵庫県土木部砂防課長)／吉村秀實(コーディネーター・NHK解説主幹) ▶神戸市灘区鶴甲地区における「二次災害防災訓練」(セミナーと同時並行)
15	1997 平成9	大阪府吹田市 万国博記念ホール	▶特別講演「阪神・淡路大震災からの復興について」　溜水兵庫県副知事 ▶砂防ボランティア全国連絡協議会発足式 ▶シンポジウム「砂防ボランティア　民間ボランティア　活動のあり方」 重川希志依(都市防災研究所)／宮澤清治(気象学者)／巡　静一(大阪ボランティア協会)／田畑茂清(建設省河川局砂防部長)
16	1998 平成10	新潟県糸魚川市	▶特別講演「土石流を知ろう」　水山高久(京都大学農学研究科教授) ▶パネルディスカッション「砂防工事の安全対策を考える」 田畑茂清(建設省河川局砂防部長)／高石清賢(四国　嶺北建設業協同組合現　場代理人)／高田隆一(神通川筋新穂高温泉上流左保　美笠建設(株)現場代理人)／浮須修栄(阿賀野川工事事務所工務第二課長)／大野さん(香川県土木部河川砂防課)
17	1999 平成11	富山県富山市 富山県民会館	▶シンポジウム「ーいつ何が起こるかわからんちゃー山くずれ、土砂くずれ、家くずれ」 今井通子(医師・登山家・建設省河川審議会専門委員)／寺本和子(豊橋市助役・土木技術者女性の会初代会長)／吉友嘉久子(OFFICE　よしとも代表) ▶雲仙普賢岳、火砕流被害者の取材ビデオ
18	2000 平成12	栃木県宇都宮市 栃木県総合文化センター	▶特別講演「日光の社寺・世界文化遺産登録について」　稲葉久雄(東照宮宮司) ▶シンポジウム「いのちを守る緑・いのちを育む緑」 森　駿勇(建設省砂防部長)／渡辺文雄(俳優)／鈴木勇二(宇都宮大学副学長　農学部教授)／青木奈緒(エッセイスト)／吉村秀實(コーディネーター・NHK解説主幹)
19	2001 平成13	鳥取県倉吉市 県立倉吉未来中心	▶特別講演「環日本海諸国への緑化技術移転―中国砂漠で考えさせられたこと―」 奥村武信(鳥取大学教授) ▶トークショー「備えあれば憂いなし―21世紀の砂防と危機管理」 吉村秀実(防災評論家・前NHK解説委員)／三島和子(㈱住友海上リスク総合研究所)／片山善博(鳥取県知事)
20	2002 平成14	岐阜県岐阜市 長良川国際会議場	▶参加型シンポジウム「知らせる努力　知る努力―土砂災害とIT防災」 松村みち子(まちづくりコンサルタント)／下山紀夫(長野地方気象台長)／岡本正男(国土交通省砂防部長)／山崎　登(コーディネーター・NHK解説委員)
21	2003 平成15	静岡県静岡市 グランシップ	▶特別講演「戦国武將の治山治水と静岡の自然災害」　小和田哲男(静岡大学教授) ▶シンポジウム「くらしのなかの土砂災害防止」 原田照美(広島市安佐南区沼田町伴地区　自主防災会連合会副会長)／山本　迪(NPO法人福井県砂防ボランティア協会理事)／宮澤清治(気象学者、元気象庁天気相談所長)／小嶋善吉(静岡市長)／岡本正男(国土交通省砂防部長)／吉村秀實(コーディネーター・NHK解説主幹)

回	年度	開催地・主会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
22	2004 平成16	愛媛県松山市 県民文化会館	▶シンポジウム「しまなみ・まちなみ・つながり活かす身近な防災」 立木さとみ(㈱立木写真館常務取締役)／藤井裕一郎(㈱松山青年会議所副理事長)／三島和子(㈱インターリスク総研主任研究員)／若松進一(愛媛県双海町教育長)／近藤浩一(コメンテーター・国土交通省河川局砂防部長)／山崎登(コーディネーター、NHK解説委員) ▶研究発表　双海町立下灘小学校6年生 ▶アトラクション　ミュージカル劇団「みかん一座」
23	2005 平成17	鹿児島県鹿児島市 鹿児島県文化センタ―	▶シンポジウム「土砂災害　みんなの力で早めの避難」 古川　守(出水市針原地区公民館長)／山中ミチ子(メセナ福祉ネット推進員チーフ)／前田一郎(ウェザーキャスター MBC)／下川悦郎(鹿児島大学農学部長)／高山大作(鹿児島県総括危機管理監)／近藤浩一(コメンテーター・国土交通省砂防部長)／山崎登(コーディネーター・NHK解説委員)
24	2006 平成18	秋田県秋田市 秋田県民会館	▶特別講演「お年寄り　早めの呼びかけ　一緒に避難」　林　慎太郎(秋田大学教授) ▶パネルディスカッション 林　信太郎(秋田大学教育文化部教授)／近藤千年(愛媛県新居浜市前自治会長)／杉江宗祐(秋田県鹿角市長)／大友ます子(由利本庄市町内会副会長)／亀江幸二(コメンテーター・国土交通省)／山崎　登(コーディネーター・NHK解説委員)
25	2007 平成19	石川県金沢市 ※「砂防フォーラムいしかわ」との 共同開催	▶映像「砂防フォーラムいしかわ」活動報告 ▶創作劇「守ろう！　美しいふるさと」　県立中島高校演劇コース生徒 ▶フリートーク「備えよう。明日はわが地域　土砂災害」 川村國夫(金沢工業大学教授)／山岸尚子(白山砂防女性特派員)／亀江幸二(コメンテーター・国土交通省砂防部長)／山崎　登(コーディネーター、NHK解説委員)
26	2008 平成20	長野県松本市 松本文化会館	▶インタビュー「砂防の歴史と事例に学ぶ」 古林徳文(小川村、薬師沢砂防惣代)／加藤輝和(牛伏鉢伏友の会代表) ▶シンポジウム「砂防の歴史と今、そして明日(これから)」 斉藤千恵子(塩尻市奈良井女性消防隊長)／藤澤繁雄(NPO梓川流域を守る会理事長)／北澤秋司(信州大学名誉教授)／林新一郎(前岡谷市長)／亀江幸二(コメンテーター・国土交通省砂防部長)／山崎　登(コーディネーター・NHK解説委員)
27	2009 平成21	山梨県甲府市 県立県民文化ホール	▶特別講演「富士川流域の砂防」　室伏　徹(甲府市教育委員会) ▶シンポジウム「風林火山の防災」 岡部政幸(丹波山村村長)／渡辺秀樹(根場民宿協同組合理事長)／斉藤節子(南アルプス市社会福祉協議会総務課長)／後藤聡(山梨大学准教授)／中野泰雄(コメンテーター・国土交通省砂防部長)／山崎　登(コーディネーター・NHK解説副委員長) ▶寸劇「震度5その時」　南アルプス市若菜地区災害防災ボランティア
28	2010 平成22	広島県広島市 広島市文化交流会館	＊この年から会の名称が「土砂災害防止　全国の集い」となる ＊会場ホワイエで都道府県砂防関連部局によるポスターセッション開催 ▶シンポジウム「三矢の訓で防ぐ土砂災害」 海堀正博(広島大学准教授)／原田照美(広島市自主防災会連合会会長)／佐々木清藏(前安芸太田町長)／牧野裕至(コメンテーター・国土交通省砂防部長)／山崎　登(コーディネーター・NHK解説委員)／広島市立伴小学校児童
29	2011 平成23	(宮城県栗原市での開催が予定されていたが、東日本大震災の発生により中止となった。)	
30	2012 平成24	長崎県長崎市 長崎市公会堂	▶特別講演「自然災害に備える―居安思危(こあんしぎ)」　片田敏孝(群馬大学教授) ▶パネルディスカッション「30年目の“みんなで防ごう土砂災害”」 1) 7.23長崎豪雨災害 レビュー 武本家彦(長崎県豪雨災害体験者・長崎市高城台自治会長)／高橋和雄(長崎大学名誉教授)／南　哲行(コメンテーター・国土交通省砂防部長) 2) ディスカッション 武本家彦(長崎県豪雨災害体験者・長崎市高城台自治会長)／原田優子(主婦、諫早市在住)／瓜生宣憲(NPO法人長崎県治水砂防ボランティア協会理事長)／青木賢三(長崎市防災危機管理監)／松永　守(長崎県砂防課長)／高橋和雄(コメンテーター・長崎大学名誉教授)／南　哲行(コメンテーター・国土交通省砂防部長)／松本浩司(総合司会・NHK解説委員)
31	2013 平成25	島根県松江市 島根県民会館	▶基調講演「土砂災害に対する地域の防災力の育成」　瀧本浩一(山口大学准教授) ▶パネルディスカッション 1) 「昭和58年山陰豪雨災害などの課題・教訓」 清水美恵(災害体験者)／竹内恵南(災害体験者)／松本健志(三隅町職員)／横田修一郎(コメンテーター・島根大学名誉教授)／松本浩司(コーディネーター・NHK解説委員) 2) 土砂災害防止啓発紙芝居　佐藤るみ子／島根県砂防ボランティア協会 3) 「昭和58年山陰豪雨災害後の取組と今後の土砂災害減災に向けて」 永瀬　晃(自主防災組織「多根の郷」会長)／浜崎正英(島根県砂防ボランティア協会会長)／横田修一郎(島根大学名誉教授)／大野宏之(コメンテーター・国土交通省砂防部長)
32	2014 平成26	熊本県熊本市 市民会館崇城大学ホール	▶基調講演「国土強靱化と国土保全」　藤井　聡(京都大学教授・内閣官房参与) ▶パネルディスカッション「土砂災害の激甚化に備える」 竹内裕希子(熊本大学准教授)／作田潤一(南阿蘇村立久木野中学校長)／西川　裕(津奈木町長)／川辺尚也(五木村保健福祉課長)／北園芳人(コメンテーター・熊本大学特任教授)／大野宏之(コメンテーター・国土交通省砂防部長)／松本浩司(コーディネーター・NHK解説委員)

7. 「火山砂防フォーラム」の記録

1991（平成3）年の雲仙普賢岳噴火災害を契機に、活火山周辺の自治体が委員会を結成し、火山砂防事業をはじめとする火山噴火対策について、年1回（毎年10月）情報や意見の交換を行うフォーラムを開催することとなった。砂防広報センターは第1回からこのフォーラム事務局を務め、企画運営等を行っている。



注：出席者の肩書は開催当時

回	年度	開催地・主要会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
1	1991 平成3	群馬県草津町	▶特別講演「火山活動とその予知について」 荒牧重雄（北海道大学教授） ▶基調講演「火山災害と砂防」 松林正義（全国治水砂防協会常務理事） ▶パネルディスカッション 永田 功（島原振興局専門官）／清水長治（大島町長）／赤崎義則（鹿児島市長）／水上 博（美瑛町長）／森田啓次郎（姶良村長）／高橋哲雄（建設省砂防課長）／荒牧重雄（北海道大学教授）／松林正義（全国治水砂防協会常務理事） コーディネーター：伊藤和明（NHK解説委員）
2	1992 平成4	鹿児島県鹿児島市 鹿児島市民文化ホール	▶特別講演「火山とともに生きる」 今給黎教子 ▶基調講演「火山の招待を見据え、火山と共存する」 加茂幸彦（京都大学防災研究所桜島観測所長） ▶パネルディスカッション 竹ノ下光（桜島町長）／坂根庸子（歌人）／西みやび（シティ情報誌「LEAP」編集長）／高橋哲夫（建設省砂防課長）・／加茂幸彦（京都大学防災研究所桜島観測所長） コーディネーター：伊藤和明（NHK解説委員）
3	1993 平成5	北海道美瑛町 国立大雪青年の家	▶基調講演 勝井義男（北海道大学名誉教授） ▶特別対談 佐川亀蔵（上富良野町農家）／伊藤和明（NHK解説委員） ▶パネルディスカッション 新谷 融（北海道大学教授）／菅野 学（上富良野町長）／西海正博（白金温泉観光組合長）／齊藤久美（ペンション経営）／池谷 浩（建設省火山・土石流対策官） コーディネーター：伊藤和明（NHK解説委員）
4	1994 平成6	長崎県島原市 島原文化会館	▶記念講演「雲仙普賢岳の噴火活動」 太田一也（九州大学助教授） ▶雲仙の復興工事報告 松井宗広（建設省雲仙復興工事事務所所長）／小橋行雄（長崎県雲仙岳災害復興担当理事） ▶パネルディスカッション 芝田扶美子（陶芸家）／槌田禎子（テレビ長崎記者）／村中勝美（島原観光協会会長）／吉岡勝二郎（島原市長）／森 俊勇（建設省火山・土石流対策官） コーディネーター：伊藤和明（NHK解説委員）
5	1995 平成7	長野県安曇村 乗鞍観光センター	▶特別講演 南美希子（TVキャスター） ▶話題提供 「焼岳の火山活動について」 三宅康幸（信州大学助教授） 「焼岳における土石流について」 奥西一夫（京都大学防災研究所教授） ▶パネルディスカッション 有馬佳明（安曇村長）／小池 強（上宝村長）／藤沢恵子（ホテル経営）／シルビー・ジャコ（ライター） コメンテーター：渡辺 浩（環境庁） コーディネーター：伊藤和明（NHK解説委員）

回	年度	開催地・主要会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
6	1996 平成8	山形県上山市 上山市体育文化センター	▶公開セミナー「火山ってどんな山」 司会：出題：相川 浩（NHKアナウンサー） 特別出演：永田亀昭（上山市長） 講師：林信太郎（秋田大学助教授）／津村建四朗（山形大教授）／森俊勇（建設省火山・土石流対策官） 生徒：上山市在住の児童とその家族 ▶パネルディスカッション 岡田 弘（北海道大学助教授）／川井貞一（白石市長）／水上 博（美瑛町長）／尾形なつ（販売業）／齊藤育子（旅館企画部長） コメンテーター：津村建四朗（山形大学教授）／森 俊勇（建設省対策官） コーディネーター：伊藤和明（NHK解説委員） アシスタント：さこみちよ（タレント）
7	1997 平成9	神奈川県箱根町 湯元富士屋ホテル	▶公開砂防セミナー「ぼくらの山は天下の嶮」 町内5小学校の児童による学習発表 司会：相川 浩（NHKアナウンサー） アシスタント：伊東直美（大学生） 解説者：中村三郎（防衛大名誉教授）／松井宗弘（国土交通省対策官）／長瀬和夫（神奈川県温泉地学研究所長）／橘田 敏（小田原土木事務所長）
8	1998 平成10	北海道七飯町 函館大沼プリンスホテル	▶特別講演 「もし、昭和新山火祭りに噴火があれば」（菅原壮賢町長） ▶ワークショップ 話題 ① 北海道駒ヶ岳を知る ② 火山の恐ろしさを知る ③ 火山防災について ④ 駒ヶ岳に託す夢 司会：伊藤和明（NHK解説委員） アシスタント：さこみちよ
9	1999 平成11	フィリピン・アンヘレス市	▶基調講演 1.「観測体制と警戒・避難」 ブノンバヤン（科学技術省次官） 2.「火山と人の共存」 伊藤和明（文教大教授） ▶事例報告・質疑1. 「緊急、復旧対策事業」 ボノアン次官 「ピナツボ火山噴火時の避難と誘導」 アンヘレナ市長 「日本における警戒避難体制」 壮賢町長 ▶事例報告・質疑2. 「ラハール対策と生活債券」 サンフェルナンド市長 「火砕流・土石流対策」 島原市長 「継続する火山災害と地域振興」 レガスビ市長
10	2000 平成12	長崎県島原市 島原市復興アリーナ	▶第1部「21世紀を控えた日本・世界の火山から」 進行：伊藤和明（文教大学教授） 「雲仙普賢岳火山活動の現状」 清水 洋（九州大学理学部教授） 「雲仙普賢岳火山砂防事業の歩み」 古賀省三（雲仙復興工事事務所長） ▶第2部「島原・深江からのメッセージ」 長崎良夫（虻田町長）／横田幸信（深江町長）／長谷川鴻（三宅村長） コメンテーター：太田一也（全九州大学地震火山観測センター長）／岡田 弘（北海道大学教授）／森 俊勇（建設省砂防部長）
11	2001 平成13	東京都庁 東京都大島町 三宅島近海	▶基調講演「火山との共生～噴火までと噴火以降」 岡田 弘（北海道大学教授） ▶パネルディスカッション「三宅島 of 全島避難から学ぶこと」 野村忠司（三宅村助役）／中田節也（東京大学地震研究所教授）／広井 脩（東京大学社会情報研究所所長）／干川剛史（大妻女子大学助教授）／大久保駿（伊豆諸島土砂対策検討委員会委員長） コーディネーター：伊藤和明（NPO防災情報機構専門委員）
12	2002 平成14	北海道虻田町 洞爺湖文化センター	▶フォーラム1 山中 漢（壮賢町長）／岡田 弘（北海道大学教授）／菊谷秀吉（伊達市長）／杉浦信男（国土交通省対策官）／長崎良夫（虻田町長）／新谷 徹（北海道大学教授） ▶フォーラム2 宇井忠英（北海道大学教授）／三松三朗（三松正夫記念館館長）／田邊敏也（レイクピア事務局）／吉井厚志（室蘭開建次長）／西山泰正（北海道災害復興対策室長） コーディネーター：伊藤和明（NPO防災情報機構専門委員）
13	2003 平成15	岐阜県上宝村 上宝村観光協会	▶研究発表 司会：山崎 登（NHK解説委員） ゲスト：三宅康幸（信州大学助教授）／青木佳代（フリーアナウンサー） 発表：地元小学生 ▶座談会 宇井忠英（北海道大学教授）／水山高久（京都大学教授）／三宅康幸（信州大学教授）／田村圭司（神通砂防事務所所長）／小池 強（上宝村長）／筒木千歳（安曇村長） 司会：山崎 登（NHK解説委員）

回	年度	開催地・主要会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
14	2004 平成16	岩手県西根村 西根町総合運動公園 体育館	▶事業報告「岩手山周辺の小学生が協力してつくりましたー新しい岩手山の見所マップ」 司会：伊藤美幸（フリーアナウンサー） 解説者：土井宣夫（県総合防災室顧問） ゲスト：工藤勝治（西根町長） ▶座談会「火山地域における連携ーその成果と課題ー」 加藤徳美（岩手大学副学長）／工藤勝治（西根町長）／木村拓郎（火山市民ネットワーク事務局）／關博之（国交省岩手河川国道事務所長）／及川正彦（岩手日報報道部第二部長） 司会：伊藤和明（元NHK解説委員）
15	2005 平成17	静岡県富士宮市 富士宮市民文化会館	▶学習発表「富士山のくらし」 富士宮市立貴船小学校／富士宮市立富士宮第二中学校 司会：伊東和明（NPO法人防災情報機構会長） ▶基調講演「富士山ハザードマップ発表以後の課題」 荒牧重雄（山梨県環境科学研究所長） ▶パネルディスカッション 小室直義（富士宮市長）／萱沼俊夫（富士吉田市長）／小山真人（静岡大学教授）／富田陽子（富士砂防事務所長）／池谷浩（山梨県環境科学研究所客員研究員） コーディネーター：吉村秀實（富士常葉大学環境防災学部教授）
16	2006 平成18	東京都三宅島 阿古小学校体育館	▶経過報告「三宅島火山噴火を振り返る」 中田節也（東京大学地震研究所教授）／平野祐康（三宅村長）／中村晶晴（東京都危機管理監）／高橋興一（東京都河川部長） 聞き手：伊藤和明（NPO防災情報機構会長） ▶研究発表「おいでよ、三宅島」 三宅小6年生／三宅中2年生 司会：高柳幸子（フリーアナウンサー） ▶座談会「火山噴火対策と噴火後の復興について、皆さんと語ろう」 平野祐康（三宅村長）／白井祐輔（NPO洞爺賑わいネットワーク）／大町辰朗（NPO島原普賢会）／宮下加奈（三宅島代表）／篠原勝之
17	2007 平成19	宮崎県都城市 総合文化ホール	▶特別講演「小説『死都日本』を素材に、霧島を考える」 井村隆介（鹿児島大学理学部准教授） ▶事例紹介・研究発表「霧島火山防災マップについて」 司会：伊藤和明（NPO法人防災情報機構理事長） ・VTR 「『霧島火山防災マップ』の制作過程」 ・研究発表「私たちも考えた『霧島火山防災マップ』」 宮崎県立都城農業高等学校農業土木科3年生 ▶座談会「火山防災における地域連帯について」 谷口義信（宮崎大学名誉教授）／藤井敏嗣（東京大学地震研究所教授）／長峯 誠（都城市長）／熊川 栄（姶恋村長）／蒲生芳子（地元住民） コメントーター：亀江幸二（国土交通省砂防部長） 司会：吉村秀實（ジャーナリスト）
18	2008 平成20	新潟県糸魚川市 糸魚川市民会館	▶学習成果発表「見たい、知りたい、焼山学習隊」 糸魚川市立上早川小学校5・6年生 司会：伊藤聡子（フリーキャスター） コメントーター：早津賢二（NPO日本火山学会）／宮島 宏（フォッサマグナミュージアム館長補佐）／奥野 賢（新潟県砂防課長） ▶特別講演1「火山地域が今、考えるべきこと」 藤井敏嗣（火山噴火予知連会長） ▶特別講演2「火山情報をどう活かすか」 伊藤和明（NPO防災情報機構会長） ▶パネルディスカッション 話題提供「噴火警戒レベルと平成20年2月以降の桜島周辺の噴火対応」 北川貞之（気象庁地震火山部 火山対策官）／森 博幸（鹿児島市長）／原 義文（国土交通省砂防部火山・土石流対策官） ディスカッション 浜田 哲（美瑛町長）／藤井静男（大島町長）／森 博幸（鹿児島市長）／米田 徹（糸魚川市長） コメントーター：中野泰雄（国土交通省砂防部長）／藤井敏嗣（火山噴火予知連会長）／北川貞之（気象庁地震火山部火山対策 コーディネーター：山崎 登（NHK解説委員）
19	2009 平成21	鹿児島県鹿児島市 鹿児島市民文化ホー ル	▶研究発表「活火山桜島とわたしたちが支える火山防災」 鹿児島市立東桜島中学校生徒 コメントーター：福島大輔（NPO桜島ミュージアム理事長）／井口正人（京都大学防災研究所火山活動研究センター准教授） 司会：中西真貴（KTS鹿児島テレビアナウンサー） ▶パネルディスカッション「火山地域の振興と火山噴火対策」 森 博幸（鹿児島市長）／水迫順一（垂水市長）／石原和弘（京都大学防災研究所火山活動研究センター教授）／奈良迫英光（鹿児島県観光プロデューサー）／日高和広（南日本新聞社論説委員） コメントーター：牧野裕至（国土交通省砂防部長） コーディネーター：山崎 登（NHK解説副委員長）

回	年度	開催地・主要会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
20	2010 平成22	群馬県姶恋村 姶恋村立西中学校	▶シンポジウム1 コーディネーター：池谷 浩（内閣府火山防災エキスパート） 1)「火山地域における防災訓練の取り組み」 後藤宏二（利根川水系砂防事務所長）／下谷宇一（姶恋村消防団長） 2)「地域との協働による浅間山学習に向けた取り組み」 赤木道紘（姶恋インタープリターの会事務局長）／宮崎真利（大学院生） 3)「ポータルサイト浅間山倶楽部の取り組み」 芹沢 勤（小諸市長） ▶シンポジウム2「火山地域のインバウンドの拡大」 司会進行：保科幸二（砂防広報センター理事長）
21	2011 平成23	北海道美瑛町 美瑛町民センター	▶緊急報告1「霧島山 新燃岳噴火と対応」 日高光浩（宮崎県高原町長） ▶緊急報告2「近年の火山噴火対応事例を踏まえて」 内閣府／国土交通省砂防部／気象庁 ▶パネルディスカッション「魅力あふれる 十勝岳山麓のために」 ・テーマ1「美しい『景観』を活かしたまちづくり」 浜田 哲（美瑛町長）／松井俊治（白金温泉ホテルパークヒルズ総支配人）／小林孝司（社団法人美瑛町観光協会事務員）／村上 亮（北海道大学大学院理学研究科教授） コーディネーター：西山徳明（北大観光学高等研究センター教授） ・テーマ2「魅力あふれるまちづくりのための“火山噴火対策”」 向山富夫（上富良野町長）／松本 敦（上富良野町立上富良野西小学校長）／村上 亮（北海道大学大学院理学研究科教授）／矢野明夫（上川総合振興局副局長）／鎌田照章（旭川開発建設部長） アドバイザー：南 哲行（国土交通省砂防部長） コーディネーター：丸谷知己（北海道大学大学院農学研究科教授）
22	2012 平成24	秋田県仙北市	▶研究発表「ふるさとの山、私たちの秋田駒ヶ岳」 仙北市立生保内小学校5年生 進行：綿引かほる（フリーアナウンサー） 解説：林信太郎（秋田大学教授） ▶パネルディスカッション「これからの秋田駒ヶ岳の火山噴火対策」 門脇光浩（仙北市長）／伊東昭光（生保内小学校教諭）／田口久義（NPO法人田沢湖ふれあい協議会理事長）／杉原正弘（島原市副市長）／大場 司（秋田大学准教授） コメントーター：南 哲行（国土交通省砂防部長）／山里 平（気象庁火山課長） コーディネーター：村上昌人（秋田魁新報社論説副委員長）
23	2013 平成25	福島県北塩原村	▶緊急報告「台風26号による伊豆大島土砂災害について」 伊藤和明（NPO法人防災情報機構会長）／大野宏之（国土交通省砂防部長） ▶研究発表「火山噴火に目を向けてもらうために」 猪苗代町吾妻中学校1年生／北塩原村立裏磐梯中学校3年生／磐梯山山麓住民 解説：長橋良隆（福島大学教授） 司会：山地美紗子（ラジオ福島パーソナリティ） ▶パネルディスカッション「地域一体で火山噴火に備えるために」 酒井美代子（裏磐梯エコツーリズム協会理事）／佐藤 公（磐梯山噴火記念館副館長）／八巻 誠一（福島県砂防ボランティア協会理事）／中村洋一（宇都宮大学教授）／小椋敏一（北塩原村長） コメントーター：大野宏之／山里 平 コーディネーター：鈴木 久（福島民報社論説委員長）

8. 「地すべりフォーラム」の記録

地すべりフォーラムは、1995（平成7）年に第1回が開催され、地すべり地を抱える自治体の持ち回りで、2006年まで行われた。

注：出席者の肩書は開催当時

回	年度	開催地・主会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
1	1995 平成7	群馬県藤岡市 みかばみらい館	▶テーマ「地すべりとの共存」 ▶特別講演「阪神大震災に学ぶ」 伊藤和明（NHK解説委員） ▶特別講義「地すべりとは」 中村浩之（東京農工大学教授） ▶話題提供と討論「地すべりとまちづくり」 塚田 佐（長野県長野市長）／家高卓郎（長野県王滝村長）／清水郷治（新潟県板倉町長）／ 関口茂樹（群馬県鬼石町長） 討論：櫻井美代子／櫻井幸子／反町雄二／中村三郎 進行：伊藤和明（NHK解説委員）／さこみちよ（タレント）
2	1997 平成9	山形県新庄市 新庄市文化会館	▶テーマ「地すべりとまちづくり」 ▶基調講演「地すべりと地塊の移り変わり」 中村三郎（防衛大学名誉教授） ▶文化講演「最上川と芭蕉」 梅津保一（山形史学研究会副会長） ▶ビジョントーク 進藤正明（戸沢村長）／村井健造（大蔵村長）／佐藤利幸（松之山町長）／伊藤仙太郎（能生町長）／関口茂樹（鬼石町長）／安食時子／横山秀穂 コメンテーター：藤田壽雄（地すべり学会長）／加賀一郎（新庄営林署長）／寺田秀樹（新庄工事事務所長） コーディネーター：伊藤和明（NHK解説委員）
3	1999 平成11	高知県大豊町 アルティー 300	▶テーマ「緑とゆとりの地域づくり」 ▶特別講演「坂本龍馬に学ぶ一世紀末における発想の転換」 小椋克己（高知県坂本竜馬記念館館長） ▶基調講演「四国の地すべりと風土」 栃木省三（広島大学名誉教授） ▶シンポジウム 松下真由美（徳島県日和佐土木）／山口博積（西会津町長）／畑山正親（大豊町長）／中岡幸敬（徳島県西祖谷山村長） コメンテーター：牧野裕至（建設省対策官） コーディネーター：藤吉洋一郎（NHK解説委員）
4	2001 平成13	長野県大鹿村 大鹿小学校体育館	▶基調講演「人と栖—構造線とのふれあい」 中村三郎（防衛大学校名誉教授） ▶シンポジウム 北澤秋司（信州大学名誉教授）／青木志郎（東京工業大）／松浦宇多恵（大鹿村教育委員長）／ 宮下寛夫（大鹿村長）／浦 真（天竜川上流工事事務所長） コーディネーター：藤吉洋一郎（NHK解説委員）
5	2003 平成15	石川県白峰村 白峰中学校体育館	▶基調講演「甚之助谷地すべりについて」 川村国夫（金沢工業大学教授） ▶シンポジウム 吉田武男（手取川七ツ用水土地改良区理事長）／川村国夫（金沢工業大学教授）／永井隆一（白峰村長）／佐々恭二（地すべり学会会長） コメンテーター：近藤浩一（砂防部長） コーディネーター：山田美也子（文化キャスター）
6	2006 平成18	静岡県由比町 由比町民センター ※2007年1月開催	▶テーマ「人々が行き交う街『由比』の暮らしを支える防災—由比地すべり対策事業の重要性—」 ▶研究発表「私たちの暮らす由比」 由比小学校4年生 ▶クイズ「由比ってどんなところ？」 土隆一（静岡大学名誉教授）／小和田哲男（静岡大学教授） ▶パネルディスカッション 土屋 智（静岡大学教授）／望月俊明（由比町長）／田中 実（静岡新聞社）／望月ひろみ（由比小学校PTA会長） コメンテーター：亀江幸二（国土交通省砂防部長） コーディネーター：山崎 登（NHK解説委員）

9. 「雪崩防災週間シンポジウム」の記録

1980年代後半、集落が雪崩に襲われ犠牲者を出す災害が続けて発生したのを契機に、雪崩に対するハード対策だけでなく、住民に対する防災啓発や警戒避難体制の整備などソフト対策の充実を求める声が高まり、1989（平成1）年度から12月1日～7日を雪崩防災週間として、さまざまな啓発活動を行うこととなった。その一環として雪崩防災週間シンポジウムが始まり、砂防広報センターが第1回から、その企画運営等に関わってきた。

なお、シンポジウムは当初、雪崩防災週間中に開催されていたが、1997年度から1月または2月の開催となり、2010年度以降は、シンポジウムではなく雪崩災害防止功労者表彰及び雪崩災害防止セミナーが、雪崩防災週間中に開催されている。



注：出席者の肩書は開催当時

回	年度	開催地・主会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
1	1989 平成1	新潟県長岡市 ホテルニューオータニ長岡	★雪崩防災週間設立大会 ▶テーマ「集落を雪崩から守るために」 ▶記念講演1「雪崩対策の現状と課題」 友松靖夫（建設省砂防部長） ▶記念講演2「近年の雪崩災害と気象」 宮沢清治（日本気象協会）
2	1990 平成2	青森県青森市 青森厚生年金会館	▶講演「雨やどり雪やどり」 佐藤元伸（伊奈かつぺい・青森放送副参事） ▶パネルディスカッション「豊かで安全な雪国をめざして」 小川祐示（建設省砂防部傾斜地保全課長）／佐藤幸三郎（青森大学教授）／神 敏雄（岩木町助役）／奈良光義（㈲日本職業スキー教師協会監事）／和田 惇（㈲雪センター理事） コーディネーター：小野玄留馬（東奥日報新聞社編集局次長）
3	1991 平成3	福井県福井市 フェニックスプラザ	▶講演「禅と人づくり」 山田康夫（永平寺副監院） ▶パネルディスカッション「豊かで安全な雪国をめざして」 赤星亮一（今庄町長）／伊藤和明（NHK解説委員）／本多義明（福井大学教授）／宮本数男（福井県山岳連盟会長）／小川祐示（建設省砂防部傾斜地保全課長） コーディネーター：小林 巖（福井新聞社取締役主筆）
4	1992 平成4	長野県長野市 ホテル長野国際会館	▶特別講演「斜面災害の実態」 伊藤和明（文教大学教授・NHK解説委員） ▶パネルディスカッション「雪とふるさとそしてロマン」 高橋賢一（長野県スキー連盟理事）／関 弥平（㈲日本気象協会長野センター技術課長）／井出久實（長野県警山岳救助隊長）／綱木亮介（建設省土木研究所新潟試験所長）／湯本安正（長野県元木島平村長）／西田一孝（建設省河川局傾斜地保全課長） コーディネーター：大野紀夫（信濃毎日新聞社論説委員）
5	1993 平成5	富山県富山市 バレブラン高志会館	▶講演「うるおいの美学」 吉崎四郎（県民生涯学習カレッジ学長） ▶パネルディスカッション 対馬勝年（富山大学教授）／舟田久之（㈲日本気象協会北陸センター富山支部調査役）／藤平正夫氏（㈲日本山岳会会長）／飯田 肇（黒部市主任学芸員）・／宮崎道正（富山県利賀村長）／瀬尾克美（建設省河川局傾斜地保全課長） コーディネーター：河田 稔（北日本新聞論説委員）

回	年度	開催地・主会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
6	1994 平成6	秋田県秋田市 秋田ビューホテル	▶講演「雪はわが心のふるさと」 高橋喜平（沢内村 雪国文化研究所長） ▶パネルディスカッション「豊かで安全な雪国をめざして」 伊藤 驍（国立秋田高専教授）／西山勝暢（秋田地方気象台長）／荘司昭夫（秋田県山岳連盟理事）／杉江宗祐（鹿角市長）／佐藤嘉子（秋田市教育委員長）／保科幸二（建設省河川局傾斜地保全課長） コーディネーター：青崎輝雄（秋田魁新報社編集局総務兼報道本部長）
7	1995 平成7	岐阜県高山市 高山市民文化会館	▶特別講演「雪の調べ」 服部克久（作曲家） ▶パネルディスカッション「やすらぎのある雪国の文化と暮らし」 丸井英明（新潟大学積雪地域災害研究センター助教授）／松井靖典（河合村長）／佐藤佳苗（北飛山岳救助隊員）／保科幸二（建設省河川局傾斜地保全課長） コーディネーター：三輪宏道（岐阜新聞社論説委員長） ▶特別演奏 服部克久アンサンブル（指揮：服部克久）
8	1996 平成8	山形県山形市 山形市中央公民館	▶ワークショップ「やすらぎのある豊かで安全な雪国をめざして」 雪国の育む文化 2. 雪崩の科学 3. 雪国の未来像 秋田谷英次（北海道大学低温科学研究所長）／本間利雄（建築家）／田中裕子（山形女子短期大学講師）／板垣 治（建設省砂防部傾斜地保全課長） コーディネーター：山田美也子 ▶スノーコンサート 服部克久・音楽畑アンサンブル（指揮：服部克久）／山形女声合唱団・タウベンコール
9	1997 平成9	石川県金沢市 金沢市文化ホール	▶鼎談「雪国に生まれ、育って～雪国に期待するもの」 道場六三郎（料理家、山中町出身）／田部井淳子（登山家）／小林忠雄（国立歴史民俗博物館助教授／金沢市出身） ▶ビジョン・トーク「雪を活かしたまちづくり」 車 幸治（白山連峰合衆国大統領・鶴来町長）／新田隆三（信州大学農学部教授／日本雪氷学会雪崩分科会長）／佐々木雅幸（金沢大学教授）／田畑茂清（建設省砂防部長）／金子芳香（樹雪センター研究調査部長） コーディネーター：山田美也子（文化キャスター） ▶スノーコンサート 服部克久・音楽畑アンサンブル（指揮：服部克久）／島田裕子
10	1998 平成10	福島県会津若松市 會津風雅堂	▶「雪国を支える人々」 ▶ビジョン・トーク「「雪国の安全性とは…、そして快適な暮らしとは…」 進行役：伊奈かつべい ▶スノーコンサート 服部克久・音楽畑アンサンブル（指揮：服部克久）他
11	1999 平成11	群馬県水上町 水上町観光会館	▶テーマ「自然の恵みを守り、安全を支える」 ▶ビジョン・トーク 新田隆三（信州大学農学部教授）／山崎俊一（㈱日本自動車研究所主任研究員）／馬場保男（沼田警察署谷川岳警備隊長）／荻原次晴（元ノルディック複合選手）／腰越孝夫（水上町長） コメンテーター：池谷 浩（建設省砂防部長） コーディネーター：山田美也子（文化キャスター）
12	2000 平成12	島根県横田町 横田町コミュニティーセンター	▶テーマ「神話の里（ふるさと）の雪は美しくも激しく」 ▶特別講演 藤岡大拙（島根女子短期大学長） ▶ワークショップ「雪」「38豪雪」「伝統文化の継承」「郷土の夢」 新田隆三（信州大学教授）／福島敦子（キャスター・エッセイスト）／中津恵吉（横田町長） コメンテーター：森 俊雄（国土交通省砂防部長） コーディネーター：山田美也子（文化キャスター）
13	2001 平成13	岩手県湯田町 ゆだ文化創造館	▶テーマ「地域で守る地域の生命（いのち）」 ▶劇上演 いわてぶどう座 ▶パネルディスカッション 高橋喜平（雪国文化研究所長）／高鷹由枝（湯田町民）／佐々木寛（西和賀農協組合長）／細井洋行（湯田町長） コメンテーター：岡本正男（国土交通省砂防部長） コーディネーター：首藤伸夫（日本雪工学会会長）
14	2002平 成14	滋賀県余呉町 はごろもホール	▶テーマ「湖国（ふるさと）の雪・くらしとまちづくり」 ▶講話「郷土の歴史」 ▶パネルディスカッション 伏見碩二（滋賀県立大学教授）／野崎美樹（西浅井町立永原小学校教諭）／湯本佳代子（余呉町社会福祉協議会職員）／余呉町長 コメンテーター：岡本正男（国土交通省砂防部長） コーディネーター：鳥田恵子（びわ湖放送キャスター）

回	年度	開催地・主会場	開催テーマ・主なプログラムと出演者
15	2003 平成15	新潟県新潟市 朱鷺メッセ	▶テーマ「トキ（冬季）のくに、雪ものがたり2004」 ▶特別講演 小林一三（NPO法人新潟県砂防ボランティア協会理事長） ▶パネルディスカッション カール・ベנקス（建築デザイナー）／和泉 薫（新潟大学助教授）／矢野 学（安塚町長）／高橋道夫（新潟地方気象台長） コメンテーター：近藤浩一（国土交通省砂防部長） コーディネーター：小野沢裕子（フリーアナウンサー） ▶篠笛演奏 狩野泰一
16	2004 平成16	北海道小樽市 小樽市民センター	▶基調講演「雪とくらし～自然の恵みと脅威～」 秋田谷英次（北星学園大学教授） ▶パネルディスカッション「北の歴史そして未来～雪との戦いから、共生をめざして」 秋田谷英次（北星学園大学教授）／阿部幹雄（北海道雪崩事故防止研究会会長・ジャーナリスト）／小笠原真結美（㈱オー・プラン代表取締役）／逢坂誠二（ニセコ町長） コメンテーター：近藤浩一氏（国土交通省砂防部長） コーディネーター：大久保真弓（フリーアナウンサー） ▶ダンスシアター 小林英夫
17	2005 平成17	長野県白馬村 ウイング21	▶テーマ「次代へつなげる 新しい雪国づくり」 ▶特別講演 荻原健司（オリンピック金メダリスト） ▶パネルディスカッション 若林隆三（アルプス雪崩研究所長）／荻原健司（オリンピック金メダリスト）／松澤尚美（白馬村住民）／福島信行（白馬村長） コメンテーター：亀江幸二（国土交通省砂防部長） コーディネーター：山田美也子（エッセイスト） ▶ミニコンサートアルプス民族音楽「アルペン・プラスカベレ」 白馬南小学校／白馬北小学校／南小谷小学校児童
18	2006 平成18	兵庫県豊岡市 豊岡市民プラザ	▶テーマ「減災をめざした安全安心な雪国づくり」 ▶基調講演「最近の豪雪における雪崩災害とその対応」 上石 勲（独立行政法人防災科学技術研究所 研究員） ▶パネルディスカッション 和泉 薫（新潟大学教授）／中西禮子（やまめ料理「阿瀬」経営者）／吉谷義奉（植村直己冒険館長）／中貝宗治（豊岡市長） コメンテーター：亀江幸二（国土交通省砂防部長） コーディネーター：森本章夫（神戸新聞社論説委員室顧問） ▶特別講演「コウノトリの野生復帰をめざして」 池田 啓（兵庫県立大学教授）
19	2007 平成19	富山県南砺市 福野文化創造センタ－	▶テーマ「雪に強い、安全で魅力ある地域づくり」 ▶基調講演 川田邦夫（富山大学極東地域研究センター長） ▶パネルディスカッション 飯田 肇（立山カルデラ砂防博物館学芸課長）／尾久彩子（㈱景觀デザインLeaf`s代表取締役）／北 厚子（越中五箇山菅沼集落保存顕彰会事務局長）／溝口 進（南砺市長）／米澤博孝（南砺市観光連盟会長） コメンテーター：亀江幸二（国土交通省河川局砂防部長） コーディネーター：棚田淳一（北日本新聞社編集局次長・報道本部長） ▶アトラクション「利賀の初午、五箇山民謡」
20	2008 平成20	秋田県北秋田市 北秋田市文化会館	▶テーマ「“伝承と創造”中山間地域の防災と雪国のくらし」 ▶特別講演 「山に生かされて」 小松由佳（クライマー） ▶基調講演「秋田の豪雪周期と雪崩災害」 伊藤驍（国立秋田高専名誉教授） ▶パネルディスカッション 伊藤驍（国立秋田高専名誉教授）／菊池まゆみ（藤里町社会福祉協議会事務局長）／松橋光雄（北秋田市阿仁地区獵友会会長）／岸部 陸（北秋田市長） コメンテーター：中野泰雄（国土交通省河川局砂防部長） コーディネーター：佐川博之（秋田魁新報社報道本部長）
21	2009 平成21	栃木県日光市 藤原総合文化会館	▶テーマ「雪と共にある国際観光地～地域の安全とブランドを守るために」 ▶特別講演「こどもに教えたい雪崩の科学」 納口恭明（防災科学技術研究所） ▶基調講演「雪崩災害と対策の実際」 石井靖雄（土木研究所 雪崩・地すべり研究センター所長） ▶パネルディスカッション 斉藤文夫（日光市長）／宇佐見輝光（日光市三依地区自治会連合会会長）／小松正義（栃木県観光物産協会会長）／根本ゆかり（日光市小来川地区住民・獵友会） コメンテーター：石井靖雄（土木研究所 雪崩・地すべり研究センター所長） コーディネーター：坂本裕一（下野新聞社編集局地域センター長）

10. 砂防広報センター歴代役員

■砂防広報センター（任意団体）

1984(昭和59) 年度～

理事長	谷口 敏雄	代表理事	近森 藤夫
理 事	枸杞 芳彦／大工 原潮／田村 公平／中村 二郎／松林 正義／山口伊佐夫／渡辺 昌弘		
監 事	内田 辰丸／根本 善光		

1985(昭和60) 年度～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	関戸 研一／鈴木 宏／土岐 敬祐／松山 完／吉岡 良朗		
監 事	落合 皓／水越 三郎		

1987(昭和62) 年度～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	設楽 武久／鈴木 宏／安中 敏夫／松山 完／吉岡 良朗		
監 事	関川 和夫／水越 三郎		

1988(昭和63) 年度～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	設楽 武久／鈴木 宏／安中 敏夫／松山 完／吉岡 良朗		
監 事	関川 和夫／水越 三郎／重道 宏男		

1989(平成1) 年度～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	設楽 武久／鈴木 宏／安中 敏夫／今西 鉄哉／成田 久夫		
監 事	関川 和夫／水越 三郎／重道 宏男		

1991(平成3) 年6月～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／鈴木 宏／安中 敏夫／杉山 俊宏／水越 三郎／吉岡 良朗／重道 宏男／岸田 宏		
監 事	大井 英臣		

1991(平成3) 年9月～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／鈴木 宏／安中 敏夫／水越 三郎／吉岡 良朗／重道 宏男／岸田 宏		
監 事	杉山 俊宏／今村 龍陽		

1992(平成4) 年度～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／安中 敏夫／水越 三郎／吉岡 良朗／重道 宏男／岸田 宏		
監 事	杉山 俊宏／今村 龍陽		

1993(平成5) 年度～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／安中 敏夫／水越 三郎／吉岡 良朗／重道 宏男／岸田 宏／打荻 珠男		
監 事	杉山 俊宏／今村 龍陽		

1995(平成7) 年度～

理事長	釣谷 義範	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／安中 敏夫／水越 三郎／杉山 俊宏／重道 宏男／岸田 宏／打荻 珠男		
監 事	今村 龍陽／矢澤 昭夫		

1996(平成8) 年度～

理事長	内田 辰丸	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／安中 敏夫／水越 三郎／杉山 俊宏／重道 宏男／安江 朝光／大久保 駿		
監 事	今村 龍陽		

1998(平成10) 年度～

理事長	内田 辰丸	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／安中 敏夫／水越 三郎／杉山 俊宏／重道 宏男／安江 朝光／大久保 駿		
監 事	高橋 秀雄／田畑 茂清／今村 龍陽／小川 祐示		

1999(平成11) 年度

理事長	内田 辰丸	専務理事	内田 辰丸
理 事	戸田 寿彦／安中 敏夫／水越 三郎／杉山 俊宏／重道 宏男／大久保 駿／高橋 秀雄／田畑 茂清／保科 幸二		
監 事	今村 龍陽／小川 祐示		顧 問 武居 有恒／伊藤 和明
技術顧問	廣住 富夫／中村 三郎		

2000(平成12) 年度

理事長	内田 辰丸	専務理事	保科 幸二
理 事	池上 由美／石川 芳治／板垣 治／遠藤 利仁／尾形 明子／窪田 順平／小林 英昭／重道 宏男／高橋 秀雄／松井 宗廣／山田 美也子		
監 事	原木 正英／宮本 登		顧 問 武居 有恒／伊藤 和明
技術顧問	廣住 富夫／中村 三郎		

■NPO法人砂防広報センター

2001(平成13) 年度～

理事長	保科 幸二		
理 事	池上 由美／石川 芳治／板垣 治／遠藤 利仁／尾形 明子／窪田 順平／小林 英昭／重道 宏男／高橋 秀雄／松井 宗廣／山田美 也子		
監 事	原木 正英／宮本 登		顧 問 武居 有恒／伊藤 和明
技術顧問	廣住 富夫／中村 三郎		参 与 内田 辰丸／田畑 茂清

2002(平成14) 年度～

理事長	保科 幸二		
理 事	覚幸 公哉／池上 由美／石川 芳治／板垣 治／遠藤 利仁／尾形 明子／窪田 順平／小林 英昭／重道 宏男／高橋 秀雄／松井 宗廣／山田 美也子		
監 事	原木 正英／宮本 登		顧 問 武居 有恒／伊藤 和明
技術顧問	廣住 富夫／中村 三郎		参 与 内田 辰丸／田畑 茂清 ＊2003年まで

2004(平成16) 年度～

理事長	保科 幸二	専務理事	反町 雄二
理 事	池上 由美／石川 芳治／板垣 治／遠藤 利仁／尾形 明子／木村 久		
	窪田 順平／小林 英昭／東樹 芳雄／松井 宗廣／山田 美也子		
監 事	原木 正英／宮本 登	顧 問	武居 有恒／伊藤 和明
技術顧問	廣住 富夫／中村 三郎	参 与	内田 辰丸

2008(平成20) 年度～

理事長	保科 幸二	専務理事	反町 雄二
理 事	池上 由美／石川 芳治／遠藤 利仁／尾形 明子／木村 久／窪田 順平／小林 英昭／坂口 哲夫／東樹 芳雄／松井 宗廣／山田 美也子		
監 事	原木 正英／宮本 登	顧 問	武居 有恒／伊藤 和明
技術顧問	廣住 富夫／中村 三郎	参 与	内田 辰丸

2010(平成22) 年度～

理事長	保科 幸二	専務理事	反町 雄二
理 事	石川 芳治／亀江 幸二／坂口 哲夫／松井 宗廣／村上 隆博		
監 事	原木 正英／宮本 登	相談役	大久保 駿
参 与	五十 嵐武／中矢 弘明／吉田 三郎	技術顧問	杉本 良作／黒川 興及／覚幸 公哉

2012(平成24)～2013(平成25) 年度

理事長	保科 幸二	専務理事	反町 雄二
理 事	坂口 哲夫／原 義文／松井 宗廣／村上 隆博		
監 事	原木 正英／宮本 登		
参 与	五十 嵐武／中矢 弘明／吉田 三郎	技術顧問	杉本 良作／黒川 興及

■NPO法人土砂災害防止広報センター ※法人名変更

2014(平成26) ～

理事長	山本 賢一郎	専務理事	池田 一平
理 事	緒續 英章／青山 匡希	監 事	相浦 俊雄／花井 幸二
相談役	吉田 三郎	参 与	保科 幸二
参 事	反町 雄二	技術顧問	黒川 興及



砂防広報センター第二代理事長
釣谷 義範



砂防広報センター第三代理事長
内田 辰丸



NPO法人砂防広報センター理事長
保科 幸二



NPO法人土砂災害防止広報センター理事長
山本 賢一郎

11. 砂防広報センター年表

注1：「主な業務」のうち複数年度にわたるものは、適宜その開始年（一定期間継続の冊子の発行・講座など）または完了年（資料館の企画制作・映像制作など）に記載した。

注2：1996（平成8）年以前の業務については、「月刊メディア砂防」の記事などを参考に記述した。

年	砂防広報センターの動き・主な業務
1982 昭和57	主なできごと ■主な災害 7月 長崎豪雨災害（長崎大水害） ■砂防をめぐる動き 8月 建設省通達「総合的な土石流対策の推進について」
1983 昭和58	◎ 11月 砂防広報センター設立（事務所：千代田区平河町2―5―1） 初代理事長・谷口敏雄（一般国民に対し、土砂災害の実態と災害防止策に関する知識について啓発・普及活動を行うことを主な目的とする） 主なできごと ■主な災害 5月 日本海中部地震（M7.7） 7月 昭和58年7月豪雨災害 10月 三宅島噴火 ■砂防をめぐる動き ○土砂災害防止月間創設 7月 第1回土砂災害防止月間推進の集い「全国大会」長崎市で開催 ★世相 東京ディズニーランド開園／大韓航空機撃墜事件
1984 昭和59	◎ 4月 「月刊メディア砂防」創刊 ◎ 土砂災害防止月間ポスター・キャンペーン用品の企画制作開始 ◎ 砂防カレンダーの企画制作開始 ◎ 砂防副読本第1号「土砂災害を防ぐために」発行 《主な業務》 イベント 昭和59年度「砂防学会総会ならびに研究発表会」運営 '84国際河川博覧会「ジャパン・デイズ」特別ツアー 「花火大会」企画運営 主なできごと ■主な災害 2月 中里村清津峡雪崩災害 6月 五木村山崩れ災害 9月 長野県西部地震（M6.8） 12～1985.1月 五九豪雪 ■砂防をめぐる動き ○建設省通達「土石流危険渓流周辺における警戒避難基準の設定について」 ○総合土石流対策モデル事業始まる ○'84国際河川博覧会（ニューオーリンズ）に政府出展／河川博会場で「砂防大会」（6月） ★世相 グリコ・森永事件／ロサンゼルス・オリンピック／新札発行
1985 昭和60	◎ 4月 港区東麻布に移転 ◎ 釣谷義範、第2代理事長に就任 ◎ 砂防専門家を対象とした「砂防セミナー」を主催 （第1回名古屋市、以下第5回まで開催） 《主な業務》 イベント 「砂防に関する国際シンポジウム（つくば科博会場）」 会場設営・視察ツアー企画運営 映像 「土砂災害のお話」／「恐ろしい土砂災害」／「あの山があの川がなぜ―土砂災害はどうして起こる」 主なできごと ■主な災害 2月 青海町玉の木地すべり災害 7月 長野県地附山地すべり災害 11月 ネバド・デル・ルイス火山噴火災害 ■砂防をめぐる動き ○つくば科学万博政府出展で「土石流災害を防ぐ」をテーマとしたワークショップ／科学万博会場で「砂防に関する国際シンポジウム」（9月） ★世相 つくば科学万博／日航機御巣鷹山墜落事故／電電公社・専売公社民営化

年	砂防広報センターの動き・主な業務
1986 昭和61	◎ 8月 港区新橋5―30に移転 《主な業務》 イベント 「上高地から災害をなくす集い」企画運営 映像 「ハゲ山を緑に」 展示 第10回ウォーターフェア「水の展示会」（新宿副都心）展示制作 主なできごと ■主な災害 1月 能生町柵口雪崩災害 7月 梅雨前線豪雨災害 8月 8.5水害（台風10号豪雨） 11月 伊豆大島噴火災害（全島民島外避難） ■砂防をめぐる動き 9月 地域防災国際会議「21世紀を目指す地域計画」（名古屋） ★世相 チェルノブイリ原発事故／男女雇用機会均等法施行／円高不況／ハレー彗星大接近
1987 昭和62	《主な業務》 映像 「富山平野を守る」／「桜島の土石流」 主なできごと ■主な災害 7月 東日本で猛暑 10月 台風19号災害 12月 千葉県東方沖地震災害（M6.7） ★世相 国鉄民営化／NY株ブラックマンデー／大韓航空機爆破事件
1988 昭和63	《主な業務》 イベント 「鹿児島国際火山会議」企画運営 映像 「流域に生きる」／「木津川の砂防」／「真名川の砂防」 展示 「鹿児島国際火山会議砂防展―火山とくらし」企画制作 主なできごと ■主な災害 7月 広島県北西部豪雨災害 12月 北海道・十勝岳噴火 ■砂防をめぐる動き ○地すべり等防止法制定30周年 ○土石流危険渓流総合整備事業開始 3月 中央防災会議「土砂災害対策推進要綱」発表 7月 鹿児島国際火山会議 ★世相 青函トンネル・瀬戸大橋開通／リクルート事件／「ふるさと創生1億円」支給決定
1989 平成1	《主な業務》 イベント 平成元年度「雪崩防災週間シンポジウム（長岡市）」企画運営 映像 「ベネズエラの砂防」／「鬼怒川上流を守る」／「伊豆の自然を守る 狩野川直轄砂防」／「ふれあい重信川」 主なできごと ■砂防をめぐる動き ○急傾斜地法制定30周年 ○総合土砂災害対策モデル事業（地すべり）開始 7月 伊東市沖・手石海丘で海底噴火 12月 雪崩防災週間創設大会（新潟県） ★世相 昭和から平成へ／消費税導入（3％）／天安門事件／ベルリンの壁崩壊／日経平均株価最高値（3万8,915円）
1990 平成2	《主な業務》 イベント EXPO '90 国際花と緑の博覧会「さばうランド」企画制作運営 SABO国際シンポジウム「緑の興亡（変遷）」企画 平成2年度「雪崩防災週間シンポジウム（青森市）」企画運営 映像 「南アルプスとともに―富士川砂防事業」／「鼓動する山河」 主なできごと ■主な災害 7月 九州地方梅雨前線豪雨災害 9月 台風19号災害 11月 雲仙普賢岳198年ぶりに噴火 ■砂防をめぐる動き ○「国際防災の10年」初年 ○砂防協会設立50周年 ○花博「さばうランド」出展／花博会場でSABO国際シンポジウム開催（8月） 12月 第1回雪崩シンポジウム（青森市）開催 ★世相 国際花と緑の博覧会／新都庁移転

年	砂防広報センターの動き・主な業務	
1991 平成3	《主な業務》 ●イベント 「'91火山砂防フォーラム（草津町）」企画運営 伊那谷三六災害30年記念行事 企画 平成3年度「雪崩防災週間シンポジウム（福井市）」企画運営 ●映像 「四国の地すべり」5部作 ●展示 「砂防資料館（吉野川）」企画制作	
	主なできごと ■主な災害 6月 フィリピン、ピナトゥボ火山噴火 6月 雲仙・普賢岳、大火砕流災害 9月 台風19号災害・風倒木被害 ■砂防をめぐる動き ○火山砂防フォーラム始まる（第1回は群馬県草津市で開催） ○土砂災害危険箇所マップの配付始まる 1月 砂防関係事業費4,000億円を超える 10月 砂防フロンティア整備推進機構設立	
1992 平成4	● 降雨体験装置の1号機を制作（多治見砂防国道事務所発注） 《主な業務》 ●イベント 国際自然災害防止シンポジウム「インタープリメント1992（スイス・ベルン）」参加ツアー企画運営 姫川水系直轄砂防30周年記念「国際アルプスサミット&景観シンポジウム」参加ツアー企画運営 「濁流の子」30年記念座談会開催 「'92火山砂防フォーラム（鹿児島市）」企画運営 平成4年度「雪崩防災週間シンポジウム（長野市）」企画運営 ●映像 「大のけと人柱伝説」／「北アルプス 上高地」他 「亀の瀬―スリッストップストーリー」（アニメーション、亀の瀬地すべり対策事業直轄施行30周年記念） 「吉野川砂防」 ●印刷物 「濁流の子―伊那谷災害の記録」復刻	
	主なできごと ■砂防をめぐる動き ○第8次治水5箇年計画開始 ○火山対策事業創設 ○火山・土石流対策官設置 7月 全国がけ崩れシンポジウム（急傾事業25周年） 7月 国際アルプスサミット（長野県松本市） ★世相 佐川急便事件／PKO協力法成立／山形新幹線開通／学校5日制開始	
1993 平成5	《主な業務》 ●イベント 中部地建セイフティアップSABOフェア「砂防が創る緑と環境」企画運営 「'93火山砂防フォーラム（美瑛町）」企画運営 砂防フォーラム「溪流環境の創造」企画運営 「御嶽山SABOリンピック'93」企画 平成5年度「雪崩防災週間シンポジウム（富山市）」企画運営 ●映像 「うそ？ほんと！ 地すべりの話」 ●展示 「中央構造線博物館」砂防展示の企画制作	
	主なできごと ■主な災害 1月 釧路沖地震（M7.5） 2月 能登半島沖地震（M6.6） 7月 北海道南西沖地震（奥尻島地震、M7.8） 7月 ネパール洪水 8月 平成5年8月豪雨災害 9月 台風13号災害 ■砂防をめぐる動き ○第3次急傾斜地崩壊対策事業開始 4月 雲仙復興工事事務所開設 ★世相 連立政権成立／Jリーグ開幕／コメ大凶作で緊急輸入／平成不況	

年	砂防広報センターの動き・主な業務	
1994 平成6	● 4月 「月刊メディア砂防」A4判に 《主な業務》 ●イベント 「'94火山砂防フォーラム（島原市）」企画運営 世界リゾート博国際SABOシンポジウム「快適で安全なリゾートをめざして」企画運営 「治水・砂防に関する国際セミナー」（ネパール・カトマンズ）参加ツアー企画運営 中部地建「セイフティアップSABOフェア'94」企画運営 平成6年度「雪崩防災週間シンポジウム（秋田市）」企画運営 ●映像 「薙に挑む一大薙山腹工」 ●印刷物 「常願寺川たんけんブック」立山砂防副読本／「桜島の土石流」パンフレット ●展示ほか 羽根谷だんだん公園・砂防遊学館 企画制作	
	主なできごと ■主な災害 10月 北海道東方沖地震（M8.1） 12月 三陸はるか沖地震（M7.6） ■砂防をめぐる動き ○情報基盤緊急整備事業 8月 世界リゾート博「国際SABOシンポジウム」 ★世相 松本サリン事件／金日成没	
1995 平成7	● 降雨体験装置2号機を制作、「降雨集合装置」が特許案件に該当 ● 初の土石流模型実験装置を制作 《主な業務》 ●イベント 第13回土砂災害防止月間推進の集い「全国大会（別府市）」 企画運営 「'95火山砂防フォーラム（安曇村）」 企画運営 中部地建「セイフティアップSABOフェア'95」 企画運営 「地すべりフォーラム in TONEGAWA」 企画運営 「'95吹上浜砂の祭典」（第9回）の砂像コンテスト全国大会に初参加 ●映像 「阪神淡路大震災」	
	主なできごと ■主な災害 1月 兵庫県南部地震（M7.3、阪神淡路大震災） 7月 平成7年梅雨前線豪雨 北信越災害 10月 九重山（大分県）噴火 ■砂防をめぐる動き 8月 1995国際SABOシンポジウム 11月 地すべりフォーラム in TONEGAWA（地すべりフォーラムの第1回） ★世相 地下鉄サリン事件／高速増殖炉もんじゅ事故	
1996 平成8	● 内田辰丸、第3代理事長に就任 ● 降雨体験装置の3号機として、車載可能型を制作 ● 土石流模型実験装置の「人力による移動装置」が特許案件に該当 《主な業務》 ●イベント 平成7年度「雪崩防災週間シンポジウム（高山市）」企画運営 第14回「全国大会（神戸市）」企画運営 「'96火山砂防フォーラム（上山市）」企画運営 利根川上流砂防事業60周年・砂防法制定100年記念「砂防・地域づくり夢フォーラム」企画運営 「阿賀野川地すべりフォーラム」基本計画策定 亀の瀬地すべり地見学イベント企画運営 ●映像 「オーストリアの砂防」3部作／「もう一つの立山―立山砂防」 ●印刷物 定期刊行物「六甲I・NETニュース」制作開始 ●その他 砂防に関するゲームソフト（吉野川）企画制作 降雨体験装置制作	
	主なできごと ■主な災害 11月 雌阿寒岳（北海道）噴火 12月 蒲原沢土石流災害 ■砂防をめぐる動き ○砂防ボランティア制度発足 ○斜面判定土制度開始 ○「都市山麓グリーンベルト整備事業」開始 ○「キャンプ砂防」開始 ★世相 O・157感染拡大／民主党結成／ペルー大使館人質事件発生	

年	砂防広報センターの動き・主な業務	
1997 平成9	《主な業務》 ● イベント 平成8年度「雪崩防災週間シンポジウム（山形市）」企画運営 第15回「全国大会（吹田市）」企画運営 「1997地すべりフォーラム in新庄」企画運営 「'97火山砂防フォーラム（箱根町）」企画運営 六甲グリーンベルト植樹体験教室 企画運営 「'97吹上浜砂の祭典」（第11回）で普賢岳と砂防施設の砂像制作 ● 映像 「砂防と北アルプスの四季」6部作 ● 印刷物 「自然の復元」（松下忠洋著）／「越美山系工事事務所30周年記念誌」 ● その他 降雨体験装置制作	
	主なできごと ■主な災害 5月 熊沢川土砂災害 7月 出水市・針原川土石流災害 8月 秋田焼山噴火 ■砂防をめぐる動き> ○「水辺の楽校」モデル事業開始 3月 国際治水砂防シンポジウム 6月 第15回「全国大会」（大阪府吹田市）にて砂防ボランティア全国連絡協議会発足 ★世相 消費税 5 %に／秋田新幹線・長野新幹線 開通／香港、中国へ返還／地球温暖化防 止京都会議	
1998 平成10	● 6月 「月刊メディア砂防」新装丁、この月から「砂防の現場に携わる人の情報誌」に ● 「砂防関係工事現場代理人の会」事務局、砂防広報センターに置かれることとなる 《主な業務》 ● イベント 平成9年度「雪崩防災週間シンポジウム（金沢市）」企画運営 第16回「全国大会（糸魚川市）」企画運営 「'98火山砂防フォーラム（七飯町）」企画運営 日光直轄砂防80周年の集い「砂防・夢フォーラム」 企画運営 「国際砂防林シンポジウム」企画運営 「木曽川流域の砂防の歴史をたどるウォークラリー」企画 ● 映像 「黒淵地すべりー地すべりとまちづくり」／「土砂災害に備えて」3D映像 ● 印刷物 「戦後の砂防技術小史」／「湯沢砂防60年誌」 ● 展示 「立山カルデラ砂防博物館」企画制作 ● その他 常願寺水系の砂防に関する子ども向けCD—ROM制作	
	主なできごと ■主な災害 8月 台風4号 ■砂防をめぐる動き ○土砂災害危険地域であることを住民に伝えるダイレクトメールの発送 ○砂防関係工事現場代理人の会発足 ○立山カルデラ砂防博物館開館 ★世相 長野冬季五輪／明石海峡大橋開通／和歌 山カレー事件	
1999 平成11	《主な業務》 ● イベント 平成10年度「雪崩防災週間シンポジウム（会津若松市）」企画運営 第1回「魚沼自然塾」 企画運営（以後継続） 第17回「全国大会」（富山市）企画運営 富士直轄砂防30周年記念式典「富士山の昨日・今日・明日」企画 「1999地すべりフォーラム in大豊」企画運営 ● 映像 「幸田文 崩れ」ハイビジョン映像 ● 印刷物 「飯豊山系砂防30周年記念施設写真集」／「松本砂防管内事業概要図」 ● 展示 立山カルデラ砂防博物館「幸田 文」展 企画 「多治見砂防ギャラリー」展示企画制作 「亀の瀬地すべり資料館」基本構想作成 「桜島火山砂防センター」企画	
	主なできごと ■主な災害 6月 平成11年6.29豪雨災害（広島災害） 9月 台湾・集集大地震（M7.6） ■砂防をめぐる動き> 6月 第17回「全国大会」（富山県富山市）にて安全施工管理技術研究発表会開催 ★世相 日銀ゼロ金利政策／失業者300万人突 破／東海村で国内初の臨界事故／マカオ、 中国に返還	

年	砂防広報センターの動き・主な業務	
2000 平成12	● 10月 港区新橋6—13に移転 《主な業務》 ● イベント 平成11年度「雪崩防災週間シンポジウム（水上町）」企画運営 第18回「全国大会（宇都宮市）」企画運営 「地すべりフォーラム2000にしあいづ」企画運営 「砂防・夢フォーラム（渡良瀬川）」企画運営 「富士川砂防40周年記念シンポジウム」企画 富士砂防30周年記念シンポジウム「富士山の自然と保全」企画運営 フォーラム「デ=レイケと常願寺川」企画運営 「さぼらランド10周年記念フォーラム」企画運営 平成12年度「雪崩防災週間シンポジウム」企画 「2000火山砂防フォーラム（雲仙）」企画運営 ● 映像 「恵南豪雨災害ドキュメント～天空のさけび 平成12年9月12日」 「富士山の砂防」6部作 ● 印刷物 「木曽川流域砂防副読本」 「平成11年9月5日豪雨災害被災体験記」 ● 展示 「砂防ギャラリー（天竜上流）」企画	
	主なできごと ■主な災害 3月 有珠山（北海道）噴火 7月 神津島近海地震 7月 三宅島雄山噴火（9月、全島避難） 9月 駒ヶ岳（北海道）噴火 9月 東海豪雨災害 10月 鳥取県西部地震（M7.3） ■砂防をめぐる動き ○土砂災害情報相互通報システム整備事業開始 5月 土砂災害防止法制定 ★世相 ユーゴスラビア崩壊／沖縄サミット／生 保会社破綻相次ぐ	
2001 平成13	● 特定非営利活動法人（NPO）の認定を受ける ● NPO初代理事長・保科幸二 《主な業務》 ● イベント 平成12年度「雪崩防災週間シンポジウム（横田町）」企画運営 第19回「全国大会（倉吉市）」企画運営 「2001火山砂防フォーラム（大島町）」企画運営 「広島西部山系砂防シンポジウム」企画 「2001地すべりフォーラム in 大鹿」企画運営 「平成13年度嶺北水源地シンポジウム」企画運営 ● 映像 「僕は砂防の専門家」 「北アルプス地域の暮らしを守るー松本砂防工事事務所の取り組み」 「砂防百年の歩みー瀬田川の砂防事業」 ● 印刷物 「四ツ目川災害70年誌」 ● 展示 立山カルデラ砂防博物館「赤木正雄」展 企画／映像制作 「白山砂防科学館」企画	
	主なできごと ■主な災害 3月 2001年芸予地震（M6.7） ■砂防をめぐる動き ○砂防ボランティア基金設立 1月 建設省から国土交通省に改組、砂防部砂防計画課および保全課発足 ★世相 ハワイ沖えひめ丸事件／池田小学校児童 殺傷事件／9.11同時多発テロ／アフガニ スタン・タリバン政権崩壊	

年	砂防広報センターの動き・主な業務
2002 平成14	《主な業務》 ●イベント 平成13年度「雪崩防災週間シンポジウム（湯田町）」企画運営 第20回「全国大会（岐阜市）」企画運営 「2002火山砂防フォーラム（虻田町）」企画運営 インタープリメント2002「現地見学会」「小学生インタープリメント」企画運営 雲仙復興工事事務所10周年記念式典「これまでの10年、これからの10年」企画 ●映像 「Youちゃんの魚沼うおッチング」／「平成の鳶山崩れ」3D化 「焼岳火山砂防―自然と暮らしを守る」 ●展示 立山カルデラ砂防博物館企画展「安政の鳶崩れ」企画制作 地附山地すべり資料館 企画制作 大野木場みらい館 企画・展示製作 「重信川砂防資料館」砂防実験模型制作 ●その他 湯沢砂防 土石流災害体験装置制作 六甲砂防 砂防施設模型・グリーンベルト模型制作 主なできごと ■主な災害 7月 台風6号 8月 伊豆・鳥島噴火 ■砂防をめぐる動き ○国際自然災害防止シンポジウム（インタープリメント2002）長野県松本市で開催 ○「土砂災害警戒情報」4県で試行開始（2008年までに全都道府県で発表が始まる） ★世相 学校完全週休2日制（ゆとり教育）／日韓ワールドカップ／住基ネット稼働開始／拉致被害者帰国
2003 平成15	《主な業務》 ●イベント 平成14年度「雪崩防災週間シンポジウム（余呉町）」企画運営 第21回「全国大会（静岡市）」企画 「2003地すべりフォーラム in 白峰」運営 フォーラム「立山の崩れと生きる」企画運営 「2003火山砂防フォーラム（上宝村）」企画運営 第3回日伊土砂災害防止技術会議 運営 平成15年度「雪崩防災週間シンポジウム」企画 NPO法人福井県砂防ボランティア協会講演会企画 ●映像 「火山災害に備えて」3D映像／「瀬田川の砂防技術」4部作／「こまった土石流」アニメーション ●印刷物 「普賢さんとわたしたち」砂防副読本 ●展示 「飯島町砂防情報センター」展示企画制作 ●その他 総合学習教材CR―R「命を守る土砂防災の知恵」制作 主なできごと ■主な災害 7月 九州地方梅雨前線豪雨 9月 2003年10勝沖地震（M7.1） ★世相 フセイン政権崩壊／日本郵政公社発足
2004 平成16	◎ 4月 千代田区五番町に移転 《主な業務》 ●イベント 平成15年度「雪崩防災週間シンポジウム（新潟市）」企画運営 松本市議会議員を対象とした砂防見学会企画運営 第22回「全国大会（松山市）」企画運営・広報資料制作 「2004火山砂防フォーラム（西根村）」企画運営 ●映像 新潟県中越地震の対応に関する記録映像／「砂防えん堤のはたらき」3D映像 「土石流と砂防えん堤」3D映像 ●防災教育 十勝岳周辺小中学校の総合学習のための見学コース設定／見学パンフレット作成／見学会実施 ●その他 新庄管内事業の広報評価システムの検討他 越美地域住民・観光客に対する防災広報計画の策定 主なできごと ■主な災害 7月 平成16年7月新潟・福島豪雨災害 7月 福井豪雨災害 8月 台風10・11号、15号、16号災害 9月 台風18号、21号災害 9月 浅間山噴火 10月 台風22号、23号災害 10月 新潟県中越地震（M6.8） 12月 スマトラ島沖地震（M9.1）、津波 ★世相 鳥インフルエンザ／自衛隊イラク派遣 風上陸数戦後最多／スマトラ島沖地震津波

年	砂防広報センターの動き・主な業務
2005 平成17	《主な業務》 ●イベント 平成16年度「雪崩防災週間シンポジウム（小樽市）」企画運営 第23回「全国大会（鹿児島市）」企画運営 「2005火山砂防フォーラム（富士宮市）」企画 「第15回全国川サミット in 揖斐川」広報活動計画検討 「愛・地球博」長久手会場及び瀬戸会場の砂防展示企画制作運営／イベント企画運営 ●映像 「崩れ―大地のいとなみと私たち」3D映像 ●印刷物 「常願寺川フィールドミュージアムガイドブック」（常願寺川砂防100年・立山砂防80年記念冊子） ●展示 「最上川資料館」企画制作 主なできごと ■主な災害 3月 福岡県西方沖地震（M7.0） 7月 梅雨前線豪雨災害 9月 台風14号災害 ■砂防をめぐる動き ○「愛・地球博」国土交通省出展で砂防に関する展示（3月～9月） ★世相 日本国際博覧会（愛・地球博）／JR福知山線脱線事故／ハリケーン「カトリーナ」
2006 平成18	◎ 油圧式降雨体験装置を開発・制作 《主な業務》 ●イベント 平成17年度「雪崩防災週間シンポジウム（白馬村）」企画運営 第24回「全国大会（秋田市）」企画運営 「2006火山砂防フォーラム（三宅島）」企画運営 羽越災害40年記念事業企画 常願寺川砂防100周年記念事業企画 「2006地すべりフォーラム in 由比」企画 ●映像 「ぼくらの大鹿村」3D映像 ●展示 「西湖いやしの里根場砂防資料館」 企画制作 「アルプス公園中継所」砂防展示企画 「桜島国際火山砂防センター」リニューアル企画制作 ●防災教育 防災教育指針策定（飯豊山系） 主なできごと ■主な災害 7月 平成18年7月豪雨災害 9月 台風13号豪雨災害 ★世相 ライブドア事件
2007 平成19	◎ 「砂防資料館ネットワークニュース」発行開始（～2009年3月まで） 《主な業務》 ●イベント 平成18年度「雪崩防災週間シンポジウム（豊岡市）」企画運営 第25回「全国大会（金沢市）」企画運営 「2007火山砂防フォーラム（都城市）」企画運営 ●映像 「土砂の移動と人々の暮らし」3D映像 ●印刷物 「中城地すべり関連技術記録集」 「かごしま 土砂災害攻略本」 ●防災教育 土砂災害から身を守る学習・教育手法検討（大隅） ●その他 土砂災害情報認知度調査（越美） 土砂災害関連情報に関する認知度向上のための指針立案（天竜上流） 安倍川流域土砂災害情報認知度向上指針立案 主なできごと ■主な災害 3月 能登半島地震（6.9） 7月 新潟中越沖地震（M6.8） 7月 台風4号及び梅雨前線豪雨災害 9月 2007年スマトラ島沖地震（M8.0） ★世相 食品偽装事件多発／PASMOスタート／年金不払い問題

年	砂防広報センターの動き・主な業務	
2008 平成20	◎ ホームページで「砂防の石碑」マッピング開始 《主な業務》 ■イベント 平成19年度「雪崩防災週間シンポジウム（南砺市）」企画運営 「安政の飛越地震」150年シンポジウム企画運営 第26回「全国大会（松本市）」企画運営監理 「2008火山砂防フォーラム（糸魚川市）」企画運営 ■映像 「避難していてよかった」ドキュメンタリーDVD／「みっちゃんの砂防教室」 ■印刷物 岩手・宮城内陸地震への対応記録集 大谷崩300年事業記念誌「大谷崩と生きる～崩れ文化の継承と静岡のあした～」 「西湖いやしの里砂防資料館」リニューアル企画制作 ■展示 十勝岳周辺の防災教育支援資料作成等 広島西部山系内の小中学校における土砂災害教育ガイドライン作成 防災教育の効果測定（四国山地） 「大野木場砂防みらい館」展示関連防災啓発広報資料の制作 ■その他 大規模土砂災害時のTEC—FORCEの行動計画指針作成 土石流映像解析／データ作成（雲仙）	
	主なできごと ■主な災害 5月 中国・四川大地震（M8.0） 6月 岩手・宮城内陸地震（M7.2） 8月 平成20年8月末豪雨 ■砂防をめぐる動き ○小学校の学習指導要領改定により、2011年から小6理科で「地震」「火山」、小5社会で「自然災害の防止」が必修に 9月 「緊急地震速報」運用開始 ★世相 イーゼス艦あたご衝突事故／世界同時金融危機	
2009 平成21	◎ 4月 中央区日本橋中洲に移転 《主な業務》 ■イベント 平成20年「雪崩防災週間シンポジウム（北秋田市）」企画運営 第27回「全国大会」企画運営 「2009火山砂防フォーラム（鹿児島市）」企画運営 桜島の火山災害に関するワークショップ 企画運営 平成21年「雪崩シンポジウム（日光市）」資料作成 月山地区地すべり対策事業に関する公開討論会運営 ■映像 「がけ崩れを知ろう」3D映像 ■防災教育 「土砂災害防止教育支援ガイドライン（案）」作成 学校教育における防災学習支援資料作成（四国山地） ■その他 新潟県中越地震を踏まえた「情報発信」「防災活動」のための活動計画策定 立山砂防の歴史資料データベース作成 霧島火山の噴火被害軽減のための火山防災マップ作成検討 雲仙地域における地域防災力向上のための住民意識調査と防災文化継承手法の検討	
	主なできごと ■主な災害 7月 平成21年7月中国・九州北部豪雨 8月 平成21年台風9号災害 8月 駿河湾地震（M6.5） ■砂防をめぐる動き ○「直轄特定緊急砂防事業」創設 ○「月山地区（山形県）直轄地すべり対策事業」新規着手 ○立山カルデラ「白岩堰堤砂防施設」が砂防施設として初の国重要文化財に ○「里山砂防」重点施策に ○「砂防フィールドミュージアム」始動 ★世相 新型インフルエンザ発生／民主党政権（2009.8～2012.12）／裁判員裁判開始	

年	砂防広報センターの動き・主な業務	
2010 平成22	《主な業務》 ■イベント 第28回「土砂災害防止全国の集い（広島市）」企画 「2010火山砂防フォーラム（婦恋村）」企画運営 ■映像 「広島県の土砂災害から身を守る」3D映像 「山が崩れる」3D映像 ■防災教育 十勝岳周辺地域における防災学習教室の企画検討 防災教育支援の効果評価検討（四国山地） 小中学校における防災教育の手法検討のための意識調査（雲仙） 常願寺川流域の総合防災学習のための学習資料と手引き作成 ■その他 地域防災力向上のための活動方針検討（新庄） 浅間山の災害記録収集整理 芋川砂防フィールドミュージアム計画を踏まえた地域復興・防災継承のための行動計画案作成 駒ヶ根高原砂防フィールドミュージアムを活用した防災意識啓発資料の作成	
	主なできごと ■主な災害 7月 平成22年7月広島県豪雨災害 8月 観測史上1位の猛暑 10月 奄美大島豪雨災害 ■砂防をめぐる動き ○国土省砂防部、深層崩壊に関する全国マップを発表 ○「土砂災害防止法」一部改正（2011年5月施行） 6月 第28回「全国の集い」（広島県広島市）、「全国大会」から名称変更 ★世相 宮崎県で口蹄疫／惑星探査機「はやぶさ」地球に帰還／所在不明高齢者問題	
2011 平成23	◎ 「メディア砂防」2012年3月の第330号をもって休刊 《主な業務》 ■イベント 「2011年火山砂防フォーラム（美瑛町）」要領検討 「中津川砂防講演会」シナリオ作成 ■映像 「地すべり地の歴史を訪ねて」2部作 ■印刷物 「地震のあとは土砂災害に注意」東日本大震災被災地に向けた啓発チラシ ■展示 赤木正雄生家資料室の展示企画 地すべり資料館（上越市）リニューアル企画・制作 ■防災教育 十勝岳周辺小中学校「防災教室」実施 防災学習のためのデータベース構築と地域のリスク評価（多治見） 防災教育と災害伝承のための実施案作成（雲仙） 土砂災害に関する防災教育支援資料の検討制作（四国山地） ■その他 地域防災力向上に向けた住民調査（新庄） 芋川砂防フィールドミュージアム計画案作成 富士川砂防事業広報用資料作成のための基礎データの収集・要約	
	主なできごと ■主な災害 1月 平成23年豪雪 1月 霧島火山・新燃岳の噴火活動始まる 3月 東北地方太平洋沖地震（M9.0、東日本大震災） 3月 長野県北部地震（M6.7） 3月 静岡県東部地震（M6.4） 9月 平成23年台風12号災害（紀伊半島豪雨） ■砂防をめぐる動き ○小学校の学習指導要領改定により、小5社会科で「土砂災害の防止」が必修となる（中学校は2012年から） ○土砂災害防止法の一部改正法施行。付帯決議で「学校教育における防災知識の普及」を重点施策と位置付け ○東日本大大震災で「釜石の奇跡」注目 ○この年の「全国大会」、東日本大震災発生の影響で中止 ★世相 東日本大震災・福島原発事故／高病原性鳥インフルエンザ／地上デジタル放送移行	

年	砂防広報センターの動き・主な業務	
2012 平成24	● ホームページリニューアル、「防災学習お役立ちページ」など充実 ● ブログ公開開始 《主な業務》 イベント 第30回「全国の集い（長崎市）」運営計画作成と運営支援 「2012火山砂防フォーラム（仙北市）」企画運営 平成24年度シンポジウム「中山間地の砂防を考える in TOKAI」企画運営 映 像 「新潟中越地震 大地と人のドキュメント」 印刷物 「秋田駒ヶ岳火山痕跡マップ」 「桜島火山砂防調査研究成果集」（日英版、ダイジェスト版） 「地域防災力向上活動推進の手引き」（新庄） 防災教育 秋田駒ヶ岳周辺地域児童を対象とした防災教育のための「防災学習推進の手引き」作成 小中学生のための富士川砂防事業の説明資料作成 姫川流域の防災学習支援資料の検討 その他 HP上の三六災害アーカイブ立ち上げ等 主なできごと ■主な災害 2月 秋田県玉川温泉雪崩 7月 平成24年7月九州北部豪雨 ★世相 東京スカイツリー開業／金環食観測（5月）／笹子トンネル天井版崩落事故	
2013 平成25	● スマホ用「土砂災害防止啓発アプリ」を提案 ● 砂防副読本を改訂 《主な業務》 イベント 第31回「全国の集い（松江市）」企画 「2013火山砂防フォーラム（北塩原村）」企画運営 印刷物 「見どころマップ（梓川・高瀬川・姫川流域）」 展 示 「赤木正雄展示館」展示制作 「SABOインフォメーションセンター（日光郷土センター内）」リニューアル企画制作 防災教育 小学生のための利根砂防管内の防災学習資源の調査検討 その他 八幡平山系火山砂防事業に関する広報資材企画立案 吾妻山・安達太良山・磐梯山周辺地域住民の住民意識調査等 芋川流域の砂防について地域住民に説明するための資料作成等 駒ヶ根砂防フィールドミュージアム活用促進のための資料作成 磐梯山の防災対策に関する広報活動等の計画立案 多治見砂防管内の歴史資料の調査活用検討―土岐川、木曽川 主なできごと ■主な災害 1～2月 平成25年豪雪 7月 山口島根豪雨災害 10月 平成25年台風26号災害（伊豆大島土石流） 11月 小笠原諸島・西ノ島沖で海底火山噴火、新島出現 ■砂防をめぐる動き 6月 富士山「世界文化遺産」に 8月 気象庁「特別警報」の運用開始 ★世相 竹島・尖閣諸島をめぐる韓国・中国との関係悪化	
2014 平成26	● 6月 組織の名称を変更し、NPO土砂災害防止広報センターとなる	

砂防広報センター 30年のあゆみ

平成26年12月

編集・発行：NPO法人 土砂災害防止広報センター

（旧 NPO法人 砂防広報センター）

東京都中央区日本橋中洲4番11号

電話 03(5614) 1114